

●イタリア語訳『源氏物語』「桐壺」データ

小見出し	原文（池田本校訂本文・伊藤先生作成）	イタリア語訳し戻し（Orsi 先生訳）	イタリア語訳し戻し（Motti 氏訳）
1 ある帝の御代に、身分は高くない更衣への帝寵を女御方は憎悪する「いづれの御時〜」（0001 / 五① / 一七）	いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。	どの帝の御世であったか、女御や更衣が大勢仕えていた中に、さほど高い身分ではなかったものの、とりわけ帝の寵愛を受けている女性がいた。身分の高い女御は、自分こそが選ばれるべきだと思いがっており、彼女を軽蔑し、ひどく妬んでいた。同じ身分、またはそれより低い身分の更衣はなおさら気分がおさまらない。	(いつの時代だったか) ある帝の御世では、大勢仕えていた女御や更衣の中で、さほど高い身分ではなかったものの、他の女性に比べてとりわけ寵愛を受けていた女がいた。自分こそ帝に選ばれるべき存在だと内心思っていた身分の高い女御は、彼女らの夢を壊したその下賤な女を嘲笑し、恨んだ。身分が高くない更衣たちも、その特別扱いの様子をみて、なおさら気分が収まらない。
2 帝から寵愛される桐壺更衣は、周囲からの嫉妬が集中し病弱となる「朝夕の宮仕〜」（0031 / 五④ / 一七）	朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかすはれなるものに思ほして、人の譏りをえ憚らせたまはず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人なども、あいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。	朝夕の宮仕えで、絶えず剥き出しの悪意に晒され、恨みを買うことが積もりに積もったせいか、その女性が病気になるまでふさぎこんでしまい、実家に帰りがちになったが、帝はたまたま不憫に思い、どんなに非難されてもまったく聞く耳を持たず、噂の種になるほど彼女を可愛がり続けた。不本意ながら巻き込まれた高官や殿上人は、目を逸らすほど腹立たしい思いでいっぱい、まったく見てられない愛され方であること、	このように、その女性は宮廷において優位に立っているように見えたが、その反面みんなの恨みと妬みの的となっていた。やがて、日ごろの横暴な言動や行動に疲れたせいか、病弱になり、ふさぎ込んでいるときが多く、実家に帰りがちになった。しかし、彼女が病気が味で明るくなくなっていても、帝は飽きることなく、かえって日に日に優しくなり、たとえ周りに非難されても全く無関心だった。次第にその行動は世間に知れ渡り噂の種となったが、彼を支えていた宮廷人や男爵でさえも、帝の行動を理解できず、異常な執着だと思い始めたほどだった。
3 中国の楊貴妃まで引き合いに出される桐壺更衣は、帝の愛情に頼る唐土にも〜」（0073 / 五⑧ / 一七）	唐土にも、かかることの起こりにこそ、世も乱れ悪しかりけれと、やうやう天の下にも、あぢきなう人のもて悩みぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いとほしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへの類ひなきを頼みにて、まじらひたまふ。	そして唐土でも、似たようなことが原因で世が乱れた、と囁いていた。時間が経つにつれて、それが世間でも悩みや不満の種となって、楊貴妃の例までが出されるようになった中で、多くの侮辱に耐えながらも、帝のくらべものにならない愛情に支えられて、桐壺の更衣は宮殿での生活を続けることができた。	海外では似たようなことが原因で世が乱れたと囁かれて、玄宗皇帝 (2) の愛人だった楊貴妃の例を出す人もいた。しかし、宮廷で不満が広まっていたにも関わらず、帝の愛情に守られていたので、公然と彼女に被害を加えようとする者がいなかった。
4 桐壺更衣は父大納言の没後に入内し、孤立無援の宮中で心細い生活「父の大納言〜」（0103 / 五⑩ / 一八）	父の大納言は亡くなりて、母北の方なん、いにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえ華やかなる御方々にもいたう劣らず、何事の気色をももてなしたまひけれど、とりたててはかばかしき後見しなければ、ことある時は、なほよりどころなく心細げなり。	大納言だった父親は亡くなっていて、由緒ある家筋の出だった母親は、父親の力のおかげで華やかな生活を送っている娘たちに対して引け目を感じさせないように、あらゆる儀式に必要なものを揃えて与えていたけれども、頼れる人がいなかったで、事ある毎に、やはり拠り所がなく、更衣がひどく寂しかったのである。	大納言だった更衣の父親は、彼女がまだ子供のときに亡くなった。母親は父親が生きていたときにかなり高い地位まで上り詰めたことを片時も忘れることがなかった。よって、大変だったろうに、両親が揃って、経済的にも余裕がある家の娘たち (B) に対して引け目を感じさせないように、一生懸命頑張って、自分の娘に優れた教育を受けさせた。後ろ盾になるような人がいればまた話が違っていただかもしれないが、残念ながら更衣の母親は一人ぼっちだった。相談に乗ってくれる人も、助けてくれる人もおらず、事が起こる毎にそのことを悔やんだ。
5 美しい玉の男御子が誕生し、帝は第一皇子よりこの弟宮を寵愛する「前の世にも〜」（0136 / 六① / 一八）	前の世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧ずるに、めづらかなるちごの御容貌なり。一の御子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲けの君、と世にもてかしづききこゆれど、この御匂ひには並びたまふべくもあらざりければ、大方のやむごとなき御思ひにて、この君をば、私ものに思ほしかしづきたまふこと限りなし。	前世でも帝と縁が深かったか、更衣は世にまたとない宝石のような赤ん坊を産んだ。帝は会うのが待ち遠しく、急いで宮殿に連れてこさせた頃、生まれた子は稀にみる容貌だと、自分の目で確かめた。長男は、右大臣の娘である女御から生まれ、間違いなく皇位継承者になるであろうと思われる大切にされていたが、しかし生まれたばかりの赤ん坊の輝くような美しさには並びようもなく、帝はみんなの前で長男に目をかけるようにしていたものの、プライベートではこの子を秘宝のように可愛がっていた。	だが、更衣の話に戻ろう。やがて彼女と帝の間に子供が生まれた。前世でも二人は深い縁で結ばれていたせいか、その子供はこの世で希にみる優しさや賢さを持ち合わせていた。帝は息子に会いたいかばかりに痺れを切らしていた。やっと子供との対面が許されたときに、彼の美しさについて聞いていた噂は嘘ではなかったことを自分の目で確かめることができた。帝には既に息子がいたのだが、その子供は右大臣の娘だった弘徽殿婦人との間にできていた子供で、皇位継承者になるであろうと思われる、みんなに大切にされていた。しかし、長男は生まれたばかりの赤ん坊ほど美しくはなかった。そして、帝は赤ん坊の母親をあまりに愛していたせいか、その子供に対しても特別な思いを抱いていた。
6 帝は桐壺更衣を厚遇し、弘徽殿女御は我が皇子の立場に疑いを抱く「はじめより〜」（0184 / 六⑦ / 一九）	はじめより、おしなべての上宮仕へしたまふべき際にはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせたまふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑあることの節々には、まつ参上らせたまふ、ある時には大殿籠り過ぐして、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽きかたにも見えしを、この御子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずは、この御子のゐたまふべきなめり、と一の御子の女御はおほし疑へり。	更衣はいつも帝のそばにお勤めをしなければならないほど身分が低かったわけではないので、彼女の身分に見合う扱いを受けていたが、帝がどうしようもなく一緒にいたいかばかりに、恒例の音楽の遊びや他の催しがあるたびに、真っ先に彼女を招待していた。時には、一緒に夜を過ごした後も彼女を引き留めたりして、身分の低い女房のような扱いに見えたが、子供が生まれてからは、更衣の特別扱いが明らかになり、その子が継承者になるのではないかと、母女御が疑いはじめた。	残念ながら、更衣の身分はいつも帝に仕えていた人たちと異なっていた。彼女を深く愛しており、そして彼女は身分の高い女御と同じように優れた品格の持ち主だったものの、帝は更衣をいつもそばに置くことをためらっていたが、やがて遊びのときのみならず、大事な話しながされている場面でも彼女を呼ぶようになった (D)。ときには、寝過ぎてそのまま引き止めたりなどして、更衣の気持ちさがておき、女官のような扱いを受けていた。この特別扱いをみて、弘徽殿婦人は、何かをしなければもしかすると帝が特に可愛がっている更衣の子供を東宮に立てられるのではないかと疑いはじめた。

<p>7 帝は弘徽殿女御を氣遣うも桐壺更衣を寵愛し、更衣の気苦労は増す 「人より先に～」(0248／六⑬／一九)</p>	<p>人より先に参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御方の御諫めのみぞ、なほ煩はしう、心苦しう思ひきこえさせたまひける。かしこき御陰を頼みきこえながら、おとしめ、疵を求めたまふ人は多く、我が身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。</p>	<p>この方はほかの人より先に入内し、帝に存分に愛され、子供も授かったので、帝は彼女の怒りだけはさすがに煩わしく、心苦しく思っていた。かくして、若い更衣は帝に庇護されていたにもかかわらず、陰口を言う人やあら捜しをする人も多く、自分は拠り所がなく無力で、その現状にただ悩んでばかりにいた。</p>	<p>だが、弘徽殿婦人のほうが先に宮廷に入り、帝によって深く愛されていたし、帝の子供を何人も生んだ。今でも帝は弘徽殿婦人の忠告だけはさすがに煩わしく、心苦しく思っている。かくして、愛人は帝に庇護されていたにもかかわらず、彼女を侮辱しようとしている人が多く、自分はとても無力で、愛されれば愛されるほど恐怖さえ感じるがあった。</p>
<p>8 更衣の局は東北隅の淑舎舎で、参上の折毎に酷い嫌がらせを受ける「御局は桐壺～」(0288／七③／二〇)</p>	<p>御局は桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせたまひて、ひまなき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふも、げにことわりと見えたり。参上りたまふにも、あまりうちしきる折々は、打橋、渡殿のここかしこの道に、あやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾堪へがたく、まさなきこともあり。また、ある時には、えさらぬ馬道の戸をさしこめ、こなたかなた心を合はせて、はしたなめわづらはせたまふ時も多かり。</p>	<p>更衣は桐壺という部屋に住んでいた。帝はしばしば彼女の部屋を訪れ、そのたびに大勢の女御の部屋を素通りして通っていたので、女たちが苛立っているのもっともである。同じように、更衣もまた多すぎると思われても不思議ではない程に何度も帝の部屋を訪れていたが、渡り廊下や屋根の付いた廊下を通るときに嫌なことがしばしば起こり、送り迎えの女性たちの服の裾がひどく汚れてしまっていたこともあった。時には、何人かの女御の仕業で、更衣が通らなければならない廊下の戸が閉められ、辱めたり、困らせたりすることも多かった。</p>	<p>彼女は桐壺と呼ばれる部屋に住んでいた。更衣が帝の部屋を訪れるたびに大勢の女御の部屋の前を通らなければならない、女たちが苛立っているのもっともである。回数が重なると、浮橋や廊下で更衣を怖がらせる変な事件が起こったり、通り道に汚物などを撒き散らして、彼女に仕えていた女房たちの裾が台無しにされたりすることが多々あった。あるとき、誰かが玄関のドアにカギをかけ、更衣は気持ちが悪くなるぐらい長い間閉じ込められた。</p>
<p>9 帝は桐壺更衣への虐待を不憫に思い、局を淑舎舎から後涼殿に移す「ことにふれ～」(0344／七⑨／二〇)</p>	<p>ことにふれて、数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとどあはれと御覧じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を、ほかに移させたまひて、上局にたまはず。その恨みましてやらむ方なし。</p>	<p>数しれないほど辛いことばかり重なるので、更衣がひどく落ち込んでおり、帝はますます不憫に思い、昔から後涼殿に住んでいた女御を移動させ、その部屋を更衣に与えた。その結果、更衣はますます周りの反感を買った。</p>	<p>数しれないほど辛い事が重なるので、帝は彼女を不憫に思い、後涼殿に移動させた。そのため、第二の更衣が外の部屋に移動せざるを得なかったので、状況が良くなるどころか、更衣には新たな敵ができただけだった。</p>
<p>10 若宮は三歳で袴着の儀式をし、成長と共に憎しみが賞賛へと変わる「この御子三つ～」(0378／七⑩／二一)</p>	<p>この御子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮のたてまつりに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くして、いみじうさせたまふ。それにつけても、世の譏りのみ多かれど、この御子のおよすけもおはする御容貌、心ばへ、ありがたくめづらしきまで見えたまふを、えそねみあへたまはず。ものの心知りたまふ人は、かかる人も世に出おはするものなりけり、とあさましきまで目を驚かしたまふ。</p>	<p>若宮(D)が三才になった年、初めて袴を着る儀式は、長男の式に劣らないように、内蔵寮や納殿の財物をふんだんに使い尽くして盛大に行われた。このときも非難の声が多かったが、その子の容貌と人徳が成長するにつれて希にみるものだったので、みんなが憎もうにも憎めないし、分別のある方(E)は、このような人がよくこの世に生まれてきたものだと言っていた。</p>	<p>若宮はもう三才となっていた。第一皇子の時に劣らぬように、ズボンの儀式が内蔵寮や納殿の宝物を使い果たすほどに、大層盛大に催されました。それについても、世間の非難はかなりの多いが、この子が成長するにつれて、容貌や性格がますます素晴らしく美しくなっていたので、誰もこの子供を恨むことはできない。物事を心得た人はこのような素晴らしい人がこの世に現れるものかと、驚いてばかりいた。</p>
<p>11 若宮が三歳の夏に桐壺更衣は重病になり、御子を宮中に残して退出「その年の夏～」(0439／八②／二一)</p>	<p>その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなむとしたまふを、暇さらにゆるさせたまはず。年ごろ、常のあつしさになりたまへれば、御目馴れて、「なほ、しばし試みよ」とのみのたまはするに、日々に重りたまひて、ただ五六日のほどに、いと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせたまつりたまふ。かかるをりにも、あるまじき恥もこそ、と心づかひして、御子をば留めたまつりて、忍びてぞ出でたまふ。</p>	<p>その年の夏、桐壺の更衣は原因不明の病気を患って、実家に帰ろうとしたが、帝はそれを許さなかった。ここ数年、彼女が病気がちだったこともあり、帝はしばらく宮殿で様子を見るように言ったが、日が経つにつれて病状が悪化し、更衣はとても弱ってしまった。それをみた母親が心配のあまり帝に頼み込み、やっと実家に帰ることが許された。こうしたときも、また侮辱されることを恐れ、息子を宮殿に残し、誰にも気づかれぬように出発の準備を進めていた。</p>	<p>その年の夏に更衣が意気消沈してしまった。何度も実家に帰させてもらうように頼んだが、許されなかった。その状況は一年も続いた。彼女はいくら頼んでも、帝は「もう少し様子をみよう」といつも同じ答えを繰り返した。しかし日々病気が重くなり、わずか五・六日の間に更衣がすっかり衰弱してしまったので、母親は実家に娘を帰すように泣く泣く帝に頼んだ。彼女を好ましく思っていない人がまた悪戯をするのではないかと恐れて、病気に苦しんでいる更衣は息子を宮廷に残して、誰にも気づかれぬように実家に帰る準備をした。</p>
<p>12 帝は絶え入らばかりの桐壺更衣をご覧になるにつけ途方に暮れる「限りあれば～」(0488／八⑦／二二)</p>	<p>限りあれば、さのみもえ留めさせたまはず、御覧じだに送らぬおぼつかなさ、言ふ方なく思ほさる。いと匂ひやかにうつくしげなる人の、いたう面瘦せて、いとあはれとものを思ひしみなながら、言に出でて聞こえやらす、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを、御覧するに、来し方行く末おぼしめされず、よろづのことを、泣く泣く契りのたまはずれど、御答へもえ聞こえたまはず、まみなどもいとたゆげにて、いとどなよなよと、我がの気色にて臥したれば、いかさまにとおぼしめし惑はる。</p>	<p>様々な掟があるので、帝は彼女を引き止めることができなかったが、見送ることもできないでいて、言葉で表せない程の悔しさを感じていた。昔は華やかで輝くような美しさの持ち主であった女性が、今やすっかりやつれて痛々しい姿になり、口に出していうこともできない悲しみに沈み、生死をさまよっているかのようなその様子を見兼ねた帝は、過去も未来もえることすらできず、泣きながら数え切れない約束を口にするが、更衣は返事もできないでいた。ぼんやりした目つきで空を見て、意識が朦朧として寝ているので、帝は何故そのような状況に陥ったのかと不安を募らせる。</p>	<p>帝はしぶしぶと彼女と別れることを承諾した。しかし、帝は人目を忍んで、お別れの言葉も言わずに宮廷を去っていく彼女を見るのに耐えられなくて、お見送りに駆け付けた。顔が真っ青で、ひどくやつれてしまっていたのだが、それでもなお大層美しく可愛らしく見えた。更衣は一言もしゃべらず、愛情に満ちた視線でただただ帝を見詰めるだけだった。まだ生きていたのか？息づかいがあまりのも苦しく、生きているかどうかすわらないほどだった。帝は過去も未来も忘れて、数え切れないぐらいの愛情に満ちた言葉をかけ、彼女の顔を優しく撫でていたが、更衣は返事さえ言う気力も残っていなかった。更衣は音も目の前にあるものの輪郭も全てがぼんやりして、自分もどこにいるのかわからないぐらいぐったりしていた。その様子を見兼ねて、帝はただ途方にくれていた。</p>

<p>13 輦車の宣旨を受けた桐壺更衣は、帝に歌を残して里邸へと退出する「輦車の宣旨〜」(0537／八④／二二)</p>	<p>輦車（てくるま）の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえゆるさせたまはず。 「限りあらむ道にも、後れ先だたじ、と契らせたまひけるを、さりともしうち捨てては、え行きやらじ」 とのたまはするを、女もいとみじと見たてまつりて、 限りとて別る道の悲しきにかまほしきは命なりけり いとかく思ひたまへましかば」 と息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながらともかくもならむを御覧じはてむとおぼしめすに、 「今日始むべき祈りども、さるべき人々承れる、今宵より」 と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながら、まかでさせたまふ。</p>	<p>出発のときに輦車を出すように命令をしたが、更衣の部屋を再び訪れた際に、やはり行かないでほしいと嘆く。「みんなが歩くことになる死の旅を、私と同じときに歩く約束したではないか。それにもかかわらず、私を残して、行くつもりなのか」溢れんばかりの悲しみがこみ上げてきて、彼女は次の通り返事をした。</p> <p>抵抗することもできず 別れ道を歩むなんて寂しい ずっと一生に人生を歩みたかったのに</p> <p>「こんなことになるわかっていたら…」と息が途絶えそうになりながら言い、また何かを言いたかったようだったが、あまりにも苦しうだったので、帝は最期まで見届けようと思った。しかし、更衣の実家から、その日の夜のうちに行者が健康回復の儀式をはじめることになっていたというお知らせがあり、出発を急ぐ必要があった。従って、帝はしぶしぶと彼女の出発を許したのである。</p>	<p>帝はひどく動揺していたが、輦車が来るように手配をした。しかし、更衣が輦車に乗ろうとしていたときに、それを許さず、次のように話した「みんなが歩かなければならぬ道と一緒に歩く約束したはずだった。彼女をひとりで行かせるわけにはいかないのだ。」更衣は帝の言葉を聞いて</p> <p>「この日をずっと待ち望んでいましたが、一人で行くことになってしまったので、それよりもっと生きたい！」</p> <p>と言った。 息も絶え絶えに、そのように話した。力を振り絞って少し話すことができたが、単語一つひとつ発するのには大変苦しそうだった。どんなことがあっても帝は最期までそばに居たかったが、祈りを捧げるために呼ばれた神父は既に彼女の実家に呼ばれていた。そのために夜になる前に実家に着く必要があり、やむを得ず帝は更衣を退出させた。</p>
<p>14 心塞がる帝は眠れぬ夏の短夜に、桐壺更衣の死を聞き悲嘆に暮れる「御胸つと〜」(0608／九⑦／二三)</p>	<p>" 御胸つと塞がりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行き交ふどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまはせつるを、</p>	<p>帝は激しい苦悩に苛まれ、その夜は一睡もできなかった。使者が宮殿にまだ戻っていなかった間に、帝は不安で心がいっぱい落ちてくることができなかった。やっと現れたとき、使者はひどく気を落として、夜中過ぎに更衣が亡くなった、と彼女の実家の者が泣きながら伝えてくれたという。それを聞いた帝は、どうすることもできず、自分の部屋に閉じこもった。</p>	<p>その後帝は寝ようとしたが息が、詰まりそうで、一睡もできなかった。夜中ずっと、更衣の実家と宮殿の間に召し使いが行き来することになった。最初から悪いお知らせばかりでしたが、12時を過ぎた頃、更衣の実家にいた人たちがみんな泣き騒ぎ、彼女が息を引き取ったというお知らせが来た。それを聞いた帝は言われていることの意味がわからないかのように微動だにせずに立ち竦んだ。</p>
<p>15 三歳の若宮は母君の死により、服喪のため宮中から里邸へ退出する「御子は〜」(0644／九⑩／二四)</p>	<p>御子は、かくてもいと御覧ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ、例なきことなれば、まかでたまひなんとす。何事かあらむともおぼしたらず、さぶらふ人々の泣き惑ひ、上も御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見たてまつりたまへるを、よろしきことにだに、かかる別れの悲しからぬはなきわざなるを、ましてあはれに言ふかひなし。</p>	<p>少なくとも、更衣との間にできた子供をそばに置きたかったが、その状況で若宮が宮殿に残るのが論外だったので、更衣の実家に行かせることになった。若宮は何が起こったかを理解できず、仕えている人たちが泣き騒ぎ、帝も絶えず涙をこぼしているのを見て、驚いていた。両親との別れはとても悲しいことで、そのときの気持ちを言葉で表すことは到底できない。</p>	<p>帝は更衣の子供をずっとそばに置いておきたかったのだが、その状況ではしばらくの間宮廷から離れたほうが良さそうだった。その子は何が起こったか理解できなかったが、周りの人はみんな泣き騒ぎ、帝も涙が止まらないのを見て、何かひどい事が起こったに違いないと察知した。誰かとお別れをするのは悲しいことだと彼は知っていたが、そのときにまであんなに苦しうに泣く人を見たことがなかったので、きっととても悲しく、切ないお別れだったと想像がついた。</p>
<p>16 桐壺更衣の葬送は鳥辺野で行われ、母は娘と一緒に泣き焦られる「限りあれば〜」(0684／一〇②／二四)</p>	<p>限りあれば、例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、同じ煙にのぼりなん、と泣きこがれたまひて、御送りの女房の車に慕ひ乗りたまひて、愛宕といふところに、いとかめしうその作法したるに、おはし着きたる心地、いかばかりかはありけん。</p>	<p>この世には守らなければならない掟がある。恒例通り葬式が行われ、娘と同じ煙になって一緒に天に登りたいと思いつつも、母親は熱い涙を流しながら、女房の車に乗って、葬式が行われる予定だった愛宕というところに向かったが、そのときはどんな気持ちだったのだろうか。</p>	<p>お葬式が始まったときに、更衣の母親は娘と同じ煙になって、空に昇ってしまいたいと泣き叫んだ。老母はお葬式に参加した他の女御と同じ車に乗った。お葬式は愛宕という場所で盛大に行われた。</p>
<p>17 気が動転している母は、火葬の現実も受け入れられず諦めきれない「むなしき〜」(0712／一〇⑤／二四)</p>	<p>「むなしき御骸（から）を見る、なほおはするものと思ふが、いとかひなければ、灰になりたまはん見たてまつりて、今は亡き人、とひたぶるに思ひなりなん」 と、さかしのたまひつれど車よりも落ちぬべうまろびたまへば、さは思ひつかし、と人々もてわづらひきこゆ。</p>	<p>「むなしき亡骸を目の当たりにしても、まだ生きているのではないかと思わずにいられなかったが、灰になるところを見届けて、娘が帰らぬ人となったという事実を受け入れよう」と賢明に言ったが、車から落ちそうなほど取り乱れていたのも、本当に落ちてしまうのではないかと周りの女性が心配しながら彼女の様子を見守っていた。</p>	<p>老母は娘のことを愛するあまり、遺体を見てもまだ生きているようにみえたぐらいだった。火が付けられたときに、その遺体にもう命が宿っていなかったことにやっと気づいた。そして、分別ありげに振舞おうとしたが、辛すぎて、車から落ちそうになって、周りの人が彼女を見守りながら「やっと現実を受け入れた」と囁いた。</p>
<p>18 桐壺更衣に三位追贈の宣命がくだり、女御更衣たちは憎しみを増す「内裏より御使〜」(0741／一〇⑧／二五)</p>	<p>内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来て、その宣命読むなん、悲しきことなりける。女御とだにいはせずなりぬるが、あかざ口惜しうおぼさるれば、いま一階（ひときざみ）の位をだに、と贈らせたまふなりけり。これにつけても、憎みたまふ人々多かり。</p>	<p>宮殿から使者が来た。その使者が更衣に三位の位が追贈されたことを知らせに来たが、その言葉を聞くのがあまりに悲痛であった。生きている間に女御のタイトルも与えられなかったのが心残りだったせいか、帝は一階級の位でも追贈したかったかもしれない。そのことについても異議を唱える者が大勢いた。</p>	<p>ヘラルドが宮廷から来て、更衣に三位の位を賜る旨の宣命を読んだ。棺の近くにその長いお知らせが読まれているのを聞くのがあまりにも辛すぎる。帝は、女御とさえ呼ばずに更衣のまま終わってしまったことを、残念に思ったので、せめてもう一階級上の位をあげようと考え、そのような手配をした。この件についても、亡き更衣を恨む女御たちが多くいたが、</p>
<p>19 聡明な女房たちは桐壺更衣の美質を追想し、思慕の情をもって偲ぶ「もの思ひ知〜」(0775／一〇⑩／二五)</p>	<p>もの思ひ知りたまふは、さま容貌などのめでたかりしこと、心ばせのなだらかにめやすく、憎みがたかりしことなど、今ぞおぼし出づる。さまあしき御もてなしゆゑこそ、すげなうそねみたまひしか、人柄のあはれに情ありし御心を、上の女房なども恋ひしのびあへり。「なくてぞ」とは、かかるをりにやと見えたり。</p>	<p>しかし、この世のことをよく理解する人は、姿が美しかったこと、穏やかで優しい性格を持っていたこと、今となって思い出させ、彼女を憎むことができない。帝の見苦しい程の寵愛の対象だったからこそ、冷淡に妬まれていたが、更衣の人柄が優しく愛情豊かな人だったので、身分の高い女御までも彼女のことを恋しく思っていた。<失ったときにわかる…>という言葉はそのような心境を表すにはぴったりである。</p>	<p>心の優しい人たちが亡くなった更衣がとても綺麗で、品も良く、愛情深い人柄だったことを思い出した。そして、特別扱いさえされなければ誰も彼女を恨まなかったであろうと言う人までいた。</p>

<p>20 秋となり帝はただ涙の日々の中、弘徽殿女御は桐壺更衣を許さな「はかなく〜」(0809 / 一一① / 二六)</p>	<p>はかなく日ごろ過ぎて、後のわぎなどにも、細かにとぶらはせたまふ。ほど経るままに、せむ方なう悲しうおぼさるに、御方々の御宿直なども絶えてしまはず、ただ涙にひちて明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人さへ露けき秋なり。 「亡きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには、なほゆるしなうのたまひける。</p>	<p>日が過ぎ、帝はしかるべき式がすべてしきたり通りに行われることに気を配った。時間が経っても、帝は相変わらず悲しみに耽り、ほかの女と夜を共にすることなかった。朝夕泣き続ける帝の様子を見守っていた女性たちにとっても、露の滴のような涙に濡れた秋となった。しかし、長男の母女御やその他に後涼殿にお住まいの女御は、更衣を許すことができなかった。「亡くなった後も、収まることを知らない愛情だ」と彼女らという。</p>	<p>七週間の哀悼期間がきっちり守られた。月日が過ぎていったが、帝は依然として女御と一緒に時間を過ごすことがなかった。毎日ずっと泣いてばかりだったので、周りの人たちにとってもとても辛かった。弘徽殿婦人や他の女御はかなりご立腹の様子で、「亡くなったあとでも異常なまで更衣への熱愛が収まるどころが知らない」と言いふらしていた。</p>
<p>21 帝は若宮を恋しがり、野分だつ夕暮に輓負命婦を更衣の里に遣はず「一の宮を〜」(0850 / 一一⑤ / 二六)</p>	<p>一の宮を見たてまつらせたまふにも、若宮の御恋しさのみ思ほしいでつつ、親しい女房、御乳母などをつかはしつつ、ありさまを聞こしめす。野分だちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりもおぼし出づること多くて、輓負(ゆげい)の命婦といふを遣はず。</p>	<p>長男に会うたびに、帝はすぐさま若宮のことを思い出し、気の置けない女性や乳母に頼んで、様子を尋ねていた。畑に風が吹き、日が沈んでから肌寒く感じる季節になった頃、いつもにも増して思い出に耽っていた帝は、輓負の命婦という女性をお使いに行かせた。</p>	<p>時々弘徽殿婦人の子供を見に行ったりしていた。しかし、彼の顔見るなり、亡くなった更衣の子供のことを思い出し、親しい乳母などを亡き更衣の里に送り込んで、若宮の様子などを訪ねていた。秋分点の時期だった。急に肌寒く感じる夕暮れが続いていた。帝はいつもより強く更衣のことを思い出し、輓負担当の娘に手紙を預けて、更衣の実家にお使いに行かせた。</p>
<p>22 帝は夕月夜の美しい折に催した管弦を思い出し、更衣の面影に浸る「夕月夜の〜」(0877 / 一一⑨ / 二六)</p>	<p>夕月夜のをかききほどに、出だし立てさせたまひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、御遊びなどせさせたまひしに、心ことなるものの音を掻き鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も、人よりはことなりし気配容貌の、面影につと添ひておぼさるるにも、闇の現にはなほ劣りけり。</p>	<p>現れたばかりの月に優しく照らされていた夕焼け空の美しい夜だったが、その女性を送り出してから、帝はぼんやりと思いを巡らしていた。そのような夜には、よく桐壺の更衣に何かを弾くように頼んでいた。楽器の弦に触れて音楽を鳴らしていたときの彼女の顔の表情や仕草は格別で、使う言葉もほかの人とまるっきり異なり、それが幻想のようにいつもそばに感じられたが、<暗闇の現実>ほど感じ取ることがやはりできなかったのである。</p>	<p>その夜、月は明るく回り一面を照らしていたが、帝はお使いの女性を見送ってからしばらくの間その光景を眺めた。いつもなら、そのような綺麗な夜には音楽を楽しんでいたはずだ。更衣のささやき声は音楽と一緒にあって、彼女の顔、表情や姿は特別だったと、帝は改めて思い出を辿った。<闇に包まれたものは、夢と同じように儚い>という詩の一節を思い出し、夢のような存在でもいいのでまた更衣と一緒にあのような夜を過ごしたいと帝は思った。</p>
<p>23 命婦は亡き更衣の邸に入り、八重葎で荒れた庭には月影が差し込む「命婦かこ〜」(0907 / 一一⑫ / 二七)</p>	<p>命婦(みょうぶ)かこにまうで着きて、門引き入るより、気配あはれなり。やもめ住みなれど、人一人の御かしづきに、とかくつくろひたてて、めやすきほどにて過ぐしたまへる、闇にくれて臥しづみたまへるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎(やへむぐら)にもさはらずさし入りたる。</p>	<p>命婦が目的地に着き、車を門内に引き入れるなり、物憂い漂う様子に驚いた。桐壺の更衣の母親は、夫を喪って以前から一人で暮らしていたが、娘のために、家の手入れをきちんと行い、みすばらしくないように過ごしていたが、今は悲しみに途方に暮れて泣き疲れていたため、草が伸びて、風に吹かれた庭がいつそう荒れた感じになり、月の光だけが、伸びすぎた雑草に遮られることなく回り一面をまばゆく照らしていた。南に面している正門の前に車を降りた命婦を迎えたとき、更衣の母親は言葉が出なかった。</p>	<p>お使いは更衣の実家の入口に辿りついた。フェンスを開けるなり、彼女の目の前に奇妙な光景が広がった。更衣の母親は昔に旦那を失い、家のメンテナンスなどは桐壺の更衣が全部面倒をみていた。しかし、彼女が亡くなってからというもの、年を老いた老母は悲しみに暮れ、家の事など何もかもが嫌になって、草が高く生い茂り、秋の風のせいで庭が大層荒れていた。生い茂った雑草に妨げられず月の光だけが差し込んでいた。</p>
<p>24 更衣の母は命婦と対面し感極まり涙し、命婦は帝の仰せ言を伝える「南面に〜」(0937 / 一二② / 二七)</p>	<p>南面(みなみおもて)に下ろして、母君もとみにえものものたまはず。「今までとまりはべるがいと憂きを、かかる御使の、蓬生の露分け入りたまふにつけても、いと恥づかしうなむ」とて、げにえ堪ふまじく泣いたまふ。「『参りてはいとど心苦しう、心肝もつくるやうになん』と、典侍の奏したまひしを、もの思うたまへ知らぬ心地にも、げにこそいと忍びがたうはべりけれ」とて、ややためらひて、仰せ言伝へきこゆ。</p>	<p>南に面している正門の前に車を降りた命婦を迎えたとき、更衣の母親は言葉が出なかった。「今まで生き続けるのはどれほど苦しかったことか。しかし、あなたのような貴いお方が、霧の滴に濡れたニガヨモギの葉っぱをかき分けて訪れてくるのを見ると、恥ずかしくて仕方ありません」と涙ぐみながら言う。「こちらを訪れた宮殿の第二の女御は、心苦しく、その様子を見るだけで魂が消えそうだとおっしゃっていたが、世のことをよく知らない私のような者でも、本当に耐えがたい気持ちになります」と命婦が言い、そして気を少し取り戻してから帝から預かったメッセージを伝えた。</p>	<p>お使いの女御は家の入口まで行った。老母は胸がつまって最初は言葉が全然出なかったが、しばらくして「長生きをするのは辛いものです。あなたのような綺麗な方が生い茂った草の露を踏み分けなければならぬと思うと悲しすぎます」と言って、本当に耐え難い様子で泣き出した。お使いの女御は「以前ここを訪れた女御はこのような状況をみてとても心苦しかったと帝に話していたが、私も全く同感です。」そして少し気持ちを落ち着かせて帝のメッセージを伝えた。</p>
<p>25 命婦は帝の心意を更衣の母に伝え、涙にむせぶ帝からの手紙を渡す「『しばしは〜』」(0987 / 一二⑦ / 二八)</p>	<p>「『しばしは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひしづまるにしも、さむべき方なく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひあはすべき人だになきを、忍びては参りたまひなや。若宮のいとおぼつかなく、露けき中に過ぐしたまふも、心苦しうおぼさるるを、とく参りたまへ』など、はかばかしうも、のたまはせやらず、むせかへらせたまひつつ、かつは人も心弱く見たてまつらむと、おぼしつつまぬにしもあらぬ御気色の心苦しさに、承りはてぬやうにてなむ、まかではべりぬる」とて御文たてまつる。</p>	<p>「『しばらくの間は夢だとばかりに思っていたが、だんだん気持ちが落ち着くにつれて、夢ではないからこそ目覚めることもできないので耐えがたくて、相談ができる相手がないことが一番つらいです。目立たないように宮殿に訪問していただけないでしょうか。涙に濡れたお家に暮らさなければならぬ若宮のことも気がかりです。なるべく早く訪れてください。』帝は涙が込み上げてきて、それ以上おっしゃらなかったのです。周りに弱さを見せないように必死で、私もその様子を見るに絶えず、お言葉を最後までお聞きしてはいられないような気がしました。」と言いながら、帝から預かった手紙を渡した。</p>	<p>「『しばらくは夢ではないかと迷っていたが、段々気持ちが鎮まってくると、どのようにすれば目が覚められるか検討がつかないのです。こちらでは相談に乗ってくれる人なぞいません。貴女が忍んで参内してくれませんか。さらに若宮があのような悲しいところで過ごすのも良くないです。彼も是非連れてきてください。』などとためため息をつき、涙を流しながら帝がおっしゃいました。あまりにも苦しうなご様子でしたので、お話が終わらないうちに宮殿を離れました。これは帝からの手紙です。」</p>

<p>26 帝からの文は、若宮と共に参内するようにと懇ろに促すものだった「目も見え〜」(1043／一三⑬／二八)</p>	<p>「目も見えはべらぬに、かくかしこき仰せ言を光にてなん」とて見たまふ。 「ほど経ば少しうち紛ることもや、と待ち過ぐす月日にそへて、いと忍びがたきはわりなきわざになむ。いはけなき人をいかにと思ひやりつつ、もろともにはぐくまぬおぼつかなさ、今はなほ昔の形見になずらへてものしたまへ」 など、細やかに書かせたまへり。 宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれとあれど、え見たまひはてず。</p>	<p>「周りのことが見えなくなるほど苦しみ抜いた私にとって、このような貴重なお言葉はまるで光のようです。」と言いながら、彼女はもらった手紙を読み始めた。『時間が経てば、次第に苦しみもおさまるであろうと思っていました。月日が経った今もおその悲しみに耐えられないでいます。若宮のことをよく思い出し、一緒にお世話ができないことが辛くてたまりません。ぜひお越しください。あの子は私にとって唯一の思い出の形見であることを忘れないでください。』その言葉から帝の気持ちが見て取れるほど伝わっていた。手紙の最後に詩が一つ添えられていた。 涙の滴を運び、宮城野に吹く 風の音を聴きながら 小萩のことを思わずに居られない 老母はその言葉を最後まで読むことがとてもできなかった。</p>	<p>「よく見えない」と老母が言って「この手紙を明いところで読ませてください。」 手紙は以下のような内容でした。 「時間が経てば自分の気持ちが鎮まり、少しはよくなると思っていた。しかし違っていた。月日が経てば経つほど、人生が耐え難くなっていくばかりです。いつも若宮の事を思って、どのように過ごしているかがとても気になります。更衣と一緒に彼の教育についてあれこれいろいろと話ができておりました。彼女の代わりに相談のつて、彼をこちらに連れてくれないか。」その手紙には様々な指示や次のような詩が添えられていた 《タカギの土地で露を吹きむすぶ風の音を聞きながら、小萩のことを思わずにいられない》。 その詩には若宮への思い出が綴られていた。老母が辛くて最後まで手紙を読むことすらできなかった。</p>
<p>27 母君は桐壺更衣の入内のいきさつを語り、横死のようなさまを嘆く「命長さの〜」(1094／一三⑭／二九)</p>	<p>「命長さの、いとつらう思ひたまへ知らるるに、松の思はんことだに、恥づかしく思うたまへはべれば、もししきに行きかひはべらんことは、ましていと憚り多くな。かしこき仰せ言をたびたび承りながら、自らはえなん思ひたまへたつまじき。若宮は、いかに思ほし知るにか、参りたまはんことをのみなむおぼし急ぐめれば、ことわりに悲しう見たてまつりはべる、など内々に思ひたまふるさまを奏したまへ。ゆゆしき身にはべれば、かくておはしますも、いまましう、かたじけなくなむ」とのたまふ。</p>	<p>「長生きが本当につらいです。高砂の松がどう思うかとそれだけでも恥づかしく思うし、なおさら今宮殿を訪れるなんて遠慮すべきことだと思います。今まで何度か帝からお誘いをいただいたのですが、行こうとはとても思えません。若宮はどこまで状況を理解しているかわかりませんが、宮殿に早く戻りがっているようで、その気持ちがわかるものの、悲しく感じます。私の考えをどうか帝にお伝えください。私はこのように不吉な身ですから、あの子をこのままそばに置いておくと悼しくさえ思う人もいることでしょう。」</p>	<p>しばらくして、老母は「長生きをするというのは辛いものです。私はこの世にいるのはあまりにも長くて、高砂の松の前でも恥を隠せないほどです。私のような人は宮殿に行くわけにはいけません。ちょっとだけの間だったとしても、そのお誘いに応じることは到底できません。しかし、若宮のほうは（帝の気持ちについてご存知かどうかわかりませんが）宮殿に行きたがっているようで、当然なことに、とても寂しがっています。今話した事を帝に伝えてください。私の言葉とあなたの目で見たことを全て帝に話してください。子供にとってこの家にいるのはあまりに悲しすぎます…」</p>
<p>28 若宮が就寝した後、勅使役の命婦は役目を終えたために帰参を急ぐ「宮は大殿籠〜」(1149／一三⑮／三〇)</p>	<p>宮は大殿籠（おほとのごも）りにけり。 「見たてまつりて、くはしう御ありさまも奏しはべらまほしきを、待ちおはしますらんに、夜ふけはべりぬべし」とて急ぐ。</p>	<p>若宮は自分の部屋で休んでいた。「若宮にお目にかかり、詳しく様子を話したいのですが、帝がお待ちになっているし、夜も更けますので」と言いながら、命婦は出発の準備を始めた。</p>	<p>「若宮はお休みになっていると伺いました」とお使いの女御が言い、「彼はどれぐらい成長したかを見て、その様子を帝に伝えたかったのですが、もう時間なので」と付け加えた。</p>
<p>29 亡き更衣の母君は、横死した我が子への尽きせぬ思いを命婦に語る「くれ惑ふ〜」(1163／一三⑯／三〇)</p>	<p>「くれ惑ふ心の闇も堪へがたき片端をだに、はるくばかりに聞こえまほしうはべるを、私にも、心のどかにまかてたまへ。年ごろ、嬉しく面だたしきついでにて、立ち寄りたまひしものを、かかる御消息にて見たてまつる、返す返すつれなき命にもはべるかな。生まれし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとなるまで、『ただ、この人の宮仕への本意、かならず遂げさせたまつれ。我亡くなりぬて、口惜しう思ひくづぼるな』と、返す返す諫めおかれはべりしかば、はかばかしく後見思ふ人もなきまじらひは、なかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじとばかりに、出だしたてはべりしを、身にあまるまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつつ、まじらひたまふめりつるを、人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなりそひはべりつるに、横さまなるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなん、かしこき御心ざしを思ひたまへられはべる。これもわりなき心の闇になん」と、言ひもやらず、むせかへりたまふほどに、夜もふけぬ。</p>	<p>「気晴らしにまたゆっくりとお話したいので、今度は公のお使いではなくお越しください。以前何度も訪れてくださったのですが、いつもうれしいお知らせばかりでしたので、このような悲しいときにあなたとお会いするのはとても心苦しいです。娘が生まれてから大いに期待をし、亡き大納言も臨終のとき『この子の宮仕への念願を必ず叶えさせてください。私がいなくても絶対に諦めないでください』と繰り返しおっしゃいました。後ろ盾になるような人もいないので宮仕えしないほうが良いと思いましたが、死んだ夫の遺言を守りたく仕えさせたのです。しかし、帝から過分なほど愛され、そのためにほかの人と異なる扱いを受けるといふ恥を隠しながら仕え続けたようですが、周りの人の妬みが積もり、悪いこともたくさん起こり、そして、ご存じのとおり、ついに奇妙な病に侵されてしまったのですが、すべての原因は帝の寵愛だったのではないかとさえ思うときもあります。こんなことをいうのも、我が子を思うどうしようもない悲しみのせいですが。」 と言いつつに涙が込み上げてきたところ、夜もとつくに更けていた。</p>	<p>「暗闇に彷徨う人にとって、誰かと話すことはまるで光のようです。時間があれば、お使いではなく、プライベートで訪ねてきてください。昔はいつも嬉しいお知らせにきていただいていたのですが、今回はこのような内容で来ていただくなんて。幸運が訪れるということを感じる人は愚かです。娘が生まれてから、とても頑固だった父親は彼女を宮仕えに出したいと思っていた、自分にどんなことがあったとしても、宮仕えだけのことは絶対に諦めてほしくないと言っていました。後ろ盾になる人がいないときと辛いに違いないと思いつつも、死んだ夫の願いを叶うように努めました。宮殿では、自分の地位に見合っていない特別扱いを受け、人の恨みを買ひ、辛い事があまりにも重なってしまったせいで、耐え切れなくて死んでしまいました。もしかしたら帝の素晴らしい愛は無関心より辛かったのかもしれない（少なくとも悲しいときはそのように思ったりもします）。」と老母が話したが、途中から涙が止まらなくなり、話しがとぎれとぎれになってしまった。とつくに日が暮れていた。</p>

<p>30 命婦は帝が悲涙の内に更衣との因縁を偲ぶさまを語って帰参を急ぐ「上もしか〜」(1256／一四⑩／三一)</p>	<p>「上もしかなん。 『我が御心ながら、あながちに人目驚くばかりおぼされしも、長かるまじきなりけり、と今はつらかりける人の契りになむ。世に、いささかも人の心をまげたることはあらじと思ふを、ただこの人のゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひしはてはては、かううち捨てられて、心をさめむかたなきに、いとど人わろうかたくなになりはべるも、前の世ゆかしうなん』 と、うちかへしつつ、御しほたれがちにのみおはします」と語りて尽きせず。泣く泣く、 「夜いたうふけぬれば、今宵過ぐさず、御返り奏せん」と急ぎ参る。</p>	<p>「帝も同じような思いです。『周りの人を驚かせるような、強すぎる愛情は一生続けられない、と今となってやっとうわかりました。自分は決して誰に対しても悪いことをしていないつもりでいましたが、彼女を愛しすぎたせいで、多くの人の恨みを負った挙句、こうして一人ぼっちに残され、誰にも慰められることなく、ますます自分の弱みを見せて恥ずかしい姿を晒しています。前世で何があったか、そしてこのような運命になった理由が知りたい!』と何度も泣きながらおっしゃいます。」と涙をこらえながら命婦が話した。「遅くなってしまいました。夜が明けるまであなたの返事をお伝えしなくては。」と急いで出発の準備にかかった。</p>	<p>「帝も同じように思っているようです。」とお使いの女御が言い、さらに「《人目を見張らせるほどに更衣を愛しく想いましたのも、長く続くはずのない前世のご縁だったのでしょう。今まで、人の心をそこねたことはないと思うのですが、ただこの人を愛したことがもて、沢山の人々から受けるはずのない恨みを負い、その果てに、更衣は傷ついたその沢山の人の恨みを背負って死ぬことになった。》と繰り返している帝を何度も聞きました。夜も更けてきましたが、今夜のうちに帝にお返事をお伝えしなければいけません」と付け加えた。女御は涙を流しながら出発の準備を始めた。</p>
<p>31 月が沈む頃、命婦の歌を受け祖母君は惜別の情を車中の命婦に伝える「月は入り方〜」(1315／一五④／三二)</p>	<p>月は入り方の、空清う澄み渡れるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いとたち離れにくき草のもとなり。 鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜あかずふる涙かな えも乗りやらす。 「いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上人かことも聞こえつべくなん」と、言はせたまふ。</p>	<p>月が沈みかける頃で、空が美しく澄みわたって、風が涼しくなり、草に潜んでいる虫の鳴き声の音が悲しい思い出を誘うように聞こえるのも、二人の女性の別れをいっそう難しくしていた。命婦は車に乗るのを躊躇っていた。 鈴虫と同じように、声がある限り 一晩中泣いたとしても 私のすべての涙を流すには 長い秋の夜も短すぎるでしょう と命婦が詠んだ。 草の茂みから絶えず虫の声が聞こえる この侘しい住まいに、 雲の上の人の露が降り注ぐ それが悲しくて仕方がない」と老母が答えた。</p>	<p>澄み渡った空に月が眩しく光り、草むらの虫の声が強く響く。女御にはその草深い家を立ち去るのは心苦しかった。別れ際に 《鈴虫の声が一晩中絶えず響き渡ると同じように、夜が明けても私の涙が止まらない》 という詩を詠んだ。老母は 《虫の音が騒がしい深い草に、雲の上に住む人の涙の露が降りかかる》 という詩を読み、「雲の上に住む人」という言葉で宮殿に住む人たちのことを用言した。</p>
<p>32 靱負命婦の帰参に際して、祖母君は桐壺更衣の形見の装束等を贈る「をかしき御贈〜」(1358／一五⑩／三二)</p>	<p>をかしき御贈り物などあるべきをりにもあらねば、ただかの御形見にとて、かかる用もやと残したまへりける御装束一領、御髪上げの調度めく物添へたまふ。</p>	<p>華やかな贈物をするときではなかったので、衣服と櫛のセットを添えた。その品は、このような機会に使うようにとっておいた娘の形見だった。</p>	<p>そして、絹のベルト、櫛や更衣のものだったその他の思い出の品をお使いの女性に渡した。それらの品々は帝の贈物だったのだが、もはや過去の思い出でしかなかった。</p>
<p>33 亡き更衣の女房たちは若君の参内を促すも祖母君は手放し難く思う「若き人々〜」(1378／一五⑩／三二)</p>	<p>若き人々悲しきことはさらにもいはず、内裏わたりを朝夕にならひて、いとさうざうしく、上の御ありさまなど思ひ出できこゆれば、とく参りたまはむことを唆しきこゆれど、かくいまいましき身の添ひたてまつらんも、いと人聞き憂かるべし、また見たてまつらでしほしもあらんは、いと後ろめたう思ひきこえたまひて、さすががともえ参らせてまつりたまはぬなりけり。</p>	<p>若宮を世話していた女房たちが悲しいことは今さらいうまでもないが、宮殿の生活に慣れていたので、宮殿離れて生活をするのは寂しく、若宮を連れて早く宮殿に戻りたいとせがんでいたが、老母の忌々しい身分だと付きそうのも世間体が悪く、かといって若宮を見ないで過ごすのも辛すぎて、すぐに宮殿に行かせるのも許せなかったのである。</p>	<p>若宮の世話をしていた若い女房たちは更衣の死はもちろんだが、宮殿の遊びに参加できなくなったことでひどく落ち込んでいた。すぐ戻れるように老母に頼んだが、彼女は人の目を気にして、行く気がなかった。また、若宮を一人で行かせた場合は、しばらく会えなくなるので、心配でならない。このような状況だったので、老母が宮殿に行くことがなく、そして若宮を行かせることもためらっていたのである。</p>
<p>34 桐壺帝は女房と語り明かし長恨歌の絵を見ながら命婦の帰参を待つ「命婦は〜」(1420／一六③／三三)</p>	<p>命婦は、まだ大殿籠らせたまはざりける、とあはれに見たてまつる。御前の壺前裁の、いとおもしろき盛りなるを御覧するやうにて、忍びやかに、心憎き限りの女房四五人さぶらはせたまひて、御物語せさせたまふなりけり。このごろ、明け暮れ御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせたまふ。</p>	<p>寝ないで待っていた帝をみて、命婦は驚きを隠せなかった。中庭の植え込みを楽しむことを口実に、最も教養のある四、五人の女御を呼び、彼女らと話し込んでいた。いつものように、話題は長恨歌の絵（それは停子院が描いた絵で、最近帝はいつも眺めていた作品）そして似たような内容について書かれた伊勢や貫之の和歌と中国語の詩。</p>	<p>靱負担当の娘が宮殿に着いたときに帝はまだ起きていた。花ざかりのお花を楽しむのを口実に、帝は親しい女御四、五人と一緒に外で話していた。明けても暮れても帝は停子院（ママ）が書いた作品に収められている「長恨歌」を眺めながら、伊勢や貫之の和歌と中国語の詩を口癖のように詠んでいた。</p>

<p>35 帝は里邸の様を命婦から聞き、とり乱した祖母君の返書に心を遣う「いと細やか〜」(1469 /一六⑧/三三)</p>	<p>いと細やかにありさま問はせたまふ。あはれなりつること忍びやかに奏す。御返り御覧ずれば、 「いともかこきは、置き所もはべらず。かかる仰せ言につけても、かきくらす乱り心地になん。 あらき風ふせぎしかげの枯れしより小萩がうへぞ静心なき」 などやうに乱りがはしきを、心をさめざりけるほど、と御覧じゆるすべし。</p>	<p>帝は更衣の実家の様子について次々と質問し、命婦は自分の目を見た状況をつぶさに話した。そして帝は老母の返事を読んだ。 『帝の有難いお言葉になんとお答えすべきなのかわかりません。しかし、そのようなお言葉をいただいても、心も真っ暗のまま、思いが乱れるばかりです。 荒い風を防いでいた樹が枯れてしまって残ってしまった小萩の運命が心配でなりません』 必要以上に心配がにじみ出ている返事だったが、老母の心境を察していた帝はその言葉を簡単に許すことができたであろう。</p>	<p>お使いの女性を見るなり、更衣の実家の様子を訪ねた。彼女は潰さに報告してから、老母からもらった手紙を帝に渡した。そこには以下の内容が書いてあった。「帝の手紙を読ませていただきました。その言葉に対して深く感謝や尊敬を感じながらも、その内容を読んで心が乱れました。」手紙の内容と、若宮のこを守ってくれる木を失った小萩に例え添えられた詩、文章が支離滅裂で、心を病んでいる人が書いたものでなければ目も当てられない出来でした。</p>
<p>36 悲嘆を隠せない帝は更衣入内の頃を思い出し祖母君をも不憫に思う「いとかうしも〜」(1504 /一六⑩/三四)</p>	<p>いとかうしも見えじ、とおぼしづむれど、さらにえ忍びあへさせたまはず。御覧じはじめし年月のことさへ、かき集めよるづにおぼし続けられて、時の間もおぼつかかりしを、かくても月日は経にけり。あさましようおぼしめさる。 「故大納言の遺言あやまたず、宮仕への本意深くものしたりし喜びは、かひあるさまにこそ思ひわたりつれ、言ふかひなしや」 とうちのたまはせて、いとあはれにおぼしやる。</p>	<p>帝は、自分の心の乱れを見せまいと勤めていたが、とてもこらえきれない。桐壺の更衣を初めて見た日のことやその他一緒に過ごした瞬間をあこれ思い出した。更衣無しでは片時も不安だったのに、それでも月日が過ぎてゆくものだと思つた。桐壺の更衣の母親のことが気の毒に思えた。「大納言との約束を果たし、娘が宮仕えできるように努力をしたことに対して何かお礼をすべきだったが、もはや遅すぎるかもしれない。」と帝は思った。</p>	<p>お使いの女性の前に帝は感情を抑えるように努めた。しかし、初めて更衣と出会ったときの事を思い出しながら、様々な思い出が蘇り、今は月日が早く経ってしまったと、呆れたように感じた。 そして「私も亡き大納言の遺言に沿うように振舞ったつもりなのですが、それがとんでもない結果になるとは。今はもう仕方ないことです。」</p>
<p>37 帝は若宮の将来を約束し、贈物から長恨歌の叙に思いを重ねて歌う「かくても〜」(1543 /一七③/三四)</p>	<p>「かくても、おのづから、若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでもありなん。命長くこそ思ひ念せめ」 などのたまはず。 かの贈り物御覧ぜさす。亡き人の住み処尋ね出でたりけむしるしの叙ならましかばと思ほすも、いとがひなし。 尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく</p>	<p>「しかし、若宮が成長したら、恩返しできる機会が訪れることでしょう。それを支えに、長生きしてほしい。」 命婦は桐壺の更衣の母親からもらった贈物を帝に見せた。贈物の中で、亡き人の住まいを探してきた証拠として、ある人が中国の王様に渡したかんざしであったならと一瞬思ったが、それは意味のないことであった。 彼女の魂はどこに行ってしまったのかを教えてくれる幻術師はきっと現れない</p>	<p>若宮が大人になったら母親にしてあげられなかった事を差し上げましょう。長生きをすることを祈ります。」と帝は言った。 お使いの女性が預かっていた品物を見て、「あの有名な魔法遣いと同じように、あなたも亡き人の住まいを探してきた証拠としてカワセミの簪を持ってくればよかったのに」といい 《彼女の魂はどこに行ってしまったのかを教えてくれる魔法遣いがいればなんて嬉しい事でしょう》 という詩を詠んだ。</p>
<p>38 帝は玄宗と楊貴妃の物語から、更衣との尽きぬ愛情を恨めしく思う「絵に描ける〜」(1572 /一七⑦/三五)</p>	<p>絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師と言へども、筆限りありければ、いと匂ひ少なし。太液の芙蓉、未央の柳も、げにかよひたりし容貌を、唐めいたるよそひは麗しうこそありけめ、懐かしうらうたげなりしをおぼし出づるに、花鳥の色にも音にも、よそふべき方ぞなき。朝夕の言ぐさに、翼をならべ、枝をかはさむと契せたまひしに、かなはざりける命のほど、尽きせず恨めしき。</p>	<p>絵に描いてある楊貴妃の容貌は、優れた作品でも、生き生きとした美しさに乏しい。大液の芙蓉にも、未央の柳にも例えられていた楊貴妃は、中国風の服でさぞ美しかったことだろうが、更衣の品の良さを思い出すと、花でも鳥の声にも例えられない。朝夕に<比翼の鳥、連理の枝になろう>と何度も約束を交わしたが、彼女の命はあまりにも短く、惜しくも一心同体として過ごすことはできなかった。</p>	<p>絵に描いてある楊貴妃の容貌は、優れた作品でも、生きた姿に比べるとちっぽけなものだ。大液の芙蓉にも、未央の柳にも例えられていた楊貴妃は、中国風の服でさぞ美しかったことだろうが、絵に書いた女性は色が派手で、気取った表情をしている。しかし、更衣の事を思い出すと、どの花や鳥にも例えられないぐらいだ。朝夕に<比翼の鳥、連理の枝になろう>と何度も約束を交わしたが、彼女の命はあまりにも短く、惜しくも一心同体として過ごすことはできなかったと、帝は悔しい思いで心がいっぱいだった。</p>
<p>39 帝の心を踏みにじるように、弘徽殿女御は傍若無人な遊び事に耽る「風の音〜」(1615 /一七⑩/三五)</p>	<p>風の音、虫の音につけて、もののみ悲しうおぼさるるに、弘徽殿には久しく上の御局にも参上りたまはず、月のおもしろきに、夜ふくるまで遊びをぞしたまふなる、いとすさまじう、ものしと聞こしめす。このごろの御気色を見たてまつる上人、女房などは、かたはらいたしと聞きけり。いとおしたち、かどかどしき所ものしたまふ御方にて、ことにもあらずおぼし消ちて、もてなしたまふなるべし。</p>	<p>風の音も、鈴虫の鳴き声も辛い思いばかりをお呼びしていたが、弘徽殿では—そこにお住まいの女御は長らく帝への訪問を控えていた—月が美しいせいか、女たちが夜更けまで音楽を楽しみながら過ごしていた。帝の苦しみを知る人はその態度を到底許すことができなかった。弘徽殿女御は我が強く、意地っ張りな人なので、その態度をとることで、帝の悲しみは自分と無縁であることを示したかったのだろうか。</p>	<p>帝は風の音や虫の鳴く音を聞くだけでも、もの悲しくなるのに、弘徽殿婦人は、長い間部屋にも行かないで、月の美しい夜には夜の更けるまで、なんと音楽の遊びをしていた。帝はその振る舞いを不愉快だと思い、彼の周りにいる人も全く同感だった。しかし、我が強い弘徽殿婦人は何もなかったかのように振舞うつもりでいた。</p>

<p>40 更衣の里邸に思いを馳せて悲しき歌う帝は、眠ることすらできない「月も入りぬ〜」(1660 /一八③/三六)</p>	<p>月も入りぬ。 雲のうへも涙にくる秋の月いかですむらん浅茅生の宿 おぼしめしやりつつ、燈火（ともしび）をかかげ尽くして起きおはします。右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。人目をおぼして、夜の御殿に入らせたまひても、まどろませたまふことかたし。</p>	<p>月も沈んだ。 雲の上でも秋の月が 涙でよく見えないので、 雑草が伸びている住まいでは 澄んで見えることはないでしょう このように、帝は桐壺の更衣の母親があつた荒れた住まいにどのように過ごしていたかについて考え、灯火の油が何度も尽きそうになったのにずっと起きていた。右近衛府の役人が仕事を始めるころだったので、丑の時になる頃だったであろう。人に見られなくなかったので、寝室に入ったが、それでも眠ることができない。</p>	<p>月が見えなくなった。帝は草に覆われている家に住む更衣の母親のことを思い出し、老母はその月をどんな気持ちで見ているのであろうかと思ひ、それについて 《雲の上に住んでいる私たちも、月が見えなくなったときは涙を流す》 という詩を詠んだ。帝はいつまでも灯火を灯して起きている。やがて遠くで宿直奏の音が聞こえて、もう丑の時刻になってしまったとわかった。人目を気にして、自分の部屋に戻ったが、一睡もできず、日が出る前に起きた。</p>
<p>40 更衣の里邸に思いを馳せて悲しき歌う帝は、眠ることすらできない「月も入りぬ〜」(1660 /一八③/三六)</p>	<p>朝に起きさせたまふとも、 「明るくも知らで」 とおぼし出づるにも、なほ朝政はおこたせたまひぬべかめり。ものなどもきこしめさず。朝餉の気色ばかりふれさせたまひて、大床子の御膳などは、いと遙かにおぼしめしたれば、陪膳にさぶらふ限りは、心苦しき御気色を見たてまつり嘆く。すべて、近うさぶらふ限りは、男女、いとわりなきわざかな、 と言ひ合はせつつ嘆く。</p>	<p>翌日の朝起きたときに、＜夜が明けるのも＞気にせずにくぐすり寝られたときのことを思い出し、もはや任務に対して興味が持てなかったことが明らかであった。 箸を少しばかりつけるぐらいで、食事をろくに取らないで、正式の食膳にも見向きをしないので、料理を担当していた者たちがため息をつきながらその様子を見守っていたほどだった。帝に一番近い者は、もうどうにもできないとひそひそと話しあっていた。</p>	<p>しかし、伊勢の詩に書いてあるように＜夜が明けたことも気づかずに＞、任務に関して全く興味を持たず、食事もとろうとしない。朝ご飯だけではなく、大床子正式の食事の御膳なども、全く食べないので、お給仕の人たちは胸が詰まるような思いで嘆いていた。</p>
<p>42 帝に奉仕する者たちも政道放棄を嘆き楊貴妃の例まで引合いに出る「さるべき契〜」(1731 /一八⑩/三七)</p>	<p>「さるべき契りこそおはしましけめ、そこの人の譏り、恨みをも憚らせたまはず、この御ことにふれたることをば、道理をも失はせたまひ、今はたかく世の中のことをも、思ほし捨てたるやうになりゆくは、いとたいだいらしきわざなり」と、人の朝廷の例までひき出で、ささめき嘆きけり。</p>	<p>「こうなってしまったのはきっと前世の縁のせいでしょう。更衣のために周りの人の非難をすべて無視し、今もなお政務まで放棄してしまっている有様です」と嘯き、とある外国の王様の例を出すものもいた。</p>	<p>いつも思い出にふけり、周りの人のことをまったく気にしなかった。その状況はまるで更衣とのことがあったときと同じようで、非難が多く、またして彼を、国の反乱を招いた有名な海外の権力者に比べる者もいたぐらいだった</p>
<p>43 若宮参内で不吉な予感、弘徽殿女御は息子が四歳の春に立坊し安堵「月日経て〜」(1762 /一九②/三七)</p>	<p>月日経て、若宮参りたまひぬ。いとどこの世のものならず、清らにおよすけたまへれば、いとゆゆしうおぼしたり。 明るく年の春、坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしうおぼせど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふくおぼし憚りて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、「さばかりおぼしたれど、限りこそありけれ」と、世人も聞こえ、女御も御心おちみたまひぬ。</p>	<p>月日経て、若宮が宮殿に戻った。成長するにつれて、この世のものだと思えないほど美しくなっていく、不安さえ覚える者もいた。翌年の春、皇位継承者を選ぶときがきて、帝は長男より若宮を選びたかったが、彼には有力な後ろ盾もならず、世間もその決断を承知しそうななかったので、かえって若宮を危険に晒す結果になりうると不安になり、自分の考えを誰にも明かさずに、諦めることにした。その結果、どんなに若宮のことが好きであろうとやはり帝は宮殿の掟を破ることがしないと世間や弘徽殿女御が安堵した。</p>	<p>月日経ち、やっと若宮が宮殿に戻る日が来た。この世のものと思えないほど、輝くばかり美しくなられましたので、帝は自分の目を信じられない。翌年の春、皇太子を決める時にも、帝は第一皇子を越して、この若宮を皇太子にと思っていた。しかし、後ろ盾になる人もなく、世間が認めそうもないので、無理をすればかえって若宮には危険なことになるかもしれないとさえ思った。このことについて誰にも打ち明けずに気持ちを抑えており、世間の人々も「あれほど可愛がっている若宮でも、ものには限度がある」と言い、これで女御たちも安心した。</p>
<p>44 祖母君は期待も虚しく潰え若宮六歳の年に無念さを残したまま死去「かの御祖母〜」(1805 /一九⑥/三七)</p>	<p>かの御祖母北の方、慰む方なくおぼしづみて、おはすらん所にだに尋ね行かんと願ひたまひしるしにや、つひに亡せたまひぬれば、またこれを悲しびおぼすこと限りなし。御子六つになりたまふ年なれば、このたびはおぼし知りて恋ひ泣きたまふ。年ごろ馴れ睦びきこえたまへるを、見たてまつりおく悲しびをなむ、返す返すのたまひける。</p>	<p>桐壺の更衣の母親は心を静めようもなく悲しみに耽っていた。早く娘の所に行きたいと強く願ひ続けたせいか、とうとう彼女は亡くなってしまって、帝はそのことでひどく打撃をうけた。六歳になった若宮は、今度よく状況を理解し、苦い涙を流した。長年慕っていた祖母は、彼を一人に残して行くのがいかに辛いことかと何度も繰り返言っていた。</p>	<p>更衣の母親は心慰めがなく、悲しみに暮れ、亡き更衣が逝ったところを早く訪ねたいと強く願っていたせいか、しばらくして亡くなってしまった。帝はまた、これをこの上なく悲しいと思ひ、そして若宮はもう六歳になっていたので、今度はよく状況を理解し、恋しがって泣いていた。長い間世話をしてくれたお婆さんの姿を最後に見たときのことを時々話していた。</p>
<p>45 若宮七歳の読書始めの後は、その聡明さと美貌に弘徽殿女御も感服「今は内裏に〜」(1844 /一九⑩/三八)</p>	<p>今は内裏にのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば、読書始めなどせさせたまひて、世に知らず聡うかしこくおはすれば、あまり恐ろしいまで御覧す。 「今は誰も誰もえ憎みたまはじ。母君なくてだにらうたうしたまへ」とて、弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れてまつりたまふ。いみじき武士、仇、敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。</p>	<p>若宮が宮殿で過ごすことになることはもう既に決まっていた。七つになったときに、漢籍の読書始めの儀式に参加をさせてもらったが、今回も類がないほど聡明で賢かった。それを見た父親が何だか恐ろしくさえ思った。「今となっては、誰も彼を憎むことはできない。母親も失ったので、可愛がってあげてください」と言い、彼を連れて弘徽殿を訪れ、竹の幕の中にも入れてあげていた。この世で一番残酷な武士や恐ろしい敵であっても、見ているとつい微笑んでしまうような様子をしていたので、弘徽殿女御も彼を無視することができなかった。</p>	<p>その時以来、若宮はずっと宮殿に住んでいた。七歳になったときにいろいろな勉強を始めたのだが、あまりの賢さに帝は驚いてばかりいた。「今は誰も若宮を憎むことはできないでしょう。まして、母のない子供なので、可愛がってやって欲しい。」と言って、弘徽殿婦人のところにも一緒に若宮を連れて、そのまま御簾の中に入れてあげた。たとえ、恐ろしげな武士や憎い敵であっても、若宮をひと目見て微笑まらずにいられないほど愛らしい様子なので、さすがに弘徽殿婦人も遠ざけることはできなかった。</p>
<p>46 若宮は二人の皇女方より優雅で学問や音曲にも秀でる超人さを発揮「女御子たち〜」(1904 /二〇②/三九)</p>	<p>女御子たち二所、この御腹におはしませど、なずらひたまふべきだにぞなかりける。御方々も隠れたまはず、今よりなまめかしう恥づかしげにおはすれば、いとをかしううちとけぬ遊びぐさに、誰も誰も思ひきこえたまへり。 わざとの御学問はさるものにて、琴、笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ続ければ、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。</p>	<p>彼女は娘が二人いたが、若宮の方が断然に綺麗だった。宮殿の女たちも顔を隠したりせずに、彼と一緒によく遊んでいたが、その美しさや品の良さでこちらが恥ずかしくなるほどだった。学問にも優れていたことは言うまでもなく、琴や笛を操る才能も、雲の上の人を驚かせるほどだったが、それを一つ一つ挙げていくと、大げさすぎて嫌いになってしまうのかもしれない。</p>	<p>彼女には娘が二人いたが、若宮の愛らしさにはとても比べることもできない。ほかの女房たちも、若宮が幼い今でも、優雅で可愛らしく、喜んで一緒に遊んでいた。正式の学問に関していうと、あつという間に琴や笛を完璧に操るようになった。しかし、彼が優れていることを一つひとつ挙げると、大げさすぎて嫌いになってしまうのかもしれないので、やめておこう。</p>

<p>47 高麗の相人は鴻臚館で右大弁の子として来た若宮を観て不思議がる「そのころ〜」(1955/二〇⑥/三九)</p>	<p>そのころ、高麗人の参れる中に、かしこぎ相人ありけるを聞こしめして、宮の内に召さんことは、宇多の帝の御誠あれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館につかはしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて奉てたてまつるに、相人驚きて、あまたたび傾きあやしぶ。「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷の固めとなりて、天下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし」と言ふ。</p>	<p>ある日、高麗というところから来た外交使節団の中に、優れた人相見がいて帝が聞きつけた。宇多の帝が定めた法律で、外国人を宮殿に入れることができなかったが、内密にして外交使節団が泊まっていた鴻臚館に若宮を行かせた。若宮の面御を見ていた右大弁が彼をそちらに連れていき、自分の息子として紹介した。若宮の顔を見るなり、人相見が驚いた様子を見せ、何度も首を傾げた。「国の親となって、帝王の位にのぼる顔を持っているのですが、しかしそうなった場合は国が乱れて、たくさんの人が苦しむことになるでしょう。宮廷の柱になって、政治を支えるような感じでもなさそうです。」という。</p>	<p>その時期に韓国から外交使節団が来たのだが、その中に相見がいた。そのことを知った帝は、宇多の帝が定めた法律で、外国人を宮殿に入れることができなかったが、内密にして外交使節団が泊まっていた鴻臚館に若宮を行かせた。若宮は右大臣と一緒に外国人のところを訪れ、右大臣は自分の息子として彼を紹介した。子供の顔を見るなり、人相見は驚いて、何度も首をかしげて不思議がった。そして、「この子は国の帝王という最高の地位に登るはずの人相のある方ですが、そうすると、国が乱れることになるかもしれません。しかし、朝廷の固めとなって、天下を補佐する方とは見えません。」と言った。</p>
<p>48 博識の右大弁と高麗人が漢詩を作り交わし若宮も興深い詩句を作る「弁も、いと〜」(2019/二〇⑬/四〇)</p>	<p>弁も、いと才かしこぎ博士にて、言ひ交したることどもなん、いと興ありける。文など作りかはして、今日明日帰りに去りなんとするに、かくありがたき人に対面したる喜び、かへりては悲しかるべき心ばへを、おもしろく作りたるに、皇子もいとあはれなる句を作りたまへるを、限りなうめでたてまつりて、いみじき贈り物どもを捧げたてまつる。朝廷よりも多くの物たまはず。おのづからことひろごりて、漏らさせたまはねど、春宮の祖父大臣など、いかなることにかとおぼし疑ひてなむありける。</p>	<p>右大弁も、教養のある人だったので、高麗の人と語り合った話しはとても興味深かった。それぞれ漢詩も作り、高麗の人がもうすぐ帰国間際にそのような特別な方と出会えた喜びと別れの悲しみを、とても洗練された言葉で表現し、それに答えて、若宮はその言葉に見合った素晴らしい作品を作った。それを聞き、高麗の人は心から彼を褒めて、立派な品をたくさん贈った。高麗の人にも朝廷から多くの贈物が与えられた。帝はそのことを誰にも話さなかったが、この訪問についてやがて世間で知れ渡り、皇位継承者の祖父だった右大臣は一体何が起こっているかについて勘ぐり始めた。</p>	<p>左大臣〈ママ〉は教養のある方だったので、相見と話し込んだ。一緒に詩を詠んだりしてから、相見はこう言った。「帰り際にこのように尊い人に逢えてとても嬉しいです。別れるのは辛いですが、素晴らしい思い出ができて良かったです。」若宮も優れた詩を詠み、人相見は彼を褒めて、素晴らしい贈り物をあげた。その代わりに帝も内緒で様々な贈物を贈った。全てが内密に行われたが、しかし皇太子の祖父大臣がそれを知り、あまり好ましく思わなかった。</p>
<p>49 帝は若宮を臣籍降下させ朝廷の補佐役にと決めると学問に励ませる「帝、かしこぎ〜」(2075/二一⑤/四〇)</p>	<p>帝、かしこぎ御心に、倭相を仰せておぼしよりにける筋なれば、今までこの君を親王にもなさせたまはざりけるを、相人はまことにかしこかりけりとおぼして、無品親王の外戚の寄せなきにてはただよはさじ、我が御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなん、行く先も頼もしげなめることとおぼし定めて、いよいよ道々の才を習はせさせたまふ。</p>	<p>聡明な帝は、以前日本人の人相見にも相談をしたのだが、今回と同じ結果を得て、若宮に皇位継承者の位を与えるかを躊躇っていたが、高麗の人の言葉はとても賢いと考え、地位も不安定で、母方の親戚の中には後ろ盾になれるような人もおらず、若宮をかえって危うい境遇にしたいかと思つた。自分の治世もいつまで続くかわからないから、皇位継承から排除して、宮廷での別の役目を与えたほうが将来が安心という結論に達した。そのように決めてから、多方面の学問を習わせた。</p>	<p>帝は日本人の人相見を呼んで、試してみた(M)。いろいろな事を考慮したうえで、若宮を皇位継承者にしないことを考えていると打ち明けて、それについて助言を求めたが、みんなはそれが聡明な決断だと口揃って言った。後ろ盾になるような人がいないので、若宮の立場が危なくならないように、皇位継承者にすることを諦めた。「自分の立場も不安定なので、私のために上幹部の間に動いてもらいましょう。」と思つた。そして、将来が安定するように、それぞれ専門の学問を習わせるよう決心した。</p>
<p>50 帝は宿曜道の判断も参考に、若宮を皇位継承権のない源氏にと決断「際ことに〜」(2120/二一⑩/四一)</p>	<p>際ことにかしこくて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となりたまひなば、世の疑ひ負ひたまひぬべくものしたまへば、宿曜のかしこぎ道の人に勸へさせたまふにも、同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべくおぼしおきてたり。</p>	<p>若宮は格別に賢くて、皇位継承から除外されたことがとても残念だったが、親王にすれば世間の疑惑をこうむることもなると思つて、占い師にも相談した後、帝は息子に〈源氏〉の名前を与えることにした。</p>	<p>若宮は格別に賢くて、皇位継承から除外されたことがとても残念だったが、親王にすれば世間の疑惑をこうむることもなると思つて、占い師にも相談した後、帝は息子に〈源氏〉の名前を与えることにした。</p>
<p>51 更衣が忘れられず世を疎ましく思う帝に、先帝の四の宮の噂が届く「年月にそへ〜」(2147/二一⑬/四一)</p>	<p>年月にそへて、御息所の御ことをおぼし忘るるをりなし。慰むやとさるべき人々(大島本「人々を」)参らせたまへど、なずらひにおぼさるるだにいとたき世かな、と疎ましうのみよるづにおぼしなりぬるに、先帝の四の宮の、御容貌すぐれたまへる聞こえ高くおはします。</p>	<p>それから数年経つたが、帝は未だに桐壺の更衣のことを忘れないでいた。慰められると思つて、宮殿にほかの女性を呼んだが、どんな女性でも桐壺の更衣と比べられる者がいなくて、次第に興味を失い、世の中のことがすべて嫌になった。そのときに、先の帝の四女で、(一部底本と訳の順番が逆)</p>	<p>年月が過ぎても、帝は亡き更衣のことを忘れられず、心の慰めになろうかと、美しい女性たちを入内させられたが、亡き更衣ほど好きになる人がいなかった。そのときに、美しさが評判で、噂されていた女性がいた。先帝の四女で、</p>
<p>52 典侍は先帝の四の宮を亡き更衣に生き写しだと奏上し帝の気を引く「母后世になく〜」(2173/二二②/四一)</p>	<p>母后世になくかしづききこえたまふを、上にさぶらふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはましし時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、「亡せたまひにし御息所の御容貌に似たまへる人を、三代の宮仕へに伝はりぬるに、え見たてまつりつけぬを、後の宮の姫宮こそ、いとよおぼえて生ひ出させたまへりけれ。ありがたき御容貌人になん」と奏しけるに、まことにやと御心とまりて、ねむごろに聞こえさせたまひけり。</p>	<p>母后に大切に育てられた、美しいことで評判の女性がいると知つた。帝に仕えている典侍は先の帝のときからずっと宮殿にいて、母後の部屋にも自由に出入りできる身だったのだが、幼少時代から姫のことを知っており、今でも時々会っていたようだった。「三代の帝にお仕えてまいりましたが、亡くなった更衣と顔が似ている人とは今まで会ったことがございません。しかし、成長するにつれて、姫は更衣にそっくりになってきて、稀に見る美しい方です。」と話す、帝の好奇心をかきたてた。そんなことはあるまいと思ひながらも帝はその女性を宮殿に誘った。</p>	<p>母后は彼女をこの上になく大切に育つたと言われていた。先帝に仕えていた女御はその姫君と親しく、子供の頃から見てきたし、宮殿に住んでいない今でもやり取りがあった。「何人の帝に仕えてきたが、特に四番目の姫君が、亡き桐壺の更衣の容貌によく似て、世にもまれな器量と評判の姫君です。」と彼女が話していた。帝はその言葉を聞き、本当かどうかを確かめたくなった。</p>
<p>53 帝を巡る女たちの怖さを言う四の宮の母が死ぬと、入内の道が開く「母后、「あな〜」(2233/二二⑧/四二)</p>	<p>母后、「あな恐ろしや、春宮女御のいとさがなくて、桐壺更衣の、あらはにはかなくもてなされにし例もゆゆう」と、おぼしつみて、すがすがしうもおぼしたたざりけるほどに、后も亡せたまひぬ。心細きさまにておはしますに、「ただ我が女御子たちの同じつらに思ひきこえん」と、いとねんごろに聞こえさせたまふ。</p>	<p>しかし、母后はその誘いに乗り気ではなかった。母親女御はとても意地が悪く、桐壺の更衣の露骨ないじめはそのいい例だった。しかし、決心がつかなかったうちに、母后が亡くなった。姫は一人ぼっちで心細くなり、その反面帝は熱心に彼女を誘い続けた。娘のように世話をすると伝えた。</p>	<p>母后は更衣のことや弘徽殿婦人の意地悪さについて知っており、とても心配だった。そのことについては誰にも打ち明けられずにいたものの、入内をできるだけ先延ばしにしていたが、決心もつかない間にこの母后も亡くなってしまった。姫君が心細い様子だったので、帝は自分の娘として扱うと約束し、彼女を宮殿に誘った。</p>

54 不思議なほど更衣に似る四の宮は周りに押され入内し藤壺と称する「さぶらふ人々〜」(2264 / 二二⑩ / 四二)	さぶらふ人々、御後見たち、御兄の兵部卿の親王など、かく心細くておはしまさんよりは、内裏住みせさせたまひて、御心も慰むべくなどおぼしなりて、参らせたまつりたまへり。藤壺と聞こゆ。げに御容貌ありさま、あやしきまでおぼえたまへる。	姫に仕えている人、親戚や兄の兵部卿宮なども、一人で寂しさに耽るより、宮殿で生活すれば気が紛れると思って、やがて入内させた。宮殿では、藤の部屋に住む女性、藤壺という名で知られていた。顔も姿も、驚くほど桐壺の更衣に似ていた。	姫君が心細い様子だったので、帝は自分の娘として扱おうと約束し、彼女を宮殿に誘った。姫君にお仕えしている人々や、後見の人たち、兄の兵部卿などは、姫君がこうに心細くいるより、宮殿で住んだほうが慰めになると思って、姫君を入内させた。彼女は藤壺という名の部屋に住むことになったので、その名前でも知られていた。帝はこの姫君は本当に亡き更衣に似ていたということを確認できずを得なかった。
55 藤壺は皇女の身ゆえに誰に気兼ねもなく、帝の寵愛もしだいに移る「これは人の〜」(2295 / 二三② / 四三)	これは人の御きはまさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまはねば、うけばりてあかぬことなし。かれは、人の許しきこえざりしに、御心ざしあやにくなりしぞかし。おぼし紛るとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こよなおぼし慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。	姫は身分も高く、それに見合った扱いを受けていたが、彼女の悪口を言う人がいなく、何も心配することなく生活を送ることができた。誰も認めようとしなかった桐壺の更衣は、帝に愛されすぎたのであった。今でも、帝はその強い愛を忘れることができないでいたが、次第に姫のほうに心が移り始めた。そのように気持ちが慰められていくのも自然なことだったと言える。	更衣に比べると身分も高く、立派な方で、誰も見下すこともできず、宮中で気がねなく振る舞っていた。亡き更衣は帝の寵愛が深かったが、身分が低いことで世間がそれを認めることなく、大層苦しむことになった。更衣に対する愛情はなくなることはなく、更衣によく似た女性と一緒に時間を過ごすことで悲しみが紛れることがあったものの、帝にとって生きることがとても辛かったのである。
56 源氏の君は常に父帝の傍にいて、若く美しい藤壺の姿を透き見する「源氏の君は〜」(2327 / 二三⑤ / 四三)	源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡らせたまふ御方は、え恥ぢあへたまはず。いづれの御方も、我人に劣らむとおぼいたるやはある、とりどりにいとめでたけれど、うち大人びたまへるに、いと若うつくしげにて、せちに隠れたまへど、おのづから漏り見たてまつる。	若宮はいつも父親のそばにいたので、帝に仕えていた女性たち、特に帝がよく訪問する女房は彼の存在に慣れていた。どの女性でも一自分の方が劣っていると思う人がいるのだろうか―それぞれとても綺麗だったが、若いとは言えない年齢だった。それに引き換え、藤壺は若くて可愛らしく、ずっとカーテンに隠れていたものの、若宮は自然と彼女のことが気になっていた。	今や源氏の君（源の人）と呼ばれていた若宮はいつも帝のそばにいた。女御と更衣と毎日接していたので女の扱いに慣れており、毎日帝の部屋を訪れる藤壺に対しても積極的だった。当然ながら彼は女性たちの間に大人気だったし、それに対して彼もまんざらではなかった。ほとんどはかなり歳上だったのだが、藤壺だけが本当に若くて可愛らしく、自分を隠そうとしていたが、源氏の君は自然とその姿を垣間見てしまった。
57 三歳で母と死別した源氏の君は、母に生き写しだという藤壺を慕う「母御息所も〜」(2370 / 二三⑨ / 四三)	母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、「いとよう似たまへり」と典侍の聞こえけるを、若き御心地にとあはれと思ひきこえたまひて、つねに参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ。	若宮は死んだ母親の顔もほとんど覚えていなかったが、典侍が桐壺の更衣によく似ていると言っているのを聞いて以来、若い心がひどく当惑し、片時も藤壺のそばにいたかった。	彼は桐壺の更衣のことは覚えていなかったが、藤壺が亡き更衣によく似ていると聞かされていたので、そのことが引っかかって、できるだけ彼女と仲良くなり、ずっとそばにいたかった。
58 帝は藤壺と源氏を愛し、更衣の形代である藤壺に源氏は好意を示す「上も、限りなき〜」(2396 / 二三⑩ / 四四)	上も、限りなき御思ひどちにて、「な疎みたまひそ。あやしくよそへきこえつべき心地なむする。なめしとおぼさで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどは、いとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも、似げなからずなん」など聞こえつけたまへれば幼心地にも、はかなき花、紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。	帝は二人とも深く愛していたので「冷たくしないであげてください。不思議なことに、あなたとその子の死んだ母親は本当によく似ています。彼の態度を失礼だと思わないで優しくしてあげてください。顔つきや目が母親にそっくりなので、あなたが母親に見てもおかしくないはないのです。」と帝は言う。若宮は、子供心に、どんなときでも口実を作って一例えば春の桜や秋の紅葉など―藤壺に自分の愛情を伝えていた。	ある日帝は「この子を遠ざけないでください。不思議にこの子の母に、あなたを置き換えて見ているようですので、失礼と思わずにどうぞ可愛がってください。顔つき、目元など、よく似ていましたので、母のように見えるのも、無理ないのです。」と彼女に言った。このように、まだ幼い源氏の君の心の中に、初めて特別な感情が湧き始めた。
59 弘徽殿と藤壺が陰悪な中、世の人は光る君とかかやく日の宮と賞讃「こよなう〜」(2433 / 二四① / 四四)	こよなう心寄せきこえたまへれば、弘徽殿女御、またこの宮とも御仲そばそばしきゆゑ、うちそへて、もとよりの憎さもたち出でて、ものしとおぼしたり。世に類ひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御容貌にも、なほにほはしさはたとへん方なく、うつしげなるを、世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとどりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。	彼の愛情表現はあまりにも露骨過ぎたので、母女御は好ましく思わず、藤壺とも仲が悪く、これに加えて、桐壺の更衣への以前からの憎しみが蘇ってきた。美しいと名高い自分の息子も、若宮の輝く美しさにはかなわなかった。世間は彼のことを<光源氏>と呼んでいた。そして、若宮と同じぐらい帝に愛されていた藤壺は、<輝く日の姫>と呼ばれていた。	弘徽殿婦人はこの藤壺とも仲がよくないのに加えて、もとの憎さも出て、源氏の君を不快に思っていた。弘徽殿婦人の子供たちは美しかったが、源氏の君の光り輝く美しさとは比べ物にならなかったのである。あまりの美しさに彼はみんなに「光源氏」と呼ばれ、とても人気の高い藤壺は「輝く日」と呼ばれていた。
60 光源氏は十二歳で兄東宮に劣らぬ元服の儀式を帝の主導で執り行う「この君の〜」(2483 / 二四⑤ / 四四)	この君の御童姿、いと変へまうくおぼせど、十二にて御元服したまふ。居起ちおぼしいとなみて、限りあることに、事をそへさせたまふ。一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式、よそほしかりし御響きにおとさせたまはず。所々の饗など、内蔵寮、穀倉院など、公事に仕うまつれる、おろそかなることぞ、ととりわき仰せ言ありて、清らを尽くして仕うまつれり。	服装を変えさせるのは残念だったが、源氏の君が十二歳になったときに元服の儀式が行われ、大人にふさわしい服装を着ることになった。先年に行われた長男の儀式にも劣らないように、帝自ら気を配り、決まった儀式にそれ以上のことを付け加えたりもした。儀式の後に続く食事会も、内蔵寮や穀倉院などがいつも通り指示をしたら、粗略なことになるのではないかと心配し、すべてが完璧であるように、特別な指示を出した。	源氏の君の姿があまりにも可愛らしいので、大人の服を着させるのは残念だったが、もう十二歳になったので、入所式の時期が迫っていた。帝は自ら準備に取り掛かり、必要以上に盛大な式を開催した。前の年に行われた長男の入所式に劣らないほど立派に行われた。いろいろな部屋で行われる予定の祝宴などは内蔵寮や穀倉院の管轄だったが、疎かなことがあってはならないと思い、特別に帝は自ら準備の一部始終を監視した。その結果、全ては完璧だった。
61 清涼殿で左大臣が光源氏に冠を被せ、帝は更衣がいたらと感極まる「おはします〜」(2537 / 二四⑩ / 四五)	おはします殿の東の廂、東向きに椅子立てて、冠者の御座、引き入れの大臣の御座、御前にあり。申の時にて源氏参りたまふ。みづら結ひたまへるつらつき、顔の匂ひ、さま変へたまはむこと惜しげなり。大蔵卿、藏人仕うまつる。いと清らなる御髪をそぐほど、心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばとおぼし出づるに、堪へがたきを、心強く念じかへさせたまふ。	帝がお住まいになっていた部屋の東の縁側に王座が東向きに位置され、その前に若宮の席と、儀式に必要な被り物を渡す役目を担う左大臣の席が用意されていた。源氏の君は申の時に来た。角髪に結っている美しい顔のみで、その姿を変えてしまうのがいかに心苦しいことか。大蔵大臣は彼の髪を切るようになっていた。大蔵大臣が苦しそうな表情を浮かびながら髪を切ったときに、帝は桐壺の更衣のことを思い出し、彼女が息子の晴れ姿を見られないことを悔しく思ったが、気を強くしてその耐え難い気持ちをこらえた。	式は帝が住んでいた建物の東側の部屋で行われた。帝の座は東向きに配置されており、源氏の君と引入の大臣（左大臣）の椅子はその目の前に配置されていた。源氏の君は申の時刻に着いた。子供らしく髪の毛が長く伸びていたが、式のしきたりに則って紫のリボンを結んであげた引入の大臣はそのあまりに可愛らしい姿をみて、髪を削いでしまうのが惜しいと思うほどだった。理髪役を担うようになっていた大蔵卿もその綺麗な髪を切るのを躊躇っていた。帝は、亡き更衣が見たらどんなに嬉しいであろうと一瞬思い出したが、それを考えないように努めた。

62 加冠の儀の後、光源氏の拜舞にみなは感涙し帝も更衣を想い感無量「かうぶり〜」(2580／二五①／四五)	かうぶりしたまひて、御休み所にまかてたまひて、御衣奉りかへて、おりて拝したてまつりたまふさまに、皆人涙落としたまふ。帝はた、ましてえ忍びあへたまはず、おぼし紛るるをりもありつる昔のこと、とりかへし悲しくおぼさる。いとかうきびはなるほどは、あげ劣りやと疑はしくおぼされつるを、あさましうつつしげさ添ひたまへり。	源氏の君が被り物を頭につけてから、部屋に入り、大人の服装に着替えた。その後しきたり通り庭に出て、挨拶に回ったが、そこにいた人々はみんな涙をこぼした。帝は特に自分の気持ちを隠すことができなかつた。少しの間を忘れることができた過去のこの思い出がまた頭をよぎった。まだ幼く、髪を上げたら美しくなくなるのではと心配だったが、かえて新しい髪型によって美しさが増した。	*冠を被った源氏の君は自分の部屋に戻り、大人にふさわしい服装に着替え、そしてもう一度みんなが集まっている場所に戻り、お礼のダンスを行うと、皆は涙を流した。帝はその時までには気を強くしてこらえてきたが、昔の記憶が蘇りとても辛かった。
63 左大臣は娘を春宮ではなく光源氏の元服の添い臥しに心積もりする「引き入れの〜」(2623／二五⑥／四六)	引き入れの大臣の、皇女腹にただ一人かしづきたまふ御娘、春宮よりも御気色あるを、おぼしわづらふことありける、この君に奉らむの御心なりけり。内裏にも、御気色たまはらせたまへりければ、「さらば、このをりの後見なかめるを、添ひ臥しにも」と、もよほさせたまひければ、さおぼしたり。	儀式のときに被り物を源氏の君に渡す役目を果たした左大臣には、一人の娘がいた。その娘は左大臣と皇女の間生まれ、大切に育てられたのだが、帝の長男から求婚の申し出を受けた。しかし、大臣は源氏の君の妻にしたかったので、まだ決め兼ねていたのであった。宮廷ではそのことについて反対している人はいないようだった。「それでは、源氏の君に後ろ盾になる人がいないので、今夜そばにいる女性を与えるのはどうでしょう…」と帝に言われ、大臣は賛成した。	引入の大臣には一人娘がいて、帝の長男は既に彼女のことが気になっていた。しかし、左の大臣は帝の長男より、源氏の君と結婚させたがっていた。その結婚によって源氏の君は強い後見役も得られることもあったので、帝はそのことをすごく喜んだ。
64 祝宴で左大臣から娘葵の上との結婚を仄めかされ光源氏は恥じらう「さぶらひに〜」(2658／二五⑨／四六)	さぶらひにまかてたまひて、人々大御酒などまあるほど、親王たちの御座の末に、源氏着きたまへり。大臣気色ばみきこえたまふことあれど、ものの憤ましきほどにて、ともかくもあへしらひきこえたまはず。御前より、内侍、宣旨承り伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。御祿のもの、上の命婦取りてたまふ。白き大柱に御衣一領、例のことなり。	みんなが食事会の部屋に入り、お祝いの酒を飲んでいるときに、源氏の君は朝王たちの後に着席した。大臣は娘のことについてそれとなくほのめかしたのだが、源氏の君は気恥ずかしい年頃だったので、何と答えるべきか困っていた。帝の命令に従って、内侍が大臣に帝のところに行くように伝え、命婦という位を持つ女性がそのときにふさわしい品を渡した。その品のなかで白い大柱と御衣などがあつた。	愛のお酒を飲むためにみんなが集まったとき、源氏の君は親王と一緒に席に着いた。左の大臣は彼に近づき、耳元に何かを囁いたが、源氏の君が顔を赤くして、何も答えられない。帝から宣旨を受けて、左大臣は帝の前に言った。帝つきの更衣が取り次いで、白い大柱と女性用のスカートを渡された。引入として、左大臣はその品をもらうことになっていた。
65 左大臣は帝から二人の結婚を催促されると返歌で応諾して拜舞する「御盃のついで〜」(2703／二五⑭／四七)	御盃のついでに、 いとときなきはつもとゆひに長き世をちぎる心は結びこめつや 御心ばへありて驚かせたまふ。 結びつる心も深きもとゆひに濃きむらさきの色しあせずは と奏して、長橋よりおりて、舞踏したまふ。	帝は大臣に酒の盃を渡しながら、詩を通して自分の気持ち传达了。 幼い髪の毛のリボンを結んだときに 永遠に続く恋の約束も結ばれたのか 注意深く結ばれた紫のリボンは いつまでも濃いままで、色褪せないで いたらどんなに素晴らしいことでしょう と大臣が答え、渡り廊下から庭に降りて、恒例の挨拶を行った。	帝と一緒にお酒を飲み、帝は式の際に使われた紫のリボンは二つの家族の絆に例え詩を詠んだ。左大臣は、そのリボンの色が褪せない限り、その関係がずっと続くはずという意味の詩で答えた。そう言って、長廊下から東庭に降りてお礼を言った。
66 左大臣や親王たちは祿を賜い、この日の元服の儀式は春宮より盛大「左馬寮の〜」(2730／二六④／四七)	左馬寮の御馬、蔵人所の鷹掬えてたまはりたまふ。御階のもとに、親王たち上達部連ねて、祿ども品々にたまはりたまふ。その日の御前の折櫃物、籠物など、右大弁なん承りて仕うまつらせける。屯食、祿の唐櫃どもなど所狭きまで、春宮の御元服のをりにも数まされり。なかなか限りもなくいかめしうなん。	左馬寮からは馬を一つ、蔵人所から鷹を一羽プレゼントにもらった。庭に並べ、朝王や大臣たちがそれぞれ身分に応じた贈物ももらった。美味しいものでいっぱいになっていた檜のお盆と果物の籠は右大弁が帝の指示に従って用意をしたものだった。蒸したご飯と贈物の入った唐櫃などが溢れかえって置く場所がなく、長男の式の時よりも多かった。この上なく盛大な会だった。	更に左大臣は左馬寮の馬と蔵人所の鷹を源氏の君に贈った。階段のところと並んでいた親王たちや上達部たちにも、豪華な品が配られた。その日の帝の命令で折詰物や籠物などは、右大弁に承って整えた。屯食や唐櫃など、置く所もないほどで、長男の入所式の時よりも多かった。
67 元服した光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚「その夜〜」(2768／二六⑥／四七)	その夜、大臣の御里に、源氏の君まかてさせたまふ。作法世にめづらしきまで、もてかしづきこえたまへり。いとくびはにておはしたるを、ゆゆしうつつしと思ひきこえたまへり。女君は、少し過ぐしたまへるほどに、いと若うおはすれば、似げなく恥づかしとおぼいたり。	その夜、若い源氏の君は左大臣の邸に連れていかれた。迎えられた儀式は丁寧で、みんなが彼をとても親切に扱っていた。源氏の君はとても若く信じられないほど美しく見えたが、それを見て、彼より少し歳上の女性が自分のことを恥づかしくさえ思った。	その夜源氏の君は左大臣の家を訪れ、婚約の儀式が盛大に行われた。源氏の君は少し子供っぽくみえたが、みんなが彼の美しさに息を飲んだ。しかし、彼の妻になる女性は少し歳上だったので、彼の子をこども子供にみえて恥づかしかった。
68 左大臣は帝の信頼に加えて光源氏まで加わり右大臣家を凌ぐ勢いに「この大臣の〜」(2800／二六⑩／四八)	この大臣の御おぼえいとよむごとなきに、母宮、内裏の一つ后腹になんおはしければ、いづ方につけてもいと華やかなるに、この君さへかくおはしそひぬれば、春宮の御祖父にて、つひに世の中を知りたまふべき、右大臣の御勢は、ものにもあらずおされたまへり。	この大臣は帝の信頼が厚く、母宮が、帝と同じ母から生まれたので、どちらからみても彼の地位は輝かしかった。今もなお、源氏の君が加わったので、右大臣で、将来国の政治を担うことになるであろう皇位継承者の祖父も、頭が上がらないほど安定していた。	該当箇所はナシ
69 左大臣家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う「御子ども〜」(2833／二七①／四八)	御子どもあまた、腹々にものしたまふ。宮の御腹は蔵人少将にて、いと若うをかしきを、右大臣の、御仲はいとよからねど、え見過ぐしたまはで、かしづきたまふ四の君にあはせたまへり、劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになん。	右大臣は何人かの妻がいて、子供も多かったが、その中で、第一夫人から生まれ、今は蔵人少将になっていた息子が一人いて、その子はとても若くて心惹かれるものがあつた。右大臣は、左大臣の家族とは仲がさほどよくはなかつたが、それでもこの若い男の魅力を見過ごすことはできず、大事に育てられた四女と結婚させた。源氏の君を大切にしている左大臣と同じように、丁寧に接しているの、それぞれの家族の中では、理想的な関係が築かれていた。	該当箇所はナシ

<p>70 光源氏は藤壺を理想の女性として慕って想い悩み、葵の上とは疎遠「源氏の君は〜」(2863／二七④／四九)</p>	<p>源氏の君は、上の常に召しまつはせば、心やすく里住みもえしたまはず。心のうちには、ただ藤壺の御ありさまを、類ひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおほしけるかな、大殿君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きほどの心一つにかかりて、いと苦しきまでぞおほしける。</p>	<p>若い源氏の君は、帝がいつもそばに置きたかったので、左大臣の邸でゆっくり時間を過ごすことはなかった。心の中では、ほかの人に比べようがない藤壺の美しさのことを忘れられず、「彼女のような妻がいればどんなに幸せだろう!」と思っていた。大臣の娘は美しかったし、大切に育てられた人だと分かりながらも心から愛することができず、かえって、幼いだけに、藤壺への愛は苦しいほどだった。</p>	<p>帝は源氏の君が宮殿に住むように勧めたので、彼は独立した住まいを持たなかった。心の中では彼女が恋しくて、彼女のような人と一緒にずっといたいと願っていた。周りの人は婚約者の葵の上を褒めていたが、彼はずっと藤壺のことばかりを考えていて、辛くなるときもあった。</p>
<p>71 宮中での光源氏は藤壺の存在を慰めとし、左大臣家は温かく気遣う「大人になり〜」(2912／二七⑨／四九)</p>	<p>大人になりたまひて後は、ありしやうに御簾の内にも入れたまはず。御遊びの折々、琴、笛の音に聞こえ通ひ、ほのかなる御声を慰めにて、内裏住みのみ好ましようおぼえたまふ。五六日さぶらひたまひて、大殿に二三日など、絶え絶えにまかでたまへど、ただ今は、幼き御ほどに、罪なくおぼしなして、いとなみかしづききこえたまふ。御方々の人々、世の中におしなべたらぬを、選(え)り整えすぐりてさぶらはせたまふ。御心につくべき御遊びをし、おほなおほなおほしいたつく。</p>	<p>大人になってから、昔のように竹の幕に入ることはできず、音楽の遊びの際に、遠くから聞こえる藤壺の琴に自分の笛を合わせて、幕の中から漏れてくる微かな藤壺の声を慰めにして、宮殿での生活だけは楽しく思えた。五、六日を宮殿で働き、左大臣のところで二、三日を過ごしていたが、まだ若いので仕方ないと思って、左大臣はあえて彼を叱ろうとしなかった。夫婦に仕えている女房たちは、世の中に稀に見る品が高く、常に心にかなうような遊びを開催していた。</p>	<p>大人になってから昔のように女性の住む部屋に自由に出入りができなくなった。管弦の遊びのときなど、藤壺の弾く琴の音に合わせて、源氏の君は笛をお吹き、時々聞こえてくる藤壺のほのかな声を心の慰めに、好んで宮中にいた。五、六日を宮廷に過ごして、二、三日を婚約者の家に過ごすことにしていた。もっと頻繁に通うべきだったが、左大臣は、今はまだ幼い年頃なので、罪のないことだと思って、いつも心をこめて彼を歓迎していた。世の中の優れた女房たちを選びすぐってお仕えさせて、源氏の君の好みそうな催しをし、できる限り世話を焼いていた。大人になってから昔のように女性の住む部屋に自由に出入りができなくなった。管弦の遊びのときなど、藤壺の弾く琴の音に合わせて、源氏の君は笛をお吹き、時々聞こえてくる藤壺のほのかな声を心の慰めに、好んで宮中にいた。五、六日を宮廷に過ごして、二、三日を婚約者の家に過ごすことにしていた。もっと頻繁に通うべきだったが、左大臣は、今はまだ幼い年頃なので、罪のないことだと思って、いつも心をこめて彼を歓迎していた。世の中の優れた女房たちを選びすぐってお仕えさせて、源氏の君の好みそうな催しをし、できる限り世話を焼いていた。</p>
<p>72 後の二条院を修築し、そこで理想の女性と暮らしたいと望む光源氏「内裏には〜」(2976／二七⑭／五〇)</p>	<p>内裏には、元の淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人々、まかで散らずさぶらはせたまふ。里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨下りて、二なう改め造らせたまふ。元の木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めでたく造りののしる。かかる所に、思ふやうならむ人を据えて住まばやとのみ、嘆かしようおほしわたる。光る君といふ名は、高麗人のめできこえて、つけたてまつりけるとぞ、言ひ伝へたとなむ。</p>	<p>宮殿では、以前桐壺の更衣が住んでいた部屋に寝泊りをし、母親に仕えていた女房たちが彼の世話をしていた。さらに、修理職や内匠寮が、桐壺の更衣の実家を改築するように命令された。立木や築山は昔から豪邸の魅力の一つだったが、さらに庭を大きくして、立派になっていた。そこで理想の人と一緒に過ごすことができればどんなにいいだろうとため息をつきながら思っていた。「光君」というあだ名は高麗の人が彼を賞賛して付けたと言ひ伝えられている。</p>	<p>宮中では、亡き桐壺更衣の部屋だった淑景舎を与えられて、母親にお仕えしていた女房たちが散々にならずそのまま源氏の君に仕えていた。桐壺の更衣の実家は大層荒れていた。帝は修理職や内匠寮に帝に命令を出して、この上ないほど立派に改築させた。もとの木立や山の佇まいに池を広く掘って、趣のある様子になった。源氏の君はこのように好きな人と一緒に暮らしたらどんなに幸せだろうと悲しげに思った。「光」という名は、韓国の人相見が彼を褒めたときに名付けたと言ひ伝えられているようだ。</p>

●スペイン語訳『十帖源氏』データ

小見出し	十帖源氏 校訂本文	十帖源氏 現代語訳	十帖源氏 (スペイン語・非母語話者／濱口さん)	十帖源氏 (スペイン語・非母語話者／猪瀬先生)
ナシ	<p>1丁裏・2丁表</p> <p>光源氏物語は、村上天皇女十宮大斎院より、一条院の後上東門院へ「めづらかなる草子や侍る」と、御所望の時、式部をめして「何にてもあたらしく作りてまいらせよかし」と、おほせらる。式部、石山寺にこもりて、此事を祈り申す。折しも、八月十五夜の月、湖水にうつりて、物語の風情空にうかびければ、先、須磨の巻より書たと也。巻の数は天台六十巻、題号は四諦の法門「有門空門亦有亦空門非有非空門」也。一には詞をとり、二には歌をとり、三には詞と歌とを取、四には歌にも詞にもなき事也。始は「藤式部」といひしを、此物語一部の内むらさきの上の事を勝れておもしろく書たるゆへ、「紫式部」といひかへらるゝ也。観音ノ化身ト云々。檀那院僧正天台一心三観血脉許可也。堤中納言兼輔—惟正〔傍・=因幡守〕—為時〔傍・=越前守〕—女〔傍・=紫式部〕母は為信〔傍・=撰津守〕女堅子 (「四には」から2丁表)</p>	<p>『源氏物語』の誕生</p> <p>〈村上天皇〉の十番目のお姫さまである〈選子内親王(大斎院)〉が、〈一条院〉の後である〈藤原彰子(上東門院)〉に「新作の物語はありませんか」と、お望みになりました。〈彰子〉は、《紫式部》を呼んで「がんばって《物語》を新しく作ってきてください」と、おっしゃいました。《紫式部》は、《石山寺》に滞在して、この事を祈りました。すると、《八月十五夜の満月》が、《琵琶湖》の水面に映って、物語の風情が頭に浮かんだので、まず、須磨の巻から書いたそうです。『源氏物語』の巻の数は天台の教典六十巻をもとにして(現在の『源氏物語』は五十四巻)、巻の名前は四諦の法門、「有門、空門、亦有亦空門、非有非空門」という文を参考にして名付けました。第一には物語の本文から、第二には和歌から、第三には本文と和歌から、第四には和歌にも本文にもないところから、巻の名前を決めました。もともと「藤式部」と呼ばれていましたのを、この物語の一部で〈紫の上〉のことをとてすばらしく書いていたことから、「紫式部」と呼び名が変えられたのです。〈紫式部〉は、観音の化身だという伝説もあります。檀那院僧正に天台一心三観の血脉を許されたのです。</p> <p>紫式部の系図</p> <p>堤中納言兼輔—因幡守惟正—越前守為時—女(紫式部)母は撰津守為信女の堅子です。</p> <p>(注) 一般的な説とは異なる部分もあります。類似した系図が『源氏物語』の注釈書である、『湖月抄』にあります。</p>	<p>〔1丁裏〕</p> <p>El nacimiento de « la historia de Genji »</p> <p>La décima princesa del emperador Murakami, Senshi Nai Shinno (Oosai-in), pidió a Fujiwara no Shoshi (Jotomon-in), mujer del príncipe Ichijo, que ella le cuente unas nuevas historias. Shoshi llamó a Murasaki Shikibu y le dijo - Haz unas nuevas historias con esfuerzo, por favor.</p> <p>Durante su estancia en el templo Ishiyama, Murasaki Shikibu rezó por esto. Entonces, la luna llena del 15 de agosto se reflejó en el lago de Biwa. Dicen que, como las escenas de la historia le salieron en ese momento, comenzó a escribir ante todo el tomo de Suma. El número de tomos de la historia de Genji fue decidido en base a 60 tomos del sutra de la Escuela Budista del Tiantai (“La historia de Genji” de hoy en día tiene 54 tomos), y los nombres de cada tomo puestos con referencia a 4 lecciones principales de Buda para llegar a la verdad absoluta, o sea “Umon, Kumon, Yakuuyakukumon y Hiuhikumon”. Primero, [2丁表]</p> <p>del texto de la historia, segundo, de los poemas japonesas, tercero, del texto y de los poemas japonesas y cuarto, de donde no hubo ni en él ni en ellos, decidí los nombres de cada tomo.</p> <p>Se llamaba originalmente Fujishikibu, pero su sobrenombre cambió porque ella escribió muy bien sobre Murasaki no Ue. Hay una leyenda que dice que Murasaki Shikibu era un dios budista de la Merced encarnado. Un bonzo principal de la escuela Danna le autorizó a suceder la idea de Isshin Sangán.</p> <p>Genealogía de Murasaki Shikibu</p> <p>Tsutsumi Chunagon Kanesuke – Inabanokami Koretada – Echizenokami Tametoki – mujer (Murasaki Shikibu)</p> <p>Su madre era mujer de Settunokami Tamenobu y tenía una hija, Katakó</p> <p>Nota: en parte es diferente de la teoría normal. Hay una genealogía similar en Kogetsu-sho, libro de comentarios sobre la historia de Genji</p>	<p>Página 1-ii</p> <p>El nacimiento de La historia de Genji</p> <p>En la época de Heian, la princesa Senshi (también denominada Dai-Saiin), la décima hija del emperador Murakami, un día, preguntó a una de las mujeres del emperador retirado Ichijō-in, Fujiwara no Shōshi (también llamada Jōtōmon-in) si sabía de algún relato nuevo. Entonces, Shōshi encargó a Murasaki Shikibu que escribiera una nueva historia, poniendo todo el esfuerzo que pudiera.</p> <p>Shikibu acudió al templo Ishiyama a rezar para cumplir bien el encargo. Allí, ante la luna llena del 15 de agosto reflejada en el lago Biwa le vino la inspiración y empezó a escribir.</p> <p>Cuentan que primero escribí el capítulo de Suma. Aunque la versión de Genji que nos ha llegado tiene solo 54 capítulos, su idea era escribir 60, siguiendo los 60 volúmenes del Sutra de la escuela budista Tendai. Los títulos de los capítulos los establecí siguiendo los principios de «las cuatro puertas para encontrar la verdad» de la misma escuela: en primer lugar considerando la historia, en segundo lugar, los poemas que se incluyen en ella, en tercer lugar teniendo en cuenta ambas cosas...</p> <p>Página 2-i</p> <p>...y por último, sin basarse en ninguna de ellas.</p> <p>El nombre original de la autora era Fuji Shikibu (Dama de Vistaria). Sin embargo, la descripción de una de las protagonistas de su relato, Murasaki no Ue (Esposa Púrpura), era tan maravillosa que la gente la empezó a llamar Murasaki Shikibu (Dama Púrpura).</p> <p>También dicen que ella era un avatar de la misma Kannon, la diosa budista de la misericordia. El monje de alto rango del famoso templo Danna-in la aceptó como discípula de la escuela Tendai.</p> <p>Árbol genealógico de Murasaki Shikibu</p> <p>Fujiwara no Kanesuke – Fujiwara no Masatada – Fujiwara no Tametoki – la hija (Murasaki Shikibu)</p> <p>La madre de Murasaki Shikibu era hija de Fujiwara no Tamenobu, que se llamaba Katakó.</p> <p>(NOTA) Existen otras versiones del árbol genealógico. La presente versión es parecida a la que sale en Kogetsushō, un libro de comentario de la historia de Genji.</p>

ナシ	2丁裏 絵	〈絵1〉八月十五日の夜、石山寺で、紫式部が、『源氏物語』を書きはじめた場面 (2丁裏)	〔2丁裏〕 Dubujo 1 Por la noche del 15 de agosto en el templo Ishiyama, escena donde Murasaki Shikibu comenzó a escribir la historia de Genji	Página 2-ii (Imagen 1) La noche del 15 de agosto, cuando Murasaki Shikibu empezó a escribir La historia de Genji en el templo Ishiyama.
1 ある帝の御代に、身分は高くない更衣への帝寵を女御方は憎悪する 「いづれの御時〜」(0001／五①／一七)	3丁表 いづれの御時にか、女御かうみ、あまたさぶらひ給ける 中に、いとやんどときゝにははあらぬが、すぐれてときめき給ふありけり。〔割・いづれの御時とは、醍醐天皇をさしていへり。／時めき給ふとは、「きりつぼの更衣」の事也。〕 梨壺、照陽舎。 桐壺、淑景舎。 藤壺、飛香舎。 梅壺、凝花舎。 雷鳴壺、襲芳舎。 此きりつぼにすみ給ふかうみを、御てうあひあれば、きりつぼのみかどゝも申也。あまたの女御かうみそねみて、 (「いづれ」から3丁表)	(桐壺) いつの時代のことでしょうか、女御や更衣などといったお后が大勢いらした中に、特に高貴な身分ではなく、帝にとでも愛されていた女性がいまして。〔「いつの時代」とは、醍醐天皇の時代のことです。帝に愛されていた女性というのは、桐壺の更衣です。〕宮殿の梨壺という建物は照陽舎の別名です。桐壺という建物は淑景舎の別名、藤壺という建物は飛香舎の別名、梅壺という建物は凝花舎の別名、雷鳴壺という建物は襲芳舎の別名です。(お後の名前には、それぞれの住んでいる建物の名前前で呼びます)この桐壺に住んでいる更衣を愛されたので、この時の帝のことを桐壺の帝ともいいます。大勢の女御や更衣たちはうらやんで、毎日桐壺の更衣が帝の近くにいることに、嫉妬をしてばかりいました。	〔3丁表〕 ¿En qué época estaban? Entre muchas damas del rango como Nyogo o Koi estaba una mujer, proveniente no particularmente de alto rango, que el emperador amaba mucho. ("En qué época" quiere decir la del emperador de Daigo. La dama que el emperador amaba mucho fue la dama de Kiritsubo, o sea la dama de Paulonia.) Dieron al edificio Shoyosha del palacio el sobrenombre de Cámara de Nashitsubo, al Shigeisha el de Cámara de Kiritsubo, al Higiyosha el de Cámara de Fujitsubo, al Gyokasha el de Cámara de Umetsubo, al Shuhosha el de Cámara de Raimeitsubo. (Las damas se llamaban con el nombre de su edificio donde vivían.) Como amaba a la mujer que vivía en la Cámara de Kiritsubo, el entonces emperador se llamó también el emperador de Kiritsubo.	Página 3-i (Kiritsubo) En una época que no sabemos con exactitud cuándo fue, vivía una dama a la que el emperador amaba especialmente entre sus muchas otras mujeres. Estas, en aquel tiempo, eran denominadas según sus rangos (Nyōgo o Kōi) y aquella mujer no pertenecía a los rangos superiores. [Era la época del emperador Daigo y la amada se llamaba Kiritsubo no Kōi.] El palacio del emperador estaba compuesto por numerosos edificios, cuyos nombres servían para denominar a las damas que en ellos vivían: Shōyōsha (también llamado Nashitsubo, «Patio de Pera»), Shigeisha (llamado también Kiritsubo, «Patio de Paulownia»), Higiyōsha (también Fujitsubo, «Patio de Vistaria»), Gyōkasha (también Umetsubo, «Patio de Ciruela») y Shūhōsha (también Raimeitsubo, «Patio de Truenos»). Dado el gran amor que profesaba el emperador a la dama de rango Kōi que vivía en el edificio Kiritsubo (por lo cual era llamada Kiritsubo no Kōi), este era conocido como «el emperador Kiritsubo».
2 帝から寵愛される桐壺更衣は、周囲からの嫉妬が集中し病弱となる 「朝夕の宮仕〜」(0031／五④／一七)	3丁裏 あさゆふの御みやづかへにつけても、心をのみよごかし、うらみををふつもりにや、あつく成ゆき、〔割・をもき／病也〕物心ほそげに、里がちなるを、みかど、いよ／＼あはれにおぼして、人のそしりをも、えはゞからせ給はず (「おぼして」から3丁裏)	そうやって、他の后たちの恨みをたくさん作った結果でしょうか、体が弱くなっていきました。〔重い病気です〕心細い感じがして、実家に帰っていることが多い桐壺の更衣のことを、帝は、これまで以上にたまらなくお思いで、人々が悪口を言っている、愛情をお止めになることができません。	A muchas damas de los rangos de Nyogo y Koi les daba siempre envidia y rabia el hecho de que estaba al lado del emperador todos los días. Las otras damas le guardó un resentimiento. Probablemente por eso resultó que la dama de Kiritsubo se debilitó. (Padeció una enfermedad grave.) A la dama de Kiritsubo, que se sentía sola y volvía frecuentemente a la casa de sus padres, el emperador le echaba de menos más que antes. 〔3丁裏〕 A pesar de las críticas de la gente, no podía parar de amarla.	Las demás damas de la Corte sentían celos de la amada, que siempre permanecía cerca del emperador. Quizá a causa de esos sentimientos ella empezó a sentirse mal y acabó enfermando. La debilidad le hizo pasar más tiempo en su casa materna y el emperador la añoraba. Página 3-ii El emperador no podía controlar sus sentimientos hacia su amada y la gente empezaba a hablar de ello; pero él hacía oídos sordos.
3 中国の楊貴妃まで引き合いに出される桐壺更衣は、帝の愛情に頼る 「唐土にも〜」(0073／五⑧／一七)	「もろこしにもかゝる事のおこりにこそ、世もみだれ、あしかりけれ」と、あぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃のためしもひき出つべう成ぬ。	中国で〈玄宗皇帝〉を夢中にさせた〈楊貴妃〉の話に例えられそうになりました。	Al pensar esto, el pueblo recordaba que la sociedad en China también había sido devastada a causa de este tipo de relaciones amorosas, se sintía vacío y se preocupaba. Por fin, comparó eso a la historia de Yang Guifei, de quien se había enamorado el emperador Xuanzong en China.	El pueblo empezó a preocuparse al recordar la historia del emperador Xuan Zong, en China, perdido completamente por su amor hacia Yang Guifei.

4 桐壺更衣は父大納言の没後に入内し、孤立無援の宮中で心細い生活「父の大納言〜」(0103/五②/一八)	此かうみの父はなくなり、母北方、いにしへのよしあるにて、御かたゞにもとり給はねど、事とある時は、よし所なく、心ぼそげ也。	この〈桐壺の更衣〉の父はずでに死んでいて、母親の〈北の方〉は、由緒のある家柄出身であり、古風な人なので、他のお后たちにも負けないようにしています。しかし、何か大事なことがある時には、頼るところがなく、心細い様子です。	El padre de la dama de Kiritsubo ya estaba muerto. Dama de Norte, su madre era una mujer de una familia ilustre y con mentalidad antigua. Por eso, intentaba rivalizar con las otras damas. Sin embargo, en casos serios, pareció que se sentía poco segura a falta de persona confiable.	El padre de Kiritsubo había muerto, pero su madre pertenecía a una familia noble con valores tradicionales y aseguró a su hija una educación a la altura de las otras damas del emperador. Aun así, sin su marido la madre se sentía insegura a la hora de tomar decisiones importantes.
5 美しい玉の男御子が誕生し、帝は第一皇子よりこの弟宮を寵愛する「前の世にも〜」(0136/六①/一八)	さきの世にも御契りやふかゝりけん、きよなる玉のをのこみこさへ生れ給ぬ。〔割・其を光君と／いふ也〕一のみこは、右大臣の女御の御はらにて、うたがひなきまうけの君と、かしづき聞ゆれど、此君の御にほひには、ならび給ふべくもあらず。	((桐壺の帝)と桐壺の更衣)は)前世でも約束が深かったのでしょうか、美しい玉のような皇子までも生まれました。〔この人を〈光源氏(光る君)〉といひます。〕第一皇子は、〈右大臣の女御〉が生んだ子供なので、間違いない皇太子になるだろうと、世間の人々も大切にしているのですが、この〈光源氏(若君)〉の美しさには、とうてい勝つことができません。	En la vida anterior el emperador de Kiritsubo y la dama de Kiritsubo habrían tenido relaciones profundas. Nació aun un príncipe como una pelota bonita. (Esta persona se llamó Hikaru Genji (príncipe brillante)). Como el primer príncipe era un niño que había dado a luz una hija del ministro de derecho, la gente tenía cuidado con él, convencida de que sería el príncipe heredero. Pero no podía rivalizar con Hikari Genji (príncipe joven) en belleza.	A lo mejor [la relación de «el emperador Kiritsubo» y Kiritsubo no Kōi] fuera una promesa de una vida anterior y quizá prueba de ello tuvieron un hijo bello como una perla. [Se llamó Hikaru Genji, «el príncipe brillante».] El primogénito del emperador, hijo de una dama de rango Nyōgo, hija del ministro de Derecha, gozaba de un gran respeto por parte del pueblo por ser el príncipe heredero. Pero la belleza del pequeño Hikaru Genji era incomparable a la de su hermano mayor y desde su nacimiento,
6 帝は桐壺更衣を厚遇し、弘徽殿女御は我が皇子の立場に疑いを抱く「はじめより〜」(0184/六⑦/一九)	4丁表 此みこ生れ給て後は、みかど御心ことにきてたれば、坊にもみ給ふべきなめりと、一のみこの女御は、おぼしうたがへり。(「御心」から4丁表)	〈光源氏(若君)〉が生まれてからというもの、帝はこの〈光源氏〉をととても大切にしていられちゃいましたので、〈光源氏〉が、皇太子になるのではないかと、第一皇子の母である后は、心の中で心配しています。	El emperador [4丁表] cuidaba mucho a Hikari Genji desde su nacimiento. Por lo tanto, la madre del primer príncipe, la emperatriz temía dentro de sí mismo que Hikaru Genji fuera el príncipe heredero.	el emperador... Página 4-i ...lo adoraba de tal modo que la madre del primogénito empezó a temer que este fuera nombrado sucesor en lugar de su hijo.
7 「人よりに先に〜」(0248/六⑬/一九)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ

<p>8 更衣の局は東北隅の淑景舎で、参上の折毎に酷い嫌がらせを受ける「御局は桐壺〜」(0288／七③／二〇)</p>	<p>あまたの御かた／＼を過させ給ひ、ひまなき御前わたりに、人の心をつくし給ふも、ことほり也。あまりうちきりまうのぼり給ふおり／＼は、うちはしわた殿、こゝかしこの道にあやしきわざをして、御をくりむかへの人のきぬのすそ、たへがたう、まさなき事ともあり、又ある時は、えさらぬめだうの戸をさしこめ、こなたかなた心をあはせ、はしたなめわづらはせ給ふ時もおほかり。</p>	<p>帝が、たくさんの后たちの部屋の前を素通りして、何度もお通いになることに、他の后たちが嫉妬しているのも、もっともなことです。あまりに〈桐壺の更衣〉が帝に呼び寄せられる回数が多くなっていきます。すると、打橋や渡殿といった宮殿の廊下など、〈桐壺の更衣〉が通る、あちらこちらの道にいたずらがされていました。それは、見送りや出迎の侍女の着物の裾が、まったく我慢できなくなるような、とんでもないことなどです。またある時は、〈桐壺の更衣〉が、絶対通らなければならぬ中廊下の扉を閉めて、こちらとあちらで協力し、〈桐壺の更衣〉を閉じ込めて、ひどい目にあわせたり困らせたりすることも多いのです。</p>	<p>El emperador pasaba delante de las cámaras de muchas damas y frecuentaba a la dama de Kiritsubo muchas veces. Por lo tanto, era normal que las otras damas tuvieran celos de ella. El emperador llamaba a ella con demasiado frecuencia. Y hicieron travesuras de un lado para otro en el camino, como en los puentes y pasillos del palacio, donde pasaba la dama de Kiritsubo. Las damas de honor que la acompañaban durante su ida y vuelta no podían completamente aguantar la suciedad del bajo del kimono. Era una absurdidad. Otra vez, cerraron las puertas del pasillo entre las cámaras, por las cuales la dama de Kiritsubo tenía que pasar. Un lado y el otro del pasillo cooperaron para encerrar a la dama de Kiritsubo. La maltrataban y molestaban muchas veces.</p>	<p>El emperador visitaba con frecuencia a Kiritsubo, para lo cual había de pasar por delante de las habitaciones de las otras damas, quienes naturalmente sentían envidia y celos. También se hizo más y más frecuente que el emperador ordenara a su amada acudir a sus aposentos. Entonces planeaban venganzas para que Kiritsubo y sus sirvientas se mancharan los vestidos horriblemente. En otras ocasiones, la desdichada encontraba cerradas las puertas de los corredores por donde tenía que pasar y quedaba encerrada.</p>
<p>9 帝は桐壺更衣への虐待を不憫に思い、局を淑景舎から後涼殿に移す「ことにふれ〜」(0344／七⑨／二〇)</p>	<p>4 丁裏 みかどいとゞあはれと御らんじて、後涼殿にもとよりさぶらひ給ふ。かうみ を、ほかにうつし、此かうみのうへつ ぼねに給はる。そのうらみ、ましてや らんかたなし。 (「そのうらみ」から4丁裏)</p>	<p>帝はますます〈桐壺の更衣〉をかわいそうに思って、後涼殿という所に前から部屋をもらっていた身分が低い后を、他の場所へ移し、〈桐壺の更衣〉のもう一つの部屋としました。部屋を他に移された後の恨みは、とうてい晴れることがありません。</p>	<p>El emperador compadeció a la dama de Kiritsubo aún más y hizo trasladar a una dama de humilde condición a otro lugar para darle otra cámara a la dama de Kiritsubo. [4丁裏] Era totalmente imposible que la dama, cuya cámara había sido trasladada a otro sitio, olvidara sus rencores.</p>	<p>El emperador se enteró de estos problemas y quiso proteger a su amada. Para ello desalojó a una dama de bajo rango que ocupaba el edificio Kōryōden, donde vivía el emperador, para asignarle la habitación a Kiritsubo. Página 4-ii La ira de aquella mujer que tuvo que cambiar de habitación nunca se calmó.</p>
<p>10 若宮は三歳で袴着の儀式をし、成長と共に憎しみが賞賛へと変わる「この御子三つ〜」(0378／七⑩／二一)</p>	<p>みこ、みつに成給ふとし、御はかまぎの事、一の宮のにもとらず。御かたち心ばへ、ありがたくめづらしきまで見え給へば、此君をば人々もえそねみあへず。</p>	<p>〈光源氏(若君)〉は、三歳になった年、袴着の儀式をしました。その様子は、第一皇子がこの儀式をしたときにも負けないほどです。見た目や性格が、めったにないほど素晴らしいので、〈光源氏(若君)〉を他の后たちも憎むことができません。</p>	<p>En el año donde Hikaru Genji (joven príncipe) cumplió tres años, celebraron la ceremonia de poner el primer pantalón. El ambiente de la ceremonia es tan espectacular como la del primer príncipe. Como su apariencia y carácter eran excepcionalmente excelentes, las otras damas no podían odiar Hikaru Genji (joven príncipe).</p>	<p>Cuando el joven príncipe cumplió tres años, se celebró la ceremonia del hakama. La celebración fue tan maravillosa como la de su hermano mayor. Hikaru Genji era tan bello y dulce que incluso las otras mujeres del emperador lo adoraban.</p>
<p>11 若宮が三歳の夏に桐壺更衣は重病になり、御子を宮中に残して退出「その年の夏〜」(0439／八②／二一)</p>	<p>其年の夏、御母御休所〔割・更衣の事也〕、わづらひて里へまかでんとし給へど、つねのあつしさに、御めなれて、いとまささらにゆるさせ給はず。日々をもり給て、いとよはうなれば、更衣の母、なく／＼そうして、みこをほとゞめさせ、みやす所ばかりまかで給ふ。</p>	<p>その年の夏、母の御息所〔〈桐壺の更衣〉のことです。〕は、病気になって実家へ帰ろうとしますが、〈桐壺の更衣〉がいつも体が弱いことに、帝は慣れてしまい、帰ることを絶対に許しませんでした。日に日に病気が重くなってきて、ひどく衰弱したので、〈桐壺の更衣〉の母は、泣きながらお願いをして、〈光源氏(若君)〉を宮中に残したまま、〈桐壺の更衣(御息所)〉だけ帰ることになりました。</p>	<p>En el verano de ese año, su madre Miyasudokoro (se trata de la dama de Kiritsubo) cayó enferma y intentó volver a casa de sus padres. Pero el emperador, acostumbrado a que la dama de Kiritsubo fuera siempre enfermiza, no le autorizó absolutamente a regresar. Su enfermedad se agravó y la dama se debilitó demasiado. Por eso, llorando, la madre de la dama de Kiritsubo pidió que la dama de Kiritsubo volviera sola, dejando Hikarugenji (joven príncipe) en la corte.</p>	<p>Aquel verano, la madre de Hikaru Genji [Kiritsubo] cayó enferma y quiso regresar a casa de su madre, pero el emperador, acostumbrado ya a su débil estado de salud, no le dio permiso para marchar. Su enfermedad se agravaba día tras día y Kiritsubo rogó llorando al emperador que le dejara volver con su madre. Finalmente este decidió dejarla partir, pero dejando al pequeño Hikaru en palacio.</p>

<p>12 帝は絶え入らばかりの桐壺更衣を御覧になる暮れる「限りあれば〜」(0488 / 八⑦ / 二二)</p>	<p>5丁表 うつくしき人の、おもやせあるかなきかにきえものし給ふを御覧じて、きしかたゆくすゑ、よろづの事を契りの給へと、御いらへもきこえず。まゆもたゆげにて、われかの気しき也。かぎりあらんみちにも、をくれさきだゝじとちぎらせ給けるを、打すてゝはえゆきやらじと、の給はするを、 (「にて」から5丁表)</p>	<p>帝は、かわいらしい〈桐壺の更衣〉が、やつれて意識がはっきりしない様子を御覧になって、今までのことや将来のこと、いろいろなことを約束したりするけれども、〈桐壺の更衣〉は、返事をするすることもできません。つらそうな顔をして、意識を失った状態です。帝が「死への旅にも、共に行こうと約束しましたのに、私を残してはいけませんよ」と、おっしゃるのを、</p>	<p>El emperador vio su preciosa dama de Kiritsubo demacrada y semi-consciente, habló del pasado y del futuro, y le prometió varias cosas. Pero la dama de Kiritsubo no pudo ni siquiera responder. Con una expresión dolorosa, [5丁表] estaba inconsciente. - Te he prometido a viajar contigo cuando muramos. No puedes dejarme. Le dijo el emperador.</p>	<p>En esos días Kiritsubo se encontraba ya extremadamente débil e inconsciente; ante las palabras del emperador, que intentaba animarla hablándole del pasado y haciéndole promesas de futuro, permanecía sin responder. Su rostro mostraba su sufrimiento y... Página 5-i ... no le quedaba ya mucho tiempo de vida. El emperador se lamentó: «Nos prometimos el uno al otro que emprenderíamos juntos el viaje último. No puedes dejarme solo.»</p>
<p>13 輦車の宣旨を受けた桐壺更衣は、帝に歌を残して里邸へと退出する「輦車の宣旨〜」(0537 / 八④ / 二二)</p>	<p>女も、いみじと見奉りて、かぎりとして わかるゝみちのかなしきに いかまほしきはいのちなりけり てくるまのせんじなどの給はせて、まかで給ふ。 ※「てくるまのせんじ」は本文(池田本)では、更衣の歌より前におかれている。</p>	<p>〈桐壺の更衣(女)〉も、とても嬉しく思い、次のように和歌を詠みました。 かぎりとしてわかるゝみちのかなしきにいかまほしきはいのちなりけり 帝は、〈桐壺の更衣〉に輦車に乗ることを許し、〈桐壺の更衣〉は実家に帰りました。</p>	<p>La dama de Kiritsubo (mujer) estuvo muy contenta. (和歌) El emperador permitió a la dama de Kiritsubo a tomar un palanquín y ella volvió a casa de sus padres.</p>	<p>Sus palabras llegaron al corazón de Kiritsubo , quien le contestó con un poema: Es triste que el camino parta hacia la muerte, cuando todo cuanto quiero es tomar el camino de la vida. El emperador permitió que Kiritsubo montara al carruaje, que la llevó a casa con su madre.</p>
<p>14 心塞がる帝は眠れぬ夏の短夜に、桐壺更衣の死を聞き悲嘆に暮れる「御胸つと〜」(0608 / 九⑦ / 二三)</p>	<p>みかど、御むねふたがり、御使の行かふ程もなきに、夜なかくぐる程に、たえはて給ふ、きこしめす。御心まどひ、何事もおぼしわかれず。</p>	<p>帝は、胸がつまるほどに悲しんでいます。帝のお見舞いの使者が行って帰って来るほどの時間もたっていないほどに、「夜中を過ぎるころに、〈桐壺の更衣〉が息を引き取りになりました」と、お聞きになります。帝は、気も動転して、もう何の分別もつきません。</p>	<p>El emperador se afligió. Apenas el mensajero imperial fue a verla y volvió, le dijo, - Pasada la medianoche la dama de Kiritsubo exhaló su último suspiro. El emperador perdió la calma, fuera de juicio.</p>	<p>El emperador se sumió en una profunda tristeza. Envió a un mensajero, pero antes de que volviera, la noticia ya había llegado a oídos del emperador: la enferma había expirado a medianoche.</p>
<p>15 三歳の若宮は母君の死により、服喪のため宮中から里邸へ退出する「御子は〜」(0644 / 九⑩ / 二四)</p>	<p>5丁裏 みこをばかくても御らんぜまほしけれど、れいなき事なれば、まかでさせ給ふ。みこも何事ともおぼさず。人々のなきまどひ、うへも御涙のひまなくなかれおはしますを、あやしと見奉給ふ。(「ひまなく」から5丁裏)</p>	<p>帝は、〈光源氏(若君)〉をこんな時でも御覧になりたいたいと思うけれど、喪中の人が宮殿にいることは前例がないので、〈光源氏〉を母君の実家に帰らせました。〈光源氏(若君)〉も何が起きたのかもわかりません。〈光源氏〉は、周りの侍女たちが泣きわめき、帝も涙がとまらなくなっていっしやるのを、何だか変だと見ています。</p>	<p>Aun en este momento quería ver Hikari Genji (joven príncipe). Sin embargo, no había ningún precedente en el cual la gente de luto hubiera estado presente en el palacio y dejaron a Hikaru Genji volver a casa de sus abuelos maternos. Hikaru Genji no entendió tampoco lo que había pasado. [5丁裏] Le pareció extraño que las damas de honor entorno a él lloraran y gritaran, y el emperador también no contuviera las lágrimas.</p>	<p>El golpe fue tan duro que el emperador ya no podía pensar en nada; aun así, quiso ver a su hijo Hikaru Genji, pero no era costumbre que las personas en periodo de luto permanecieran en el palacio imperial y el príncipe debía marchar a casa de su abuela. Él contemplaba, sin entender lo que ocurría, el llanto y las lamentaciones incesantes de los sirvientes y del mismo emperador... Página 5-ii ...e intuyó que algo extraño había sucedido.</p>

16 桐壺更衣の葬送は鳥辺野で行われ、母は娘と一緒に泣き焦がれる「限りあれば〜」(0684 /一〇② /二四)	かぎりあれば、をたぎといふ所にて、けぶりになし奉る。母君も、おなじ煙にと、なきこがれ、御をくりの女ぼうの車に、したひのりて出給ふ。	きまり通り、愛宕という所で、葬儀を行いました。母君も、〈桐壺の更衣〉と一緒に、火葬の煙となって消えてしまいたいと、泣いて、見送りの侍女の車に、追いつくようにして乗ってでかけました。	Conforme al costumbre, celebraron los funerales en el lugar llamado Atago. La abuela dijo llorando que quería ser humo de crematorio y desaparecer con la dama de Kiritsubo, siguió el palanquín de la dama de honor que la acompaña y partió.	La incineración se celebró acorde a la tradición en un lugar llamado Otagi. La madre lloraba y se lamentaba, repitiendo que su deseo hubiera sido desaparecer como el humo de la cremación junto a su hija. Había tardado en montar al carruaje con las doncellas para ir al funeral.
17 「むなしき〜」(0712 /一〇⑤ /二四)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
18 桐壺更衣に三位追贈の宣命がくだり、女御更衣たちは憎しみを増す「内裏より御使〜」(0741 /一〇⑧ /二五)	内より御使ありて、三位のくらみをくり給ふ。	帝から使者があつて、亡くなった〈桐壺の更衣〉に三位の位をお贈りになりました。	El emperador mandó un mensajero para conferir a la fallecida dama de Kiritsubo el tercer grado.	Un mensajero del emperador anunció que a la difunta se le otorgaba el rango de Sanmi, el tercer rango más alto de la Corte.
19 聡「もの思ひ知〜」(0775 /一〇⑩ /二五)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
20 「はかなく〜」(0809 /一一① /二六)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
21 帝は若宮を恋しがり、野分だつ夕暮に靱負命婦を更衣の里に遣はす「一の宮を〜」(0850 /一一⑤ /二六)	みかどは、一の宮を見給ふにも、わか宮の御恋しさのみおぼし出つゝ、女ぼう、めのとなどをつかはし、ありさまきこしめす。野分たちはた寒き夕ぐれ、ゆげいの命婦をつかはさる。	帝は、第一皇子を御覧になつても、〈光源氏(若君)〉を恋しく思い出してばかりいて、侍女や乳母などをつかつて、〈光源氏〉の様子をお聞きになります。風が強くて肌寒い夕暮れに、〈靱負の命婦〉という女官を〈桐壺の更衣〉の母の所へ行かせました。	Aun al ver el primer príncipe, le echaba menos de Hikaru Genji (joven príncipe) y preguntaba a las damas de honor y nodrizas cómo iba Hikaru Genji. Al atardecer, con mucho viento y un poco de frío, mandó a una dama de honor llamada Yugei no Myobu a casa de la madre de la dama de Kiritsubo.	El emperador añoraba mucho a su hijo Hikaru Genji, aun estando en compañía de su primogénito, y siempre pedía a las sirvientas y la niñera que le trajeran noticias sobre él. Una tarde-noche fría y ventosa, el soberano envió a la dama de honor llamada Yugei no Myōbu a casa de la anciana con una carta e la anciana con una carta que contenía el siguiente poema:

22 「夕月夜の～」(0877 /一〇⑨ /二六) ~ 25 「『しばしは～」(0987 /一〇⑦ /二八)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
26 帝からの文は、若宮と共に参内するようにと懇ろに促すものだった 「目も見え～」(1043 /一〇⑬ /二八)	勅書の歌 みやぎ野の露ふきむすぶ風のをとに小萩がもとをおもひこそやれ	帝からの手紙に書いてあった和歌です。 みやぎ野の露ふきむすぶ風のをとに小萩がもとをおもひこそやれ	Esta es un poema escrito en la carta del emperador. (和歌)	Se forma el rocío al son del viento de Miyagino Y mi corazón recuerda la pequeña flor de lespedeza
27 「命長の～」(1094 /一三⑥ /二九) ~ 30 「上もしか～」(1256 /一四⑪ /三一)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
31 月が沈む頃、命婦の歌を受け祖母君は惜別の情を車中の命婦に伝える 「月は入り方～」(1315 /一五④ /三二)	6丁表 命婦、かうあゝの母にあひて、 すゞむしのこゑのかぎりをつくしてもながき夜あかずふるなみだかな くうは君 いとゞしく虫のねしげきあさぢふに露をきそふる雲のうへ人 (「すゞむし」から6丁表)	〈鞍負の命婦〉が、〈桐壺の更衣〉の母に会って詠んだ和歌です。 すゞむしのこゑのかぎりをつくしてもながき夜あかずふるなみだかな くうは君 いとゞしく虫のねしげきあさぢふに露をきそふる雲のうへ人	Era el poema que Yugei no Myobu leyó cuando vio a la madre de la dama de Kiritsubo. [6丁表] (和歌) Al poema que Yugei no Myobu había compuesto respondió la madre de la dama de Kiritsubo (abuela) con el siguiente. (和歌)	Myōbu compuso y leyó a la madre de Kiritsubo: Página 6-i Los grillos lloran durante toda la larga noche; mis lágrimas, como las suyas, nunca cesan. [A su vez, la abuela contestó con el siguiente poema:] La madre de Kiritsubo, abuela de Hikaru, respondió: Aquí crecen las hierbas de carrizo y cantan los grillos, Y la persona que viene de más allá de las nubes añade el rocío.

<p>32 鞍負命 婦の帰参に際して、祖母君は桐壺更衣の形見の装束等を贈る 「をかしき御贈〜」(1358 /一五⑩ /三二)</p>	<p>をくり物あるべきおりにもあらねばとて、かうみの残しをき給へる御さうぞく御くしあげのてうど、そへ給ふ。</p>	<p>良い贈り物をする場合ではありませんので、〈桐壺の更衣〉が残した着物や装飾品を、手紙にそえてあげました。</p>	<p>Como no estaba en situación de hacerle unos buenos regalos, la abuela le dio los vestidos y accesorios que la dama de Kiritsubo había dejado y les acompañó una carta.</p>	<p>No habiendo nada mejor, la anciana ofreció a Myōbu los vestidos y las joyas de Kiritsubo para que los llevara al emperador junto con su carta.</p>
<p>33 「若 き人々〜」 (1378 /一五 ⑫ /三二)</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>34 桐壺帝 は女房と語り 明かし長恨歌 の絵を見なが ら命婦の帰参 を待つ 「命婦は〜」 (1420 /一六 ③ /三三)</p>	<p>みかどはふけてもおほとのごもらず、せんざいの花御覧するやうにて、女ばう四五人さぶらはせて、御物語せさせ給へり。</p>	<p>帝は夜更けになってもおやすみならず、庭先に植えである花を眺めながら、侍女を四、五人そばに控えさせて、お話をしていらっしゃいました。</p>	<p>El emperador no se acostaba a altas horas de la noche. Contemplando los flores del jardín, hablaba con 4 o 5 damas de honor que lo habían esperado a su lado.</p>	<p>Aunque la noche ya era profunda, el emperador permanecía despierto, hablando con unas doncellas y contemplando las flores del jardín.</p>
<p>35 帝は里 邸の様を命婦 から聞き、と り乱した祖母 君の返書に心 を遣う 「いと細やか 〜」(1469 /一六⑧ / 三三)</p>	<p>御返し奉るうば君の歌。 あらし風ふせぎしかげのかれしよりこはぎがうへぞしづごゝろなき</p>	<p>帝の手紙に対して詠んだ、〈桐壺の更衣〉の母の歌です。 あらし風ふせぎしかげのかれしよりこはぎがうへぞしづごゝろなき</p>	<p>Este es un poema compuso por la madre de la dama de Kiritsubo en respuesta a la carta del emperador. (和歌)</p>	<p>Sigue el poema que compuso la madre de Kiritsubo como respuesta a los versos que habían escritos en la carta del emperador: La sombra que protegía a la pequeña lespedeza contra los vientos se marchitó qué inquietante resulta pensar en la pequeña flor.</p>
<p>36 「いと かうしも〜」 (1504 /一六 ⑫ /三四)</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>

<p>37 帝は若宮の将来を約束し、贈物から長恨歌の釵に思いを重ねて歌う 「かくても〜」 (1543 / 一七③ / 三四)</p>	<p>6 丁裏 うば君の物語わか君の事などそうして、をくりもの御らんぜさすれば、 〈御〉 たづねゆくまぼろしもがなつてにても玉のありかをそことしるべく (「うば君」から6 丁裏)</p>	<p>〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)の話や〈光源氏(若君)〉のことなどを話して、贈り物を見せると、帝は次のように和歌を詠みました。 〈帝〉 たづねゆくまぼろしもがなつてにても玉のありかをそことしるべく</p>	<p>[6 丁裏] Habló al emperador sobre la madre de la dama de Kiritsubo (abuela) y Hikaru Genji (joven príncipe), y le mostró los regalos. Entonces, el emperador leyó el poema siguiente. (和歌)</p>	<p>Página 6-ii Yugehi no Myōbu mostró al emperador las ofrendas y le contó las noticias de la madre de la difunta y de su hijo. Tras escuchar, el soberano compuso el siguiente poema: Iría en busca de un monje taoísta que supiera decirme dónde se encuentra ahora su alma.</p>
<p>38 「絵に描ける〜」 (1572 / 一七⑦ / 三五)</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>39 帝の心を踏みにじるように、弘徽殿女御は傍若無人な遊び事に耽る 「風の音〜」 (1615 / 一七⑩ / 三五)</p>	<p>一の宮の御母、弘徽殿は、久しくうへの御つばねに参り給はず、月のおもしろきにあそび〔傍・あ=管絃〕をぞし給ふ。人々かたはらいたしと、きゝけり。</p>	<p>第一皇子の母、〈弘徽殿の女御〉は、長い間帝の側に呼ばれず、月の美しい夜に合奏をして遊んでいます。殿上人や侍女たちは、「具合の悪いことだ」と、その合奏の音を聞いています。</p>	<p>La madre del primer príncipe, la dama de Kokiden, que el emperador no había invitado a su lado un buen rato, pasaba lo bien tocando la música en la noche con una luna hermosa. Los dignatarios y damas de honor escuchaban la música, diciendo que no iba bien.</p>	<p>Kokiden no Nyōgo, la madre del primogénito, durante las noches de luna bella, como el emperador no la llamaba ya desde hace mucho tiempo, organizaba veladas de música. Los nobles y las sirvientas se sentían incómodos al escuchar la música y los sonidos de la fiesta.</p>
<p>40 更衣の里邸に思いを馳せて悲しみ歌う帝は、眠ることすらできない 「月も入りぬ〜」(1660 / 一八③ / 三六)</p>	<p>みかど、うば君のもとをおぼして、雲のうへもなみだにくるゝ秋の月いかですむらんあさぢふのやど</p>	<p>帝は、〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)の生活を心配して、次のように和歌を詠みました。 雲のうへもなみだにくるゝ秋の月いかですむらんあさぢふのやど</p>	<p>Preocupado por la vida de la madre de la dama de Kiritsubo (abuela), el emperador compuso el poema siguiente. (和歌)</p>	<p>Mientras, el emperador se preocupaba por la madre de Kiritsubo: Más allá de las nubes, las lágrimas hacen desaparecer la luna otoñal; desde la casa cubierta de hierbas de carrizo tampoco se verá.</p>
<p>41 「朝に起き〜」(1693 / 一八⑦ / 三六)</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>42 「さるべき契〜」 (1731 / 一八⑫ / 三七)</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>

<p>43 若宮参 内で不吉な予感、弘徽殿女御は息子が四歳の春に立坊し安堵 「月日経て〜」(1762 / 一九② / 三七)</p>	<p>7丁表 月日へて、わか君参り給ぬ。きよらにおよづけ給へば、いとゆゝしうおぼしたり。あくる年の春、一の宮春宮にさだまり給ふにも、此君をひきこさまほしうおぼせど、世のうけひくまじき事を、はゞかり給て、色にもいひさせ給はず。 (「さだまり」から7丁表)</p>	<p>月日が過ぎて、〈光源氏(若君)〉が宮殿にやってきました。美しく成長したので、神につれていかれたりしないかと大変不安に思われました。翌年の春、第一皇子が皇太子に決まったときも、帝は、〈光源氏〉に第一皇子を越えさせたいと思いましたが、世間が納得しないことだと、遠慮して、表情にも出しません。</p>	<p>El tiempo pasó. Hikaru Genji (joven príncipe) vino al palacio. Como se puso hermoso, tenían miedo de que el dios se lo llevara. En la primavera del año próximo, nombraron al primer príncipe el heredero del trono, [7丁表] el emperador quería que Hikaru Genji superara el primer príncipe. Pero, convencido de que el pueblo no lo entendería, no cambió de expresión con reparos.</p>	<p>El tiempo pasó, y Hikaru Genji terminó su periodo de luto y pudo volver a palacio. Había crecido y era un niño tan bello que la gente temía que pudiera atraer a las deidades y ser secuestrado. La primavera siguiente, se designó heredero al príncipe primogénito... Página 7-i El deseo del emperador, en realidad, era que el príncipe Hikaru ocupara el lugar del hermano mayor, pero sabiendo que la sociedad no iba a permitirlo, guardó silencio.</p>
<p>44 祖母君 は期待も虚しく潰え若宮六歳の年に無念さを残したまま死去 「かの御祖母〜」(1805 / 一九⑥ / 三七)</p>	<p>彼うば君、なぐさむかたなきゆへにや、うせ給ぬれば、又これを、かなしびおぼす。</p>	<p>あの〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)は、心を慰めることもなかったからでしょうか、亡くなってしまったので、またしても帝は、悲しいことだと思ひになります。</p>	<p>La madre de la dama de Kiritsubo (abuela) murió probablemente porque no se había consolado. El emperador se sintió triste una vez más.</p>	<p>La madre de Kiritsubo falleció, probablemente porque no le quedaba nada que iluminara su vida. Su muerte entristeció mucho al emperador.</p>
<p>45 若宮七歳の読書始めの後、その聡明さと美貌に弘徽殿女御も感服 「今は内裏に〜」(1844 / 一九⑩ / 三八)</p>	<p>若君七つに成給へば、文はじめさせ給て、</p>	<p>《光源氏(若君)》は《七歳》になりましたので、読書始めの儀式をして、</p>	<p>Cuando Hikaru Genji cumplió 7 años, hicieron la ceremonia de la primera lectura.</p>	<p>Cuando Hikaru Genji cumplió los siete años, protagonizó la ceremonia del Inicio de la Lectura.</p>
<p>46 若宮は二人の皇女方より優雅で学問や音曲にも秀でる超人さを発揮 「女御子たち〜」(1904 / 二〇② / 三九)</p>	<p>御かくもんはさる物にて、琴笛のねにも、雲井をひゞかし給へり。</p>	<p>勉強はいうまでもなく、琴や笛といった楽器もよくできて、宮殿の人々を驚かせました。</p>	<p>No sólo hacía bien los estudios sino también jugaba bien los instrumentos musicales como arpa japonesa y flauta, lo que sorprendió a la gente de la Corte.</p>	<p>Sorprendió a toda la Corte demostrando no solo su brillante inteligencia sino también su talento musical, especialmente con el koto y la flauta.</p>

47 高麗の相人は鴻臚館で右大弁の子として来た若宮を覩て不思議がる「そのころ〜」(1955 / 二〇⑥ / 三九)	其比こまうどのさうにん奉りて、	そのころ《高麗人の相人》がやってきて、	Entonces un fisonomista coreano vino al palacio.	En aquella época, un vidente de Corea llegó a palacio
48 「弁も、いと〜」(2019 / 二〇⑬ / 四〇)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
49 「帝、かしこき〜」(2075 / 二一⑤ / 四〇)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
50 帝は宿曜道の判断も参考に、若宮を皇位継承権のない源氏にと決断「際ことに〜」(2120 / 二一⑩ / 四一)	此君のざえかしてく、かたちのきよなるにめで奉りて、ひかる君とつけ奉り、をくり物どもさゝげけり。此君をたゞ人にはあたらしけれど、源氏になしたてまつるべくおぼしをきてたり。	この《光源氏(若君)》の学問の才能がすぐれていて、《容姿も美しい》のをほめたたえて、「光る君」と名付け、贈り物などを差し上げました。帝は、この〈光源氏(光る君)〉を皇族から外すのは惜しいけれど、源氏の名字をつけて、臣下にするように決めました。	Elogió el hecho de que Hikaru Genji fuera talentoso en los estudios y de buena presencia, le nombró el príncipe brillante y le dio regalos. Para el emperador era lamentable que eliminara a Hikaru Genji de la familia imperial. Sin embargo, se determinó a darle un apellido de Genji para que fuera súbdito.	y quedó impresionado ante tal inteligencia y belleza. Lo llenó de regalos y lo apodó «el príncipe brillante». No obstante y muy a su pesar, el emperador decidió descender de rango a Hikaru y le dio el apellido de Genji.
ナシ	7丁裏 絵	〈絵2〉光源氏七歳のときに、迎賓館で、光源氏が高麗の相人に占いをしてもらっているところ(7丁裏)	[7丁裏] Dibujo 2 A sus siete años en el palacio de huéspedes de honor Hikaru Genji se hizo adivinar su futuro por el fisonomista coreano	Página 7-ii (Imagen 2) El vidente de Corea en la estancia de invitados de palacio examinando a Hikaru cuando este tenía siete años
51 更衣が忘れられず世を疎ましく思ふ帝に、先帝の四の宮の噂が届く「年月にそへ〜」(2147 / 二一⑬ / 四一)	8丁表 年月にそへて、御休所の御事わすれさせ給はず、御心なぐさむかたなし。先帝の四の君、御かたちすぐれ給へる事を、ないしのすけ、そうして奉らせ給へり。〔割・其を藤つぼと申也〕(「年月」から8丁表)	年月が過ぎても、帝は、〈桐壺の更衣(御息所)〉のことを忘れることがなく、心をなぐさめることもできません。前の天皇の四番目のお姫さまで、見た目がとても美しいということを、〈典侍〉という女官が、主人である帝に伝えました。〔その人を、〈藤壺〉といいます。〕	[8丁表] Pasaron muchos años. El emperador no olvidaba la dama de Kiritsubo (Miyasudokoro, Lugar de reposo) y no podía consolarse. Una dama de honor, llamada Naishinosuke, informó a su señor, o sea al emperador, que la cuarta princesa del emperador anterior era tan hermosa en apariencia. (Se llamaba Fujitsubo, dama de Glicina).	Página 8-i Pasaron los años, pero el emperador no podía olvidar a su amada y seguía desconsolado. Un día una dama de alto rango, Naishinokami, le habló de la cuarta hija de un emperador ya fallecido [llamada Fujitsubo].

52 典侍は 先帝の四の宮 を亡き更衣に 生き写しだと 奏上し帝の氣 を引く 「母后世にな く～」(2173 ／二二②/ 四一)	昔の御休所によく似給て、	昔の〈桐壺の更衣(御息所)〉によく似ていて、	Como se parecía mucho a la dama de Kiritsubo de antes	La princesa, además de ser de clase muy alta, se parecía mucho a Kiritsubo
53 「母后、 「あな～」 (2233／二二 ⑧／四二)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
54 「さぶ らふ人々～」 (2264／二二 ⑫／四二)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
55 藤壺は 皇女の身ゆえ に誰に気兼ね もなく、帝の 寵愛もしだい に移る 「これは人の ～」(2295 ／二三②/ 四三)	人のきはもまさり給へば、をのづから御心うつりにけり。	身分も高いので、帝は、〈藤壺〉に自然とお気持ちに移っていきました。	y era de buena posición social, naturalmente atrajo al Emperador.	y, poco a poco, el emperador se enamoró de ella.
56 源氏の 君は常に父帝 の傍にいて、 若く美しい藤 壺の姿を透き 見する 「源氏の君は ～」(2327 ／二三⑤/ 四三)	源氏の君は、みかどの御あたりさり給はねば、藤つぼにもしげくわたり給ふ。	〈光源氏〉は、帝の近くから離れないので、〈藤壺〉のところにも《帝》と一緒によくついでいきます。	Hikaru Genji quedaba cerca del emperador y no se separaba de él. Por eso, visitaba Fujitsubo frecuentemente junto con el emperador.	Hikaru Genji, que siempre estaba en compañía de su padre, también pasaba naturalmente mucho tiempo con Fujitsubo.
57 「母御 息所も～」 (2370／二三 ⑨／四三)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ

58 「上も、限りなき〜」 (2396 / 二三 ⑪ / 四四)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
59 弘徽殿と藤壺が険悪な中、世の人は光る君とかかやく日の宮と賞讃 「こよなう〜」 (2433 / 二四 ① / 四四)	光君に立ならび、御おぼえもとり／＼なれば、かやく日の宮ときこゆ。	〈光源氏〉と〈藤壺〉は、《帝》にそれぞれにとても愛されているので、〈藤壺〉のことを、〈光源氏〉の「光る君」に対して「輝く日の宮」とも呼びました。	Dado que el emperador adoraba a Hikaru Genji y a Fujitsubo, Fujitsubo se llamaba la princesa del sol brillante, en contraste con Hikaru Genji, príncipe brillante.	El emperador amaba a ambos por igual. Respectivamente se los conocía como «el príncipe brillante» y «la dama del sol radiante».
60 光源氏は十二歳で東宮に劣らぬ元服の儀式を帝の主導で執り行う 「この君の〜」 (2483 / 二四 ⑤ / 四四)	源氏の君、十二にてげんぶくし給ひ、	《光源氏》は、《十二歳》で《元服》と呼ばれる成人式をして、	A sus doce años, celebraron su mayoría de edad con la ceremonia llamada Genpuku y decidieron que se casaba con una	El príncipe Hikaru cumplió los 12 años y tuvo su ceremonia de Iniciación.
61 「おはします〜」 (2537 / 二四 ⑩ / 四五)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
62 「かうぶり〜」 (2580 / 二五① / 四五)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
63 左大臣は娘を春宮でそひぶしにとさだめ給ふ。〔割・其あふはなく光源氏の元服の添い臥しに心積もりする 「引き入れの〜」 (2623 / 二五⑥ / 四六)	ひきいれの大臣の、みこばらの姫君を、そひぶしにとさだめ給ふ。〔割・其あふひの上也〕	《左大臣(引き入れの大臣)》の娘で、皇女の母親をもつお姫さまを、妻にすることが決定しました。〔その妻が〈葵の上〉です。〕	hija del ministro de la Izquierda (ministro encargado de la coronación), cuya madre es una princesa de la familia imperial. (La mujer se llamaba Aoi no Ue.)	Conviniere casarlo con la hija del ministro de Izquierda. [Aoi no Ue]
64 「さぶらひに〜」 (2658 / 二五 ⑨ / 四六)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ

ナシ	8丁裏 絵	〈絵3〉光源氏十二歳のときに、宮殿で光源氏が元服の儀式をした場面（8丁裏）	〔8丁裏〕 Dibujo 3 Escena donde Hikaru Genji hizo la ceremonia de Genpuku en el palacio a sus doce años	Página 8-ii (Imagen 3) La ceremonia de Iniciación de Genji, cumplidos sus 12 años.
65 左大臣 は帝から二人の結婚を催促されると返歌で応諾して拝舞する 「御盃のついで〜」(2703 /二五④ /四七)	9丁表 〈御〉 いときなき はつもとゆひにながきよを ちぎるこゝろはむすびこめつや むすびつる心もふかきもとゆひに こきむらさきのいろしあせずは 〈左大臣〉は返事として次のように歌を詠みました。	〈帝〉 いときなきはつもとゆひにながきよを ちぎるこゝろはむすびこめつや むすびつる心もふかきもとゆひに こきむらさきのいろしあせずは	〔9丁表〕 (Emperador) (Ministro de la Izquierda) (和歌)	Página 9-i En la ceremonia de matrimonio, el emperador recitó un poema: Recogiendo el cabello infantil con una cuerda, ¿enlazas también la promesa de una larga vida unidos? El ministro, padre de la novia, respondió: He atado el nudo tan fuerte como profunda es la promesa, Y así perdurará si no palidece el color púrpura profundo de la cuerda.
66 左大臣 や親王たちは禄を賜い、この日の元服の儀式は春宮より盛大 「左馬寮の〜」(2730 /二六④ /四七)	左のつかさの御馬、蔵人所の鷹すへて、給り給ふ。みはしのもとに、上達部みこたちつらねて、ろくどもしな／＼に給り給ふ。	左馬寮という役所が所有する馬に、蔵人所という役所が所有する鷹を添えて、〈左大臣〉にあげました。宮殿の階段のところに、上級の貴族や親王たちが立ち並んで、引出物などを位に応じて帝からもらいます。	Ofreció al ministro de la Izquierda un caballo que poseía la oficina llamada Samaryo con un halcón de la Kurododokoro. Los nobles de clase alta y príncipes formaron fila en la escalera y el emperador les concedió regalos de acuerdo con su rango.	Después, el ministro recibió como regalo un caballo y un halcón que pertenecieron a la Corte. También los nobles y los príncipes recibieron uno a uno los regalos del emperador, seleccionados según sus rangos.
67 元服し た光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚 「その夜〜」(2768 /二六⑧ /四七)	その夜、おとゞの御里に源氏の君まかでさせ給ふ。〔割・源は十二才／あふひは十六也〕	その夜、〈左大臣〉の家に〈光源氏〉は行きました。〔〈光源氏〉は十二歳、〈葵の上〉は十六歳です。〕	Por la noche de ese día Hikaru Genji visitó la casa del ministro de la Izquierda. (Hikaru Genji tenía 12 años y Aoi no Ue 16 años.	Luego, por la noche, Hikaru fue a la casa del Ministro de Izquierda. [Hikaru tenía 12 años y Aoi no Ue 16].
68 「この大臣の〜」(2800 /二六⑩ /四八)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ

69 左大臣 家の蔵人少将 は右大臣家の 四の君と政略 結婚して牽制 し合う 「御子ども〜」 (2833 / 二七 ① / 四八)	おとゞの子蔵人少将には、右大臣殿の 四の君をあはせ給へり。	〈左大臣〉の息子の〈蔵人少将〉は、〈右大臣〉の〈四の君〉 と結婚することになりました。	Un hijo del ministro de la Izquierda, Kurodo no Shosho, se casó con la cuarta hija del ministro de la Derecha.	Convinieron entonces que se casarían a su vez el hijo del ministro de Izquierda, Kuroudo no Shōshō, y la cuarta hija del ministro de Derecha.
70 光源氏は 藤壺を理想の 女性として 慕って想い悩 み、葵の上と は疎遠 「源氏の君は 〜」(2863 / 二七④ / 四九)	9 丁裏 源氏の君は、うへのつねにめしまつは させ給へば、心やすく里ずみもし給は ず。藤つぼの御ありさまをたぐひなし とおぼし、さやうならん人をこそ見め、 にるものなくもおはしけるかなとおぼ せば、おほいどのゝ君には心もつかず。 (「里ずみ」から9丁裏)	〈光源氏〉は、帝がいつも自分の側近くにお呼びにな るので、ゆっくりと〈左大臣〉の家に落ち着くことも できません。〈光源氏〉は、〈藤壺〉のことを世の中にめっ たにないものと思つて、〈藤壺〉のような女性と結婚 したい、〈藤壺〉と似ている女性もいないなあと思つ たので、〈葵の上(大殿の君)〉とはあまり親しくなりま せん。	Hikaru Genji no podía instalarse tranquilamente en la casa del ministro de la Izquierda porque el emperador lo llamaba siempre a su lado. [9 丁裏] Para Hikaru Genji, Fujitsubo era una mujer sin igual en el mundo. Quería casarse con una mujer como Fujitsubo pero no había ninguna mujer que se pareciera a Fujitsubo. Por eso, no estaba en muy buenas relaciones con Aoi no Ue (hija de su Excelencia).	Como el emperador quería tener siempre cerca a su hijo Genji... Página 9-ii ...este no pasaba demasiado tiempo en casa del ministro de Izquierda. Además, él admiraba a Fujitsubo que consideraba una mujer maravillosa y soñaba con casarse con alguien como ella, aunque le parecía difícil encontrar una mujer que se le pareciera. Este sentimiento le impidió sentirse cerca de su mujer Aoi no Ue (llamada también Oidono no Kimi).
71 宮中で の光源氏は藤 壺の存在を慰 めとし、左大 臣家は温かく 気遣う 「大人になり 〜」(2912 / 二七⑨ / 四九)	おとなになり給てのちは、有しやうに みずの内にもいれ給はず。御あそびの おり／＼、ことふえのねにきゝかよひ、 ほのかなる御こゑなぐさめにて、内ず みのみこのましようおぼえ給ふ。	大人になってからは、子供の時のように〈藤壺〉と同 じ御簾の中にも入れません。合奏をする時々、琴や 笛の音色に気持ちをこめ、かすかに聞えてくる〈藤壺〉 の声を慰めにして、〈光源氏〉は宮殿でばかり過して います。	Después de llegar a la mayoría de edad, no le permitieron pasar por la persiana de la habitación de Fujitsubo como cuando pequeño. Cuando hacían la música, expresaba sus sentimientos a través de los sonidos de la arpa japonesa y la flauta. Consolándose con la voz de Fujitsubo que oía débilmente, Hikaru Genji se quedaba solamente en el palacio.	Como Hikaru era ya adulto, no se le permitía entrar en los espacios reservados a las damas, separados por cortinas de bambú, para estar con Fujitsubo como antes. Así, pasaba mucho tiempo en el palacio, esperando escuchar de vez en cuando su voz y expresaba sus sentimientos con el koto y la flauta en las sesiones de música.
72 「内裏に は〜」(2976 / 二七⑭ / 五〇)	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
140326_伊 井小見出し付 加	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ

●イタリア語訳『十帖源氏』データ

小見出し	十帖源氏 校訂本文	十帖源氏 現代語訳	十帖源氏 (イタリア語・母語話者/イザベラさん)
ナシ	<p>1 丁裏・2 丁表</p> <p>光源氏物語は、村上天皇十宮大齋院より、一条院の後上東門院へ「めづらかなる草子や侍る」と、御所望の時、式部をめして「何にてもあたらしく作りてまいらせよかし」と、おほせらる。式部、石山寺にこもりて、此事を祈り申す。折しも、八月十五夜の月、湖水にうつりて、物語の風情空にかかひければ、先、須磨の巻より書たると也。巻の数は天台六十巻、題号は四諦の法門「有門空門亦有亦空門非有非空門」也。一には詞をとり、二には歌をとり、三には詞と歌とを取、四には歌にも詞にもなき事也。始は「藤式部」といひしを、此物語一部の内むらさきの上の事を勝れておもしろく書たるゆへ、「紫式部」といひかへらるゝ也。観音ノ化身ト云々。檀那院僧正天台一心三観血脉許可也。堤中納言兼輔一惟正〔傍・＝因幡守〕一為時〔傍・＝越前守〕一女〔傍・＝紫式部〕母は為信〔傍・＝摂津守〕女堅子</p> <p>(「四には」から2丁表)</p>	<p>『源氏物語』の誕生</p> <p>〈村上天皇〉の十番目のお姫さまである〈選子内親王(大齋院)〉が、〈一条院〉の後である〈藤原彰子(上東門院)〉に「新作の物語はありませんか」と、お望みになりました。〈彰子〉は、《紫式部》を呼んで「がんばって《物語》を新しく作ってきてください」と、おっしゃいました。《紫式部》は、《石山寺》に滞在して、この事を祈りました。すると、《八月十五夜の満月》が、《琵琶湖》の水面に映って、物語の風情が頭に浮かんだので、まず、須磨の巻から書いたそうです。『源氏物語』の巻の数は天台の教典六十巻をもとにして(現在の『源氏物語』は五十四巻)、巻の名前は四諦の法門、「有門、空門、亦有亦空門、非有非空門」という文を参考にして名付けました。第一には物語の本文から、第二には和歌から、第三には本文と和歌から、第四には和歌にも本文にもないところから、巻の名前を決めました。もともと「藤式部」と呼ばれていたのを、この物語の一部で〈紫の上〉のことをとてすばらしく書いていたことから、「紫式部」と呼び名が変えられたのです。〈紫式部〉は、観音の化身だという伝説もあります。檀那院僧正に天台一心三観の血脉を許されたのです。</p> <p>紫式部の系図</p> <p>堤中納言兼輔一因幡守惟正一越前守為時一女(紫式部) 母は摂津守為信女の堅子です。</p> <p>(注) 一般的な説とは異なる部分もあります。類似した系図が『源氏物語』の注釈書である、『湖月抄』にあります。</p>	<p>La nascita del Romanzo di Genji</p> <p>Ōsaiin, la decima principessa dell'Imperatore Murakami, chiese alla dama di corte Fujiwara Akiko se non vi fosse per caso qualche nuova storia da leggere. Akiko mandò quindi a chiamare Murasaki Shikibu e la pregò di scrivere un nuovo romanzo. Murasaki Shikibu si trovava allora nel tempio di Ishiyama e pregava intensamente di poter adempiere al suo compito. D'un tratto, la sera del quindicesimo giorno di agosto, l'immagine della luna piena riflessa sulla superficie del lago di Biwa le fu di ispirazione e nella sua mente iniziò a prendere forma un nuovo intreccio. Quel paesaggio le ricordò le atmosfere di Suma e, per questo, si dice che abbia preso a scrivere proprio dal capitolo ambientato in quei luoghi. Il Romanzo di Genji consta di sessanta capitoli, struttura basata su quella del testo sacro della scuola buddhista Tendai (di questi soltanto cinquantaquattro capitoli sono sopravvissuti fino a noi). I nomi scelti come titoli dei vari capitoli sono invece basati sulle Quattro Verità, ovvero la "Verità del dolore", la "Verità dell'origine del dolore", la "Verità della cessazione del dolore" e la "Verità della via che porta alla cessazione del dolore".</p> <p>La scelta dei nomi dei capitoli è poi stata condotta prendendo spunto da elementi citati nel testo oppure nelle poesie,</p> <p>[Sezione 2, fronte]</p> <p>oppure da elementi che compaiono sia nel testo che nelle poesie o in nessuno dei due, per un totale di quattro differenti modelli. L'autrice veniva originariamente chiamata "Fuji Shikibu", ma venne poi soprannominata "Murasaki Shikibu", in riferimento a uno dei personaggi più caratteristici dell'opera. Vi sono anche leggende che narrano che fosse l'incarnazione della divinità Kannon. Le fu anche dato il permesso, a opera di una delle più importanti autorità del tempio Danna, di accedere alle scritture sacre della scuola buddhista Tendai.</p> <p>Questo il lignaggio della dama</p> <p>Tsutomu Chūnagon Kanesuke – Inabanokami Koremasa – Echizenokami Tametoki – Murasaki Shikibu</p> <p>Sua madre era Katako, figlia di Settsunokami Tamenobu.</p> <p>*Nota: Alcuni elementi differiscono dalle teorie più tradizionali. Una simile genealogia può essere consultata nell'opera "Kogetsushō", commentario della Storia di Genji.</p>

ナシ	2丁裏 絵	〈絵1〉八月十五日の夜、石山寺で、紫式部が、『源氏物語』を書きはじめた場面 (2丁裏)	(Illustrazione 1) Illustrazione che mostra Murasaki Shikibu mentre inizia a scrivere il Romanzo di Genji nella quindicesima notte di agosto presso il tempio Ishiyama.
1 ある帝の御代に、身分は高くない更衣への帝寵を女御方は憎悪する 「いづれの御時〜」(0001 / 五① / 一七)	3丁表 いづれの御時にか、女御かうみ、あまたさぶらひ給ける中に、いとやんごとなきゝにはあらぬが、すぐれてときめき給ふありけり。〔割・いづれの御時とは、醍醐天皇をさしていへり。／時めき給ふとは、「きりつぼの更衣」の事也。〕 梨壺、照陽舎。 桐壺、淑景舎。 藤壺、飛香舎。 梅壺、凝花舎。 雷鳴壺、襲芳舎。 此きりつぼにすみ給ふかうみを、御てうあひあれば、きりつぼのみかどゝも申也。あまたの女御かうみそなみて、 (「いづれ」から3丁表)	(桐壺) いつの時代のことでしょうか、女御や更衣などといったお后が大勢いらした中に、特に高貴な身分ではなく、帝にとでも愛されていた女性がいまして。〔「いつの時代」とは、〈醍醐天皇〉の時代のことです。帝に愛されていた女性というのは、〈桐壺の更衣〉です。〕 宮殿の梨壺という建物は照陽舎の別名です。桐壺という建物は淑景舎の別名、藤壺という建物は飛香舎の別名、梅壺という建物は凝花舎の別名、雷鳴壺という建物は襲芳舎の別名です。(お后の名前は、それぞれの住んでいる建物の名前前で呼びます) この桐壺に住んでいる更衣を愛されたので、この時の帝のことを〈桐壺の帝〉ともいいます。大勢の女御や更衣たちはうらやんで、毎日〈桐壺の更衣〉が帝の近くにいることに、嫉妬をしておりました。	Kiritsubo Durante il regno di un certo Imperatore, non so bene quando, tra le numerose spose imperiali e dame di corte ce n'era una che, pur non essendo di rango molto elevato, era particolarmente amata dall'Imperatore. (Il periodo a cui ci si riferisce è quello in cui regnò l'imperatore Daigo. La dama particolarmente amata dall'Imperatore è la dama Kiritsubo.) Il palazzo era costituito da numerosi edifici, ognuno con un nome distinto. Vi era l'edificio Shōyōsha, conosciuto anche con il nome di Nashitsubo, l'edificio Shigeisya, conosciuto con il nome di Kiritsubo, l'edificio Higyōsya, conosciuto con il nome di Fujitsubo, l'edificio Gyōkasya, conosciuto con il nome di Umetsubo e infine l'edificio Shihōsya, conosciuto con il nome di Kannari no Tsubo. (Le donne venivano chiamate con il nome dell'edificio in cui vivevano.) Dato che la donna tanto amata dall'Imperatore abitava gli appartamenti dell'edificio Kiritsubo, a volte ci si riferisce a lui come "l'Imperatore di Kiritsubo". Molte delle spose imperiali e delle altre dame provavano invidia ed erano gelose del fatto che Kiritsubo fosse sempre vicina all'Imperatore.
2 帝から寵愛される桐壺更衣は、周囲からの嫉妬が集中し病弱となる 「朝夕の宮仕〜」(0031 / 五④ / 一七)	3丁裏 あさゆふの御みやづかへにつけても、心をのみうごかし、うらみををふつもりにや、あつく成ゆき、〔割・をもき／病也〕物心ほそげに、里がちなるを、みかど、いよ／＼あはれにおぼして、人のそしりをも、えはゞからせ給はず (「おぼして」から3丁裏)	そうやって、他の后たちの恨みをたくさん作った結果でしょうか、体が弱くなっていきました。〔重い病気です〕心細い感じがして、実家に帰っていることが多い〈桐壺の更衣〉のことを、帝は、これまで以上にたまらなくお思いで、人々が悪口を言っている、愛情をお止めになることができません。	Forse proprio per colpa di quegli aspri sentimenti, la salute di Kiritsubo iniziò a deperire. (Si tratta di una malattia grave.) In preda alla malinconia Kiritsubo si ritirò più volte presso la sua famiglia ma l'Imperatore, che l'amava sempre di più, per quanto si sparlasse di lui, non smetteva di manifestare il suo amore.
3 中国の楊貴妃まで引き合いに出される桐壺更衣は、帝の愛情に頼る 「唐土にも〜」(0073 / 五⑧ / 一七)	「もろこしにもかゝる事のおこりにこそ、世もみだれ、あしかりけれ」と、あぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃のためしもひき出つべう成ぬ。	中国で〈玄宗皇帝〉を夢中にさせた〈楊貴妃〉の話に例えられそうになりました。	Anche in Cina era capitato che storie d'amore fossero state cause di tumulti e gravi problemi, per cui tutti erano molto preoccupati per quello che stava succedendo e c'era chi citava l'esempio di Yang Guifei, la donna che aveva fatto impazzire l'Imperatore Xuan Zong.
4 桐壺更衣は父大納言の没後に入内し、孤立無援の宮中で心細い生活 「父の大納言〜」(0103 / 五⑫ / 一八)	此かうみの父はなくなり、母北方、いにしへのよしあるにて、御かた／＼にもをと給はねど、事とある時は、より所なく、心ぼそげ也。	この〈桐壺の更衣〉の父はすでに死んでいて、母親の〈北の方〉は、由緒のある家柄出身であり、古風な人なので、他のお后たちにも負けないようにしています。しかし、何か大事なことがある時には、頼るところがなく、心細い様子です。	La dama Kiritsubo era orfana di padre, ma sua madre, una donna all'antica che proveniva da una famiglia di nobili origini, aveva fatto sì che sua figlia non avesse niente da invidiare alle altre dame. Nonostante questo, ogni volta che succedeva qualcosa non c'era nessuno su cui potesse contare e questo la rendeva ancora più sconsolata.

<p>5 美しい玉の男御子が誕生し、帝は第一皇子よりこの弟宮を寵愛する 「前の世にも〜」(0136 / 六① / 一八)</p>	<p>さきの世にも御契りやふかゝりけん、きよなる玉のをのこみこさへ生れ給ぬ。〔割・其を光君と／いふ也〕一のみこは、右大臣の女御の御はらにて、うたがひなきまうけの君と、かしづき聞ゆれど、此君の御にほひには、ならび給ふべくもあらず。</p>	<p>〈桐壺の帝〉と〈桐壺の更衣〉は)前世でも約束が深かったのでしょうか、美しい玉のような皇子までも生まれました。〔この人を〈光源氏(光る君)〉といいます。〕第一皇子は、〈右大臣の女御〉が生んだ子供なので、間違いなく皇太子になるだろうと、世間の人々も大切にしているのですが、この〈光源氏(若君)〉の美しさには、とうてい勝つことができません。</p>	<p>Kiritsubo e l'Imperatore, forse per via di un forte legame nato in una vita precedente, concepirono un bambino bello come una gemma preziosa. (Questo bambino verrà poi chiamato Genji il Principe Splendente.) Tutti erano convinti che il primogenito dell'Imperatore, nato dall'unione con la figlia del Primo Ministro della Destra, sarebbe stato il successore al trono, ma egli non uguagliava affatto la bellezza del nuovo nato.</p>
<p>6 帝は桐壺更衣を厚遇し、弘徽殿女御は我が皇子の立場に疑いを抱く 「はじめより〜」(0184 / 六⑦ / 一九)</p>	<p>4 丁表 此みこ生れ給て後は、みかど御心ことにをきてたれば、坊にもみ給ふべきなめりと、一のみこの女御は、おぼしうたがへり。 (「御心」から4丁表)</p>	<p>〈光源氏(若君)〉が生まれてからというもの、帝はこの〈光源氏〉をとでも大切にしていらっしゃいましたので、〈光源氏〉が、皇太子になるのではないかと、第一皇子の母である後は、心の中で心配しています。</p>	<p>Dopo la nascita del principino, l'Imperatore non aveva occhi che per lui, tanto che la dama madre del primogenito iniziò ad aver paura che quest'ultimo sarebbe diventato successore al trono.</p>
<p>7 「人より先に〜」(0248 / 六③ / 一九)</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>8 更衣の局は東北隅の淑景舎で、参上の折毎に酷い嫌がらせを受ける 「御局は桐壺〜」(0288 / 七③ / 二〇)</p>	<p>あまたの御かた／＼を過させ給ひ、ひまなき御前わりに、人の心をつくし給ふも、ことはり也。あまりうちしきりまうのぼり給ふおり／＼は、うちはしわた殿、こゝかしこの道にあやしきわざをして、御をくりむかへの人のきぬのすそ、たへがたう、まさなき事もあり、又ある時は、えさらぬめだうの戸をさしこめ、こなたかなた心をあはせ、はしたなめわづらはせ給ふ時もおほかり。</p>	<p>帝が、たくさんのお后たちの部屋の前を素通りして、何度も何度もお通いになることに、他のお后たちが嫉妬しているのも、もっともなことです。あまりに〈桐壺の更衣〉が帝に呼び寄せられる回数が多くなっていきます。すると、打橋や渡殿といった宮殿の廊下など、〈桐壺の更衣〉が通る、あちらこちらの道にいたずらがされていました。それは、見送りや出迎えの侍女の着物の裾が、まったく我慢できなくなるような、とんでもないことなどです。またある時は、〈桐壺の更衣〉が、絶対通らなければならない中廊下の扉を閉めて、こちらとあちらで協力し、〈桐壺の更衣〉を閉じ込めて、ひどい目にあわせたり困らせたりすることも多いのです。</p>	<p>L'Imperatore passava continuamente davanti alle stanze di molte dame senza curarsi affatto di loro ed è pertanto comprensibile che esse fossero gelose. Gli incontri tra la dama Kiritsubo e l'Imperatore erano davvero troppo numerosi. Per questo si verificavano degli spiacevoli inconvenienti sulle passerelle e sui corridoi coperti del palazzo quando Kiritsubo si trovava a passare. I lembi delle vesti delle dame che l'accompagnavano durante le sue uscite erano ridotti in uno stato pietoso. Alle volte era capitato che delle dame si mettessero d'accordo per bloccare il corridoio da cui la dama Kiritsubo doveva passare, provocandole enorme disagio.</p>
<p>9 帝は桐壺更衣への虐待を不憚に思い、局を淑景舎から後涼殿に移す 「ことにふれ〜」(0344 / 七⑨ / 二〇)</p>	<p>4 丁裏 みかどいとゞあはれと御らんじて、後涼殿にもとよりさぶらひ給ふ。かうみを、ほかにうつし、此かうみのうへつばねに給はる。そのうらみ、ましてやらんかたなし。 (「そのうらみ」から4丁裏)</p>	<p>帝はますます〈桐壺の更衣〉をかわいそうに思って、後涼殿という所に前から部屋をもらっていた身分が低い后を、他の場所へ移し、〈桐壺の更衣〉のもう一つの部屋としました。部屋を他に移された後の恨みは、とうてい晴れることがありません。</p>	<p>L'Imperatore, che soffriva a vedere questi episodi, decise quindi di spostare una dama di rango inferiore che risiedeva negli appartamenti del Kōrōden, assegnando quella residenza a Kiritsubo.</p>
<p>10 若宮は三歳で袴着の儀式をし、成長と共に憎しみが賞賛へと変わる 「この御子三つ〜」(0378 / 七⑩ / 二一)</p>	<p>みこ、みつに成給ふとし、御はかまぎの事、一の宮のにもをとらず。御かたち心ばへ、ありがたくめづらしきまで見え給へば、此君をば人々もえそねみあへず。</p>	<p>〈光源氏(若君)〉は、三歳になった年、袴着の儀式をしました。その様子は、第一皇子がこの儀式をしたときにも負けないほどです。見た目や性格が、めったにないほど素晴らしいので、〈光源氏(若君)〉を他のお后たちも憎むことができません。</p>	<p>Quando il principino compì tre anni ci fu la cerimonia per la prima vestizione degli hakama. La cerimonia fu tanto sfarzosa quanto quella celebrata per il primogenito. Il piccolo principe era talmente bello e aveva un carattere talmente affabile che era impossibile per le altre dame portargli rancore.</p>

<p>11 若宮が三歳の夏に桐壺更衣は重病になり、御子を宮中に残して退出 「その年の夏〜」(0439 / 八② / 二一)</p>	<p>其年の夏、御母御休所〔割・更衣の／事也〕、わづらひて里へまかでんとし給へど、つねのあつしさに、御めなれて、いとまさらにゆるさせ給はず。日々ををもり給て、いとよはうなれば、更衣の母、なく／＼そうして、みこをはとゞめさせ、みやす所ばかりまかで給ふ。</p>	<p>その年の夏、母の御息所〔〈桐壺の更衣〉のことです。〕は、病気になるて実家へ帰ろうとしますが、〈桐壺の更衣〉がいつも体が弱いことに、帝は慣れてしまい、帰ることを絶対に許しませんでした。日に日に病気が重くなってきて、ひどく衰弱したので、〈桐壺の更衣〉の母は、泣きながらお願いをして、〈光源氏（若君）〉を宮中に残したまま、〈桐壺の更衣（御息所）〉だけ帰ることになりました。</p>	<p>Durante quell'estate la dama Kiritsubo si ammalò ed esprese il desiderio di andare presso la sua famiglia d'origine ma l'Imperatore, che era avvezzo alla salute malferma della dama, non le permise di allontanarsi. Con il passare dei giorni la malattia diventava sempre più grave e la dama sempre più debole, tanto che sua madre si vide costretta a pregare l'Imperatore piangendo affinché la lasciasse andare, cosa che le fu concessa a patto di lasciare a corte il principino.</p>
<p>12 帝は絶え入らんばかりの桐壺更衣をご覧になるにつけ途方に暮れる 「限りあれば〜」(0488 / 八⑦ / 二二)</p>	<p>5丁表 うつくしき人の、おもやせあるかなきかにきえものし給ふを御覧じて、きしかたゆくすゑ、よろづの事を契りの給へと、御いらへもきこえず。まゆもたゆげにて、われかの気しき也。かぎりあらんみちにも、をくれさきだゞじとちぎらせ給けるを、打すてゞはえゆきやらじと、の給はするを、 〔「にて」から5丁表〕</p>	<p>帝は、かわいらしい〈桐壺の更衣〉が、やつれて意識がはっきりしない様子を御覧になって、今までのことや将来のこと、いろいろなことを約束したりするけれども、〈桐壺の更衣〉は、返事をすることもできません。つらそうな顔をして、意識を失った状態です。帝が「死への旅にも、共に行こうと約束しましたのに、私を残してはいけませんよ」と、おっしゃるのを、</p>	<p>L'Imperatore vedendo l'amata dama emaciata e quasi senza vita, parlò di tutto quello che era avvenuto tra loro e fece promesse per il futuro, ma essa non aveva neppure la forza di rispondere. Aveva un'espressione sofferente e si trovava in uno stato di incoscienza.</p>
<p>13 輦車の宣旨を受けた桐壺更衣は、帝に歌を残して里邸へと退出する 「輦車の宣旨〜」(0537 / 八⑭ / 二二)</p>	<p>女も、いみじと見奉りて、 かぎりとて わかるゝみちのかなしきに いかまほしきはいのちなりけり てくるまのせんじなどの給はせて、まかで給ふ。 ※「てくるまのせんじ」は本文（池田本）では、更衣の歌より前におかれている。</p>	<p>〈桐壺の更衣（女）〉も、とても嬉しく思い、次のように和歌を詠みました。 かぎりとてわかるゝみちのかなしきにいかまほしきはいのちなりけり 帝は、〈桐壺の更衣〉に輦車に乗ることを許し、〈桐壺の更衣〉は実家に帰りました。</p>	<p>L'Imperatore disse "Ricorda che ci siamo promessi di percorrere insieme anche il viaggio verso la morte, non lasciarmi da solo" e la dama, felice di udire quella parole, rispose con la seguente poesia. (和歌を省略)</p>
<p>14 心塞がる帝は眠れぬ夏の短夜に、桐壺更衣の死を聞き悲嘆に暮れる 「御胸つと〜」(0608 / 九⑦ / 二三)</p>	<p>みかど、御むねふたがり、御使の行かふ程もなきに、夜なかすぐる程に、たえはて給ふ、きこしめす。御心まどひ、何事もおぼしわかれず。</p>	<p>帝は、胸がつまるほどに悲しんでいます。帝のお見舞いの使者が行って帰って来るほどの時間もたっていないほどに、「夜中を過ぎるころに、〈桐壺の更衣〉が息を引き取りになりました」と、お聞きになります。帝は、気も動転して、もう何の分別もつきません。</p>	<p>L'Imperatore fece salire la dama su una portantina e lasciò che tornasse a casa. Egli era prostrato dalla tristezza. Non passò neppure il tempo necessario perché il messaggero inviato giungesse a destinazione che gli venne comunicato che la dama era spirata. L'Imperatore era disperato e non sapeva cosa fare.</p>
<p>15 三歳の若宮は母君の死により、服喪のため宮中から里邸へ退出する 「御子は〜」(0644 / 九⑪ / 二四)</p>	<p>5丁裏 みこをばかくても御らんぜまほしけれど、れいなき事なれば、まかでさせ給ふ。みこも何事ともおぼさず。人々のなきまどひ、うへも御涙のひまなくなかれおはしますを、あやしと見奉給ふ。〔「ひまなく」から5丁裏〕</p>	<p>帝は、〈光源氏（若君）〉をこんな時でも御覧になりたいと思うけれど、喪中の人が宮殿にいることは前例にないので、〈光源氏〉を母君の実家に帰らせました。〈光源氏（若君）〉も何が起きたのかもわかりません。〈光源氏〉は、周りの侍女たちが泣きわめき、帝も涙がとまらなくなっていっしょのを、何だか変だと見えています。</p>	<p>Egli voleva almeno vedere il piccolo Principe, ma le convenzioni impedivano che persone in lutto vivessero nel palazzo, quindi il bambino fu mandato presso la casa della nonna materna. Egli non riusciva a comprendere cosa fosse successo. Vedendo le donne intorno a lui piangere e l'Imperatore disperato, capì che era successo qualcosa di grave.</p>
<p>16 桐壺更衣の葬送は鳥辺野で行われ、母は娘と一緒に泣き焦がれる 「限りあれば〜」(0684 / 一〇② / 二四)</p>	<p>かぎりあれば、をたぎといふ所にて、けぶりになし奉る。母君も、おなじ煙にと、なきこがれ、御をくりの女ぼうの車に、したひのりて出給ふ。</p>	<p>きまり通り、愛宕という所で、葬儀を行いました。母君も、〈桐壺の更衣〉と一緒に、火葬の煙となって消えてしまいたいと、泣いて、見送りの侍女の車に、追いつくようにして乗ってでかけました。</p>	<p>La cerimonia funebre fu celebrata ad Atago, come volevano le convenzioni. La madre della dama che, avrebbe voluto anch'essa dissolversi in fumo con la figlia, piangendo prese posto sulla portantina insieme alle altre dame per dirigersi quanto più in fretta possibile.</p>
<p>17 「むなしき〜」(0712 / 一〇⑤ / 二四)</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>	<p>ナシ</p>
<p>18 桐壺更衣に三位追贈の宣命がくだり、女御更衣たちは憎しみを増す 「内裏より御使〜」(0741 / 一〇⑧ / 二五)</p>	<p>内より御使ありて、三位のくらみをくり給ふ。</p>	<p>帝から使者があって、亡くなった〈桐壺の更衣〉に三位の位をお贈りになりました。</p>	<p>Venne un messo dell'Imperatore per comunicare che alla dama scomparsa era stato conferito il terzo rango di corte.</p>

19 聡「もの思ひ知〜」 (0775 / 一〇⑩ / 二五)	ナシ	ナシ	ナシ
20 「はかなく〜」(0809 / 一一① / 二六)	ナシ	ナシ	ナシ
21 帝は若宮を恋しがり、 野分だつた暮に靱負命婦を 更衣の里に遣はす 「一の宮を〜」(0850 / 一一⑤ / 二六)	みかどは、一の宮を見給ふにも、わか宮の御恋しさのみおぼし出つゝ、女ばう、めのとなどをつかはし、ありさまきこしめす。野分たちはた寒き夕ぐれ、ゆげいの命婦をつかはさる。	帝は、第一皇子を御覧になつても、〈光源氏(若君)〉を恋しく思い出してばかりいて、侍女や乳母などをつかつて、〈光源氏〉の様子をお聞きになります。風が強くて肌寒い夕暮れに、〈靱負の命婦〉という女官を〈桐壺の更衣〉の母の所へ行かせました。	L'Imperatore quando incontrava il suo primogenito non poteva fare a meno di pensare all'altro suo figlio e mandava dame e balie per avere notizie del bimbo. Una sera in cui il vento faceva rabbrivire la pelle l'Imperatore mandò una dama, Yugei no Myōbu, presso la casa della madre di Kiritsubo
22 「夕月夜の〜」(0877 / 一一⑨ / 二六) ~ 25 「『しばしは〜」(0987 / 一二⑦ / 二八)	ナシ	ナシ	ナシ
26 帝からの文は、若宮と 共に参内するようにと懇ろ に促すものだった 「目も見え〜」(1043 / 一二⑬ / 二八)	勅書の歌 みやぎ野の露ふきむすぶ風のをとに小萩がもとをおもひこそや れ	帝からの手紙に書いてあった和歌です。 みやぎ野の露ふきむすぶ風のをとに 小萩がもとをおもひこそ やれ	Nella lettera che aveva affidato alla donna vi era la seguente poesia (和歌を省略)
27 「命長さの〜」(1094 / 一三⑥ / 二九) ~ 30 「上もしか〜」(1256 / 一四⑪ / 三一)	ナシ	ナシ	ナシ
31 月が沈む頃、命婦の歌 を受け祖母君は惜別の情を 車中の命婦に伝える 「月は入り方〜」(1315 / 一五④ / 三二)	6丁表 命婦、かうみの母にあひて、 すゝむしのこゑのかぎりをつくしてもながき夜あかずふるなみ だかな くうは君 いとゞしく虫のねしげきあさぢふに露をきそふる雲のうへ人 (「すゝむし」から6丁表)	〈靱負の命婦〉が、〈桐壺の更衣〉の母に会つて詠んだ和歌です。 すゝむしのこゑのかぎりをつくしても ながき夜あかずふるなみだかな くうは君 いとゞしく虫のねしげきあさぢふに 露をきそふる雲のうへ人	La dama recitò invece la seguente poesia (和歌を省略) In risposta alla poesia di Yugei no Myōbu la madre della dama scomparsa compose i seguenti versi. (和歌を省略)
32 靱負命婦の帰参に際し て、祖母君は桐壺更衣の形 見の装束等を贈る 「をかしき御贈〜」(1358 / 一五⑩ / 三二)	をくり物あるべきおりにもあらねばとて、かうみの残しをき給へる 御さうぞく御くしあげのてうど、そへ給ふ。	良い贈り物をする場合にはありませんので、〈桐壺の更衣〉が残した着物や装飾品を、手紙にそえてあげました。	Dato che non era il caso di mettersi a fare acquisti di doni preziosi, la donna accompagnò la lettera con delle vesti e accessori che erano appartenuti alla figlia.
33 「若き人々〜」(1378 / 一五⑫ / 三二)	ナシ	ナシ	ナシ
34 桐壺帝は女房と語り明 かし長恨歌の絵を見ながら 命婦の帰参を待つ 「命婦は〜」(1420 / 一六③ / 三三)	みかどはふけてもおほとのごもらず、せんざいの花御覧ずるやうに て、女ばう四五人さぶらはせて、御物語せさせ給へり。	帝は夜更けになつてもおやすみにならず、庭先に植えてある花を眺めながら、侍女を四、五人そばに控えさせて、お話をしていらっしゃいました。	Intanto, per quanto fosse notte fonda, l'Imperatore non riusciva a prendere sonno e, osservando i fiori del giardino, conversava con quattro, cinque dame di compagnia.

35 帝は里邸の様を命婦から聞き、とり乱した祖母君の返書に心を遣う 「いと細やか〜」(1469 / 一六⑧ / 三三)	御返し奉るうば君の歌。 あらき風ふせぎしかげのかれしよりこはぎがうへぞしづごゝろなき	帝の手紙に対して詠んだ、〈桐壺の更衣〉の母の歌です。 あらき風ふせぎしかげのかれしよりこはぎがうへぞしづごゝろなき	Questa è la poesia che la madre della dama scomparsa compose in risposta a quella ricevuta dall'imperatore. (和歌を省略)
36 「いとかうしも〜」 (1504 / 一六⑩ / 三四)	ナシ	ナシ	ナシ
37 帝は若宮の将来を約束し、贈物から長恨歌の叙に思いを重ねて歌う 「かくても〜」(1543 / 一七③ / 三四)	6 丁裏 うば君の物語わか君の事などそうして、をくりもの御らんぜさすれば、 〈御〉 たづねゆくまぼろしもがなつてにても玉のありかをそことしるべく (「うば君」から6 丁裏)	〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)の話や〈光源氏(若君)〉のことなどを話して、贈り物を見せると、帝は次のように和歌を詠みました。 〈帝〉 たづねゆくまぼろしもがなつてにても 玉のありかをそことしるべく	[6 丁裏] Ascoltando il racconto di quanto era avvenuto presso la dimora della madre della dama scomparsa e osservando i doni ricevuti l'Imperatore compose i seguenti versi. (和歌を省略)
38 「絵に描ける〜」(1572 / 一七⑦ / 三五)	ナシ	ナシ	ナシ
39 帝の心を踏みにじるように、弘徽殿女御は傍若無人な遊び事に耽る 「風の音〜」(1615 / 一七⑫ / 三五)	一の宮の御母、弘徽殿は、久しくうへの御つばねに参り給はず、月のおもしろきにあそび〔傍・あ=管絃〕をぞし給ふ。人々かたはらいたしと、きゝけり。	第一皇子の母、〈弘徽殿の女御〉は、長い間帝の側に呼ばれず、月の美しい夜に合奏をして遊んでいます。殿上人や侍女たちは、「具合の悪いことだ」と、その合奏の音を聞いています。	La dama Kokiden, madre del primogenito, che da molto tempo non riceveva visite da parte dall'Imperatore, passò la notte, illuminata da una splendida luna, facendo musica. I nobili e le altre dame ascoltavano l'esibizione musicale, pensando però che non fosse appropriato vista la situazione.
40 更衣の里邸に思いを馳せて悲しみ歌う帝は、眠ることすらできない 「月も入りぬ〜」(1660 / 一八③ / 三六)	みかど、うば君のもとをおぼして、 雲のうへもなみだにくるゝ秋の月いかですむらんあさぢふのやど	帝は、〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)の生活を心配して、次のように和歌を詠みました。 雲のうへもなみだにくるゝ秋の月 いかですむらんあさぢふのやど	L'Imperatore, preoccupato per la madre della dama scomparsa, compose i seguenti versi. (和歌を省略)
41 「朝に起き〜」(1693 / 一八⑦ / 三六)	ナシ	ナシ	ナシ
42 「さるべき契〜」(1731 / 一八⑫ / 三七)	ナシ	ナシ	ナシ
43 若宮参内で不吉な予感、弘徽殿女御は息子が四歳の春に立坊し安堵 「月日経て〜」(1762 / 一九② / 三七)	7 丁表 月日へて、わか君参り給ぬ。きよらにおよずけ給へば、いとゆゝしうおぼしたり。あくる年の春、一の宮春宮にさだまり給ふにも、此君をひきこさまほしうおぼせど、世のうけひくまじき事を、はゞかり給て、色にもいでさせ給はず。 (「さだまり」から7 丁表)	月日が過ぎて、〈光源氏(若君)〉が宮殿にやってきました。美しく成長したので、神につれていかれたりしないかと大変不安に思われました。翌年の春、第一皇子が皇太子に決まったときも、帝は、〈光源氏〉に第一皇子を越えさせたいと思いましたが、世間が納得しないことだと、遠慮して、表情にも出しません。	Passarono giorni e mesi e finalmente il piccolo Principe poté ritornare al palazzo. Era diventato talmente bello che tutti avevano paura che potesse essere rapito da una qualche divinità. La primavera dell'anno successivo, quando si decise che il primogenito avrebbe ereditato il trono imperiale, l'Imperatore aveva pensato di favorire il giovane Principe, ma aveva poi desistito, dato che nessuno l'avrebbe accettato e cercava di mascherare quei suoi sentimenti.
44 祖母君は期待も虚しく潰え若宮六歳の年に無念さを残したまま死去 「かの御祖母〜」(1805 / 一九⑥ / 三七)	彼うば君、なぐさむかたなきゆへにや、うせ給ぬれば、又これを、かなしびおぼす。	あの〈桐壺の更衣〉の母(祖母君)は、心を慰めることもなかったからでしょうか、亡くなってしまいましたので、またしても帝は、悲しいことだと思いにあります。	La madre della dama scomparsa, forse per il troppo dolore, era anch'essa venuta a mancare, gettando nuovamente l'Imperatore nello sconforto.

45 若宮七歳の読書始めの後、その聡明さと美貌に弘徽殿女御も感服 「今は内裏に〜」(1844 / 一九⑩ / 三八)	若君七つに成給へば、文はじめせさせ給て、	《光源氏(若君)》は《七歳》になりましたので、読書始めの儀式をして、	Il giovane Principe, che aveva compiuto sette anni, partecipò alla cerimonia per la prima lettura.
46 若宮は二人の皇女方より優雅で学問や音曲にも秀でる超人さを発揮 「女御子たち〜」(1904 / 二〇② / 三九)	御かくもんはさる物にて、琴笛のねにも、雲井をひゞかし給へり。	勉強はいうまでもなく、琴や笛といった楽器もよくできて、宮殿の人々を驚かせました。	Non soltanto era molto bravo nello studio, ma era anche molto portato a suonare strumenti musicali quali il koto e il flauto, tanto da stupire tutte le persone della corte.
47 高麗の相人は鴻臚館で右大弁の子として来た若宮を覩て不思議がる 「そのころ〜」(1955 / 二〇⑥ / 三九)	其比こまうどのさうにん奉りて、	そのころ《高麗人の相人》がやってきて、	In quel periodo venne in visita un indovino del paese di Koma
48 「弁も、いと〜」(2019 / 二〇⑬ / 四〇)	ナシ	ナシ	ナシ
49 「帝、かしくき〜」(2075 / 二一⑤ / 四〇)	ナシ	ナシ	ナシ
50 帝は宿曜道の判断も参考に、若宮を皇位継承権のない源氏にと決断 「際ことに〜」(2120 / 二一⑩ / 四一)	此君のざえかしく、かたちのきよらなるにめで奉りて、ひかる君とつけ奉り、をくり物どもさゞげけり。此君をたゞ人にはあたらしけれど、源氏になしたてまつるべくおほしをきてたり。	この《光源氏(若君)》の学問の才能がすぐれていて、《容姿も美しい》のをほめたたえて、「光る君」と名付け、贈り物などを差し上げました。帝は、この《光源氏(光る君)》を皇族から外するのは惜しいけれど、源氏の名字をつけて、臣下にするように決めました。	che rimase molto stupito dal talento che il giovane principe dimostrava nello studio. Egli lodò anche la sua bellezza e gli attribuì il soprannome di "Genji il Principe Splendente", dandogli anche molti doni. Per l'Imperatore allontanare il giovane dalla linea di successione al trono fu una decisione molto difficile, ma decise infine di dargli il cognome di "Genji" e di affidargli un rango di corte.
ナシ	7丁裏 絵	〈絵2〉光源氏七歳のときに、迎賓館で、光源氏が高麗の相人に占いをしてもらっているところ(7丁裏)	(Illustrazione 2) Il Principe Genji all'età di sette anni, durante l'incontro con l'indovino di Koma presso il Geihinkan.
51 更衣が忘れられず世を疎ましく思う帝に、先帝の四の宮の噂が届く 「年月にそへ〜」(2147 / 二一⑬ / 四一)	8丁表 年月にそへて、御休所の御事わすれさせ給はず、御心なぐさむかたなし。先帝の四の君、御かたちすぐれ給へる事を、ないしのすけ、そうして奉らせ給へり。〔割・其を藤つぼと申也〕 〔「年月」から8丁表〕	年月が過ぎても、帝は、〈桐壺の更衣(御息所)〉のことを忘れることがなく、心をなぐさめることもできません。前の天皇の四番目のお姫さまで、見た目がとても美しいということを、〈典侍〉という女官が、主人である帝に伝えました。〔その人を、〈藤壺〉といいます。〕	Anche se passavano gli anni e i mesi, l'Imperatore non riusciva a dimenticare la dama Kiritsubo. La dama Naishinosuke gli disse che la quarta figlia del precedente Imperatore era molto bella. (La principessa veniva chiamata Fujitsubo.)
52 典侍は先帝の四の宮を亡き更衣に生き写しだと奏上し帝の気を引く 「母后世になく〜」(2173 / 二二② / 四一)	昔の御休所によく似給て、	昔の〈桐壺の更衣(御息所)〉によく似ていて、	Si diceva che la principessa Fujitsubo assomigliasse molto alla dama scomparsa ed era inoltre
53 「母后、「あな〜」(2233 / 二二⑧ / 四二)	ナシ	ナシ	ナシ
54 「さぶらふ人々〜」(2264 / 二二⑫ / 四二)	ナシ	ナシ	ナシ

55 藤壺は皇女の身ゆえに誰に気兼ねもなく、帝の寵愛もしいに移る 「これは人の〜」(2295 / 二三② / 四三)	人のきはもまさり給へば、をのづから御心うつりにけり。	身分も高いので、帝は、〈藤壺〉に自然とお気持ちに移っていきました。	di grado molto elevato e questo portò l'Imperatore a nutrire un forte interesse nei suoi confronti.
56 源氏の君は常に天帝の傍にいて、若く美しい藤壺の姿を透き見する 「源氏の君は〜」(2327 / 二三⑤ / 四三)	源氏の君は、みかどの御あたりさし給はねば、藤つぼにもしげくわたり給ふ。	〈光源氏〉は、帝の近くから離れないので、〈藤壺〉のところにも《帝》と一緒によくついでいきます。	Dato che il Principe Genji era sempre al fianco dell'Imperatore gli capitava spesso di visitare insieme a lui gli appartamenti di Fujitsubo.
57 「母御息所も〜」(2370 / 二三⑨ / 四三)	ナシ	ナシ	ナシ
58 「上も、限りなき〜」(2396 / 二三⑩ / 四四)	ナシ	ナシ	ナシ
59 弘徽殿と藤壺が険悪な中、世の人は光る君とかかやく日の宮と賞讃 「こよなう〜」(2433 / 二四① / 四四)	光君に立ならび、御おぼえもとり／＼なれば、かやく日の宮と賞讃 きこゆ。	〈光源氏〉と〈藤壺〉は、《帝》にそれぞれにとても愛されているので、〈藤壺〉のことを、〈光源氏〉の「光る君」に対して「輝く日の宮」とも呼びました。	Entrambi erano particolarmente amati dall'Imperatore e Fujitsubo, riprendendo il soprannome di Genji, veniva chiamata "Principessa del sole radioso".
60 光源氏は十二歳で東宮に劣らぬ元服の儀式を帝の主導で執り行う 「この君の〜」(2483 / 二四⑤ / 四四)	源氏の君、十二にてげんぶくし給ひ、	《光源氏》は、《十二歳》で《元服》と呼ばれる成人式をして、	Quando il Principe Genji compì dodici anni si svolse la cerimonia di vestizione degli hakama
61 「おはします〜」(2537 / 二四⑩ / 四五)	ナシ	ナシ	ナシ
62 「かうぶり〜」(2580 / 二五① / 四五)	ナシ	ナシ	ナシ
63 左大臣は娘を春宮ではなく光源氏の元服の添い臥しに心積もりする 「引き入れの〜」(2623 / 二五⑥ / 四六)	ひきいれの大臣の、みこばらの姫君を、そひぶしにとさだめ給ふ。 〔割・其あふひの上也〕	《左大臣(引き入れの大臣)》の娘で、皇女の母親をもつお姫さまを、妻にすることが決定しました。〔その妻が〈葵の上〉です。〕	e gli venne data in moglie la figlia del Ministro della Sinistra, che lo aveva assistito durante il rito, e la cui madre era stata una principessa imperiale. (La moglie di Genji veniva chiamata Aoi no Ue)
64 「さぶらひに〜」(2658 / 二五⑨ / 四六)	ナシ	ナシ	ナシ
ナシ	8 丁裏 絵	〈絵3〉光源氏十二歳のときに、宮殿で光源氏が元服の儀式をした場面(8 丁裏)	(Illustrazione 3) Il principe Genji all'età di dodici anni, durante la cerimonia di vestizione degli hakama svoltasi nel palazzo reale.
65 左大臣は帝から二人の結婚を催促されると返歌で応諾して拜舞する 「御盃のついで〜」(2703 / 二五⑭ / 四七)	9 丁表 〈御〉 いとくなき はつもとゆひにながきよを ちぎるこゝろは むすびこめつや 左大臣御返し。 むすびつる 心もふかきもとゆひに こそむらさきの いろし あせずは (〈御〉から9 丁表)	〈帝〉 いとくなきはつもとゆひにながきよを ちぎるこゝろはむすびこめつや 〈左大臣〉は返事として次のように歌を詠みました。 むすびつる心もふかきもとゆひに こそむらさきのいろしあせずは	Imperatore (和歌を省略) Il Ministro della Sinistra compose i seguenti versi come risposta. (和歌を省略)

66 左大臣や親王たちは禄を賜い、この日の元服の儀式は春宮より盛大 「左馬寮の〜」(2730 / 二六④ / 四七)	左のつかさの御馬、蔵人所の鷹すへて、給り給ふ。みはしのもとに、上達部みこたちつらねて、ろくどもしな／＼に給り給ふ。	左馬寮という役所が所有する馬に、蔵人所という役所が所有する鷹を添えて、〈左大臣〉にあげました。宮殿の階段のところに、上級の貴族や親王たちが立ち並んで、引出物などを位に応じて帝からもらいます。	Da parte delle Scuderie Imperiali della Sinistra gli fu donato un cavallo e da parte della Cancelleria un falco. Sulla scalinata del palazzo imperiale stavano allineati i nobili di alto rango e gli appartenenti alla famiglia imperiale e ognuno di loro ricevette dei regali da parte dell'Imperatore, a seconda del rango di appartenenza.
67 元服した光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚 「その夜〜」(2768 / 二六⑥ / 四七)	その夜、おとゞの御里に源氏の君まかでさせ給ふ。〔割・源は十二才／あふひは十六也〕	その夜、〈左大臣〉の家に〈光源氏〉は行きました。〔〈光源氏〉は十二歳、〈葵の上〉は十六歳です。〕	Quella sera il principe Genji si recò a casa del Ministro della Sinistra. (Genji aveva dodici anni mentre Aoi no Ue sedici.)
68 「この大臣の〜」(2800 / 二六⑩ / 四八)	ナシ	ナシ	ナシ
69 左大臣家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う 「御子ども〜」(2833 / 二七① / 四八)	おとゞの子蔵人少将には、右大臣殿の四の君をあはせ給へり。	〈左大臣〉の息子の〈蔵人少将〉は、〈右大臣〉の〈四の君〉と結婚することになりました。	Il figlio del Ministro della Sinistra, che era funzionario della Cancelleria, si sposò con la quarta figlia del Ministro della Destra.
70 光源氏は藤壺を理想の女性として慕って想い悩み、葵の上とは疎遠 「源氏の君は〜」(2863 / 二七④ / 四九)	9 丁裏 源氏の君は、うへのつねにめしまつはさせ給へば、心やすく里ずみもし給はず。藤つぼの御ありさまをたぐひなしとおぼし、さやうならん人をこそ見め、にるものなくもおはしけるかなとおぼせば、おほいどのゝ君には心もつかず。 (「里ずみ」から9 丁裏)	〈光源氏〉は、帝がいつも自分の側近くにお呼びになるので、ゆっくりと〈左大臣〉の家に落ち着くこともできません。〈光源氏〉は、〈藤壺〉のことを世の中にめつたにないものと思って、〈藤壺〉のような女性と結婚したい、〈藤壺〉と似ている女性もいないなあと思うので、〈葵の上(大殿の君)〉とはあまり親しくなりません。	Poiché l'Imperatore voleva che il Principe Genji fosse sempre al suo fianco, gli era impossibile persino trattenerli a lungo presso la dimora del Ministro della Sinistra. Principe Genji pensava che non ci potesse essere nessuna donna al mondo in grado di uguagliare Fujitsubo, e gli sarebbe piaciuto sposare qualcuna che le assomigliasse, anche se gli pareva impossibile che potesse esserci una persona tale, e proprio a causa di questi suoi sentimenti non riusciva a entrare in confidenza con Aoi no Ue.
71 宮中での光源氏は藤壺の存在を慰めとし、左大臣家は温かく気遣う 「大人になり〜」(2912 / 二七⑨ / 四九)	おとなになり給てのちは、有しやうにみすの内にもいれ給はず。御あそびのおり／＼、ことふえのねにきゝかよひ、ほのかなる御こゑ、なぐさめにて、内ずみのみこのましようおぼえ給ふ。	大人になってからは、子供の時のように〈藤壺〉と同じ御簾の中にも入れません。合奏をする時々、琴や笛の音色に気持ちをこめ、かすかに聞えてくる〈藤壺〉の声を慰めにして、〈光源氏〉は宮殿でばかり過ごしています。	Ora che era diventato adulto non gli era permesso di visitare le stanze di Fujitsubo come quando era bambino. Egli passava quasi tutto il suo tempo a corte e, quando gli capitava ogni tanto di partecipare a qualche esibizione musicale, metteva tutta la sua anima per trarre dei suoni meravigliosi dal koto o dal flauto, tendendo l'orecchio per catturare il suono lontano della voce di Fujitsubo, unica sua consolazione.
72 「内裏には〜」(2976 / 二七⑭ / 五〇)	ナシ	ナシ	ナシ
140326_伊井小見出し付加	ナシ	ナシ	ナシ

執筆者一覧（敬称略・掲載順）

伊藤 鉄也

（国文学研究資料館／総合研究大学院大学・教授）

ラリー・ウォーカー

（京都府立大学・准教授）

緑川 眞知子

（早稲田大学・非常勤講師）

清水 憲男

（上智大学・名誉教授）

ジョン・C・カーン

（ケニオン大学・教授）

猪瀬 博子

（ダーラナ大学・上級講師／グラナダ大学・客員教員）

村上 明香

（インド国立アラールハーバード大学 大学院博士後期課程）

巖 教欽

（東京大学大学院 博士課程）

浅川 槇子

（国文学研究資料館・研究員）

◆ 編集後記

『海外平安文学研究ジャーナル』第3号をお届けします。

今号は、昨年度から取り組んでいる『十帖源氏』についての翻訳レポートや、スペイン現地からの平安文学事情という「生の声」にこだわった論稿を掲載しました。あわせて第5回研究会の成果として、最古の英訳である末松謙澄訳『源氏物語』の貴重な初版本の紹介と、研究会の成果として、近くて遠い国であるモンゴルの言葉に翻訳された『源氏物語』についての論稿も掲載することができました。

8月22日に開催された第6回研究会で、暫定版を公開することになったために、いつも以上に締め切りに余裕のない計画になってしまったことをお詫び申し上げます。

またご多忙の中、原稿をお寄せくださった方々にこの場を借りてお礼を申し上げます。第4号もよろしくお願い致します。

(浅川槿子)

今回のジャーナルでは、これまでと異なり第6回研究会の様子をお届けしています。前年より翻訳を進めていた「桐壺」の各国語訳データをもとに、さまざまな観点からの質疑が行われ、大変内容の濃い時間となりました。当日の雰囲気をも少しでも伝えられていれば幸いです。

また、本号には巻末に『源氏物語』『十帖源氏』『桐壺』の翻訳データを添付しました。膨大なデータとなるため、今回はスペイン語・イタリア語のみをA4サイズにて一覧表にしました。印刷の際にはご注意ください。今後、その他の言語についても添付していきたいと思っております。

本号には、前号にも増して多くの方々にご協力をいただきました。ありがとうございます。

(加々良恵子)

研究組織

研究代表者

伊藤 鉄也 (国文学研究資料館／総合研究大学院大学・教授)

研究分担者

海野 圭介 (国文学研究資料館／総合研究大学院大学・准教授)

野本 忠司 (国文学研究資料館／総合研究大学院大学・准教授)

連携研究者

マイケル, ワトソン (明治学院大学・教授)

清水 婦久子 (帝塚山大学・教授)

荒木 浩 (国際日本文化研究センター・教授)

ラリー, ウォーカー (京都府立大学・准教授)

藤井 由紀子 (清泉女子大学・准教授)

高田 智和 (国立国語研究所・准教授)

研究協力者

高木 香世子 (マドリード・アウトノマ大学・准教授)

緑川 眞知子 (早稲田大学・講師)

須藤 圭 (立命館大学・助教)

川内 有子 (立命館大学・大学院生)

テレサ, マルティネス (立命館大学衣笠総合研究機構・客員研究員)

庄 婕淳 (立命館大学・大学院生)

浅川 槇子 (国文学研究資料館・研究員)

加々良 恵子 (国文学研究資料館・補佐員)

科学研究費補助金 基盤研究 (A) 2013 年度研究報告書
「海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国語翻訳に関する総合的調査研究」
課題番号 [25244012] 研究代表者 伊藤 鉄也

海外平安文学研究ジャーナル 3.0

Journal of Heian Literature Research Overseas Vol.3.0

2015 年 09 月 30 日 発行

〈非売品〉

発行所 人間文化研究機構 国文学研究資料館

〒 190-0014 東京都立川市緑町 10-3

電話 050-5533-2900

<http://www.nijl.ac.jp/>

編集兼発行者 国文学研究資料館 伊藤鉄也

<http://genjiito.org/>

(「海外平安文学研究ジャーナル」 <http://genjiito.org/journals/>)

I S S N 2 1 8 8 - 8 0 3 5

© 伊藤鉄也

本書を無断で複写・複製・転載することは
法律で認められた場合を除き禁じられています。